

太宰府・国分地区遺跡群 4

—国分千足町遺跡第1・2・3・7次調査—

平成29(2017)年

太宰府市教育委員会

太宰府・国分地区遺跡群 4

—国分千足町遺跡第1・2・3・7次調査—

平成29(2017)年

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の国分地区で実施した発掘調査の報告書です。

調査地は、筑前国分寺跡の南西に位置し、現在まで周辺一帯では弥生時代から古代にかけての遺跡が確認されています。特に平成24年には本遺跡の北東隣接地で戸籍計帳関係木簡が出土し、話題となりました。

今回の調査では、竪穴住居跡や弥生土器が多量に廃棄された流路など弥生時代中期の集落跡が確認されました。また、奈良時代の掘立柱建物群も確認され、古代大宰府における筑前国分寺周辺部の土地利用を考える上で貴重な成果が得られています。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

結びになりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成29年3月
太宰府市教育委員会
教育長 木村甚治

例言

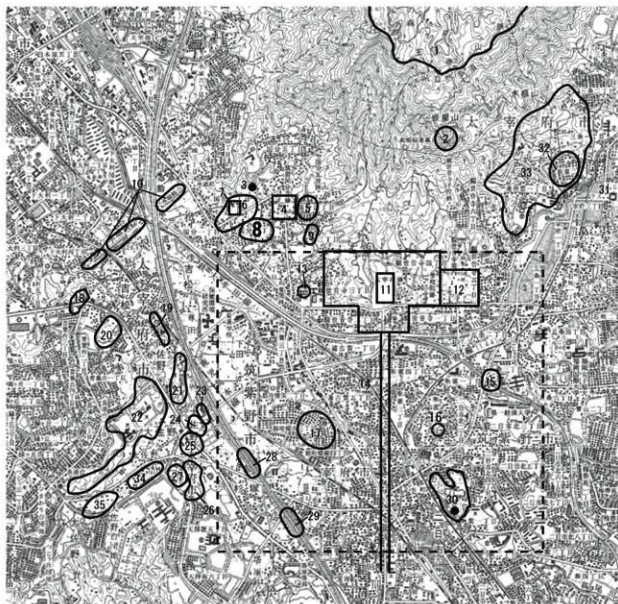
1. 本書は太宰府市国分3丁目で行われた国分千足町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り G.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。第1次調査については、測量データ不足で明確な座標値を得ていない。
3. 遺構の実測及び写真撮影は山本、狭川、緒方、城戸、山村、宮崎が行った。
4. 遺構の空中写真撮影は、PHOTO オオツカ、術空中写真企画が行った。
5. 出土した鉄製品の保存処理は主に榊タクトが行った。
6. 遺物の実測は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、山村、宮崎が行った。
7. 表入力・写真整理は瀬戸口みな子、市川晴美、吉村有紀が行った。
8. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。
9. 遺物の写真撮影は㈱システム・レコ（代表 仲村定美）、山村が行った。
10. 図の浄書は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、山村、宮崎が行った。
11. 本書に用いた分類は以下のとおり。
 - 須恵器・・・太宰府市教委『宮ノ本遺跡Ⅱ -窯跡篇-』（太宰府市の文化財第10集）1992
 - 土器・・・太宰府市教委『太宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第7集）1983
 - 瓦・・・・九州歴史資料館『太宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』2000
12. 執筆は、第1・2・7次調査を宮崎、第3次調査を山村、編集は宮崎が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	3
II、調査体制	4
III、調査および整理方法	5
IV、調査報告	
1、国分千足町遺跡第1次調査	6
(1) 調査に至る経緯	6
(2) 基本層位	6
(3) 検出遺構	6
(4) 出土遺物	12
(5) 小結	41
2、国分千足町遺跡第2次調査	46
(1) 調査に至る経緯	46
(2) 基本層位	47
(3) 検出遺構	47
(4) 出土遺物	50
(5) 小結	55
3、国分千足町遺跡第3次調査	59
(1) 調査に至る経緯	59
(2) 基本層位	59
(3) 検出遺構	59
(4) 出土遺物	65
(5) 小結	81
4、国分千足町遺跡第7次調査	87
(1) 調査に至る経緯	89
(2) 基本層位	89
(3) 検出遺構	89
(4) 出土遺物	96
(5) 小結	122
5、国分千足町遺跡第4次調査出土遺物補遺	139
V、調査まとめ	140

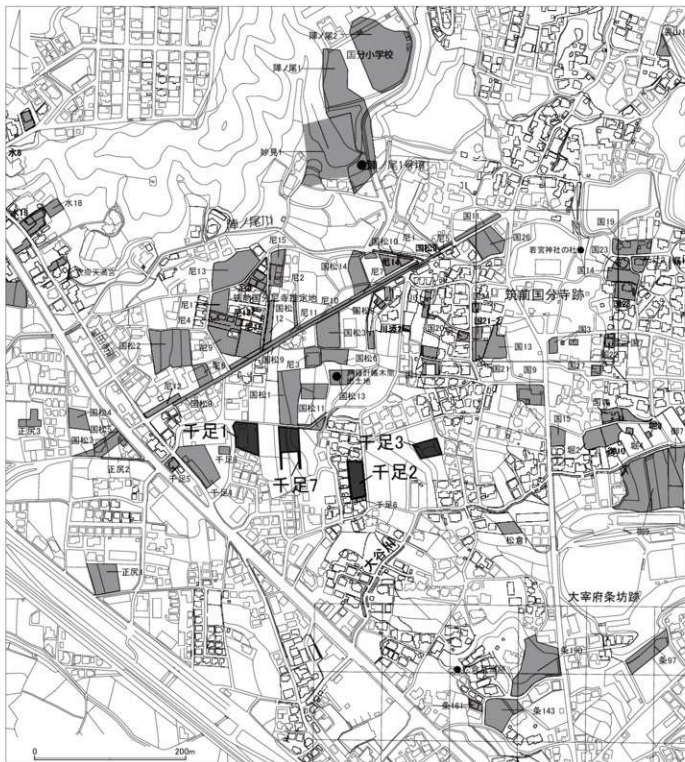
写真図版・・・主な遺構および遺物写真

附録・・・CD（遺構および遺物写真）



- | | | | |
|-----------------|-------------------|-----------|--------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 剣塚遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 権振遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾一号墳 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯・峯畑遺跡 (●は軍火跡) |
| 4. 筑前園分寺跡 | 13. 遠賀団印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府桑坊跡(方形破線内) | 23. 難川遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 園分松本遺跡 | 15. 君畑遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前園分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 8. 園分千足町遺跡(報告地) | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御笠団印出土地 | 18. 神ノ前遺跡 | 27. 殿城戸遺跡 | |

Fig. 1 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)



略称

- | | |
|------------|------------|
| 国松…国分松本遺跡 | 御…御笠団印周辺遺跡 |
| 正尻…国分正尻遺跡 | 堀…堀田遺跡 |
| 千足…国分千足町遺跡 | 条…大宰府条坊跡 |
| 尼…筑前国分尼寺跡 | 水…水城跡 |
| 国…筑前国分寺跡 | 川…川添遺跡 |
| 辻…辻遺跡 | 尾…尾遺跡 |
| | 見…見遺跡 |

Fig.2 調査地と周辺調査地点 (1/5000)

1、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に脊振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。

調査地がある国分地域は、四王寺山の南西裾に位置し、南西部が開けるものの、それ以外は四王寺山から派生した丘陵に囲まれ、その最上部に筑前国分寺が建立されている。土地は扇状地形で緩やかに御笠川に向かって傾斜し、北端を陣ノ尾川、南端を大谷川が流れている。この陣ノ尾川、大谷川に囲まれた穏やかな微高地には、試掘調査等によって、流路が幾条走ることがわかってきている。

この地域で最も古い遺物は後期旧石器で、尼寺跡第16次調査で三稜尖頭器が出土しているものの、その後の縄文土器同様に僅かに散見される程度である。

弥生時代前期後葉から中期になると、この地域で主たる遺構群である集落や甕棺墓が見られる。特に国分松本遺跡第4次調査一帯では、100基を超える弥生中期の甕棺墓が営まれる。市内でこのような大規模な甕棺墓群が確認されているのは、このほかに市東部高雄地区の吉ヶ浦遺跡だけである。また、大規模ではないものの、北側の陣ノ尾丘陵では甕棺や銅戈が出土している。その頃の集落は、甕棺墓群の東側に展開している。

弥生時代後期になると遺構は見られなくなるが、弥生時代終末期から古墳時代初期になると、再び遺構が確認され、方形の堅穴住居や箱式石棺墓群が展開している。

古代になると、弥生時代の集落と重なるように遺構が広がっている。扇状地の奥にある筑前国分寺は、天平13(741)年に聖武天皇の詔によって全国に建立された国分寺のひとつで、西海道では早い段階で造営されていたと考えられている。

その筑前国分寺前面からは、水城東門を抜けた官道に向かう東西道路が確認されていて、その途中で国分寺から西に400m付近には筑前国分尼寺の推定地があり、調査で確認できた尼寺の存続時期は8世紀後半から9世紀後半の100年間と推定されている。

筑前国分寺の東方には国分寺の瓦を供給したとされる瓦窯があるほか、周辺の丘陵斜面では大宰府政庁関連施設の瓦を供給したとみられる10世紀代の瓦窯(松倉、坂本、末木など)が確認されている。

また、国分松本遺跡からは13点の木簡が出土した。なかでも戸籍・計帳関係木簡は、嶋郡の戸口の変化を記録したもので、「嶋評」「進大貳」などの文字があり、685～701年の間に記録されたものと推定されている。

太宰府地域には古代に大宰府政庁が置かれ、南側には大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。政庁の博多側には水城跡の土塁が築造されたほか、大野城・基肆城・阿志岐城などの古代山城が周囲に山々に築造されるなど、いわゆる羅城を形成していたと考えられる。

参考文献

- 太宰府市『大宰府市史 考古資料編』1992年
- 太宰府市教委『筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡』1981年
- 太宰府市教委『筑前国分尼寺跡Ⅱ』1991年
- 太宰府市教委『筑前国分尼寺跡Ⅲ』1995年
- 太宰府市教委『辻遺跡』1997年
- 太宰府市教委『太宰府・国分地区遺跡群1』2004年
- 太宰府市教委『太宰府・国分地区遺跡群2』2006年

II、調査体制

(昭和60 / 1985年度)・・・第1次調査

総括	教育長	藤 寿人		
庶務	社会教育課長	花田勝彦		
	文化財係長	黒板 力		
	主 事	岡部大治		
調査	技 師	山本信夫	狭川真一	

(平成2 / 1990年度)・・・第2次調査

総括	教育長	長野治己		
庶務	教育部長	西山義則		
	社会教育課長	関岡 勉		
	文化財係長	鬼木富士夫		
	主任主事	岡部大治		
	主 事	白水伸司		
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利
	技 師	緒方俊輔	山村信榮	
	技師(嘱託)	中島恒次郎	狭川麻子	

(平成3 / 1991年度)・・・第3次調査

総括	教育長	長野治己		
庶務	教育部長	中川シヅ子		
	文化課長	佐藤恭宏		
	埋蔵文化財係長	富田譲		
	文化振興係長	大田重信		
	主任主事	岡部大治	川谷豊	
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利
	技 師	山村信榮	中島恒次郎	緒方俊輔 塩地潤一

(平成24 / 2012年度)・・・第7次調査

総括	教育長	關 敏治 (～12月21日)
		木村甚治 (12月25日～)
庶務	教育部長	古野洋敏
	文化財課長	菊武良一
	文化財副課長	城戸康利
	保護活用係長	友添浩一
	調査係長	山村信榮
	事務主査	橋川史典
	主 事	古川あや

調査	主任主査	井上信正	
	技術主査	高橋学	宮崎亮一
	主任技師	遠藤茜	
	(文化財課事務取扱)	中島恒次郎	(都市計画課 景観・歴史のまち推進係 係長)

(平成 28 / 2016 年度)・・・報告書発行

総括	教育長	木村甚治	
庶務	教育部長	緒方扶美	
	文化財課長	城戸康利	
	保護活用係長	江坂研治	
	調査係長	山村信榮	
	事務主査	廣見京子	
	主事	有田ゆきな	久木原駿史 伊藤裕貴
調査	主任主査	井上信正	高橋学 宮崎亮一
	主任技師	遠藤茜	
	技師	沖田正大	中村茂央
	(文化財課事務取扱)	中島恒次郎	(都市計画課 景観・歴史のまち推進係 係長)

Ⅲ、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市の文化財第14集 1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会 2001年9月改訂）に基づいている。

調査では、表土剥ぎをバックホーによって行った。遺構図や土層図は適時1/10、1/20等で記録し、遺構全体図は人力によって1/20の縮尺で実測を行った。第1次調査については、一部測量データ不足があり、明確な座標値を得ることができていない。

整理に際し、基本的に時期が特定できそうな遺物については、実測作業を行っている。一緒に出土している遺物については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。なお、第1・7次調査については、多量の弥生土器が出土したため、選別段階で特徴的なもの、希少なものを、口縁部や底部については、1/4以上残存しているものを抽出し、中でもより残りが良いものを実測し報告している。

これらの調査で得られた出土遺物や実測図等は太宰府市文化ふれあい館に保管している。

IV、調査報告

1、国分千足町遺跡第1次調査

(1) 調査に至る経緯

太宰府市大字国分千足町 495-23、495-24（現在、国分3丁目）である。筑前国分寺の南西側に広がる扇状地状のなだらかな土地で、北側200m付近には筑前国分尼寺推定地があり、西側200mには古代官道東門ルート推定ラインや江戸時代の日田街道が存在する。

調査原因は、共同住宅建設に伴うもので、1985（昭和60）年4月19日、確認調査を実施したところ、弥生中期の遺構が確認されたため、調査を実施することとなった。調査期間は1985（昭和60）年5月16日～6月17日で、開発者の費用負担で実施した。調査対象面積1176㎡、調査面積281㎡。調査は山本信夫、狭川真一が担当した。

なお、調査現場の測量については、一部データ不足があり、明確な座標値を得ることができていない。

(2) 基本層位

調査前は水田で、厚さ0.2mの耕作土を除去すると厚さ0.2mの床土がある。床土には瓦片を含んでいる。そして、その直下に礫入りの茶色粘質土の地山が広がり、遺構が確認された。調査区北側には流路(SX001)が検出されたが、その上面だけ灰褐色土が覆い、北側に向かってそれは厚くなり、北端で厚さ0.6mになっている。SX001の埋土を除去すると地山の砂層となる。

(3) 検出遺構

竪穴住居

ISI015 (Fig. 5, Pla.1)

東西2.55m、南北2.6mの方形で、深さは最大0.1mだが、大きく削平を受けているのか、全体的に0.02m前後しか残っていない。埋土を除去すると底面には浅いビットと北端に深い土坑を検出したが、柱穴と明確に言えるものは確認できていない。埋土状況や焼土などの生活痕跡状況については、記録がなく不明だが、形状から竪穴住居として報告する。

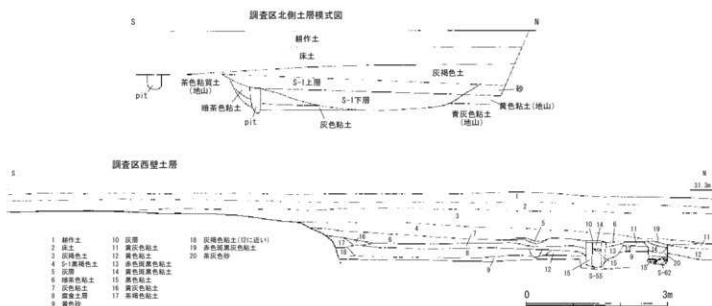


Fig. 3 第1次調査区土層実測図 (1/80)

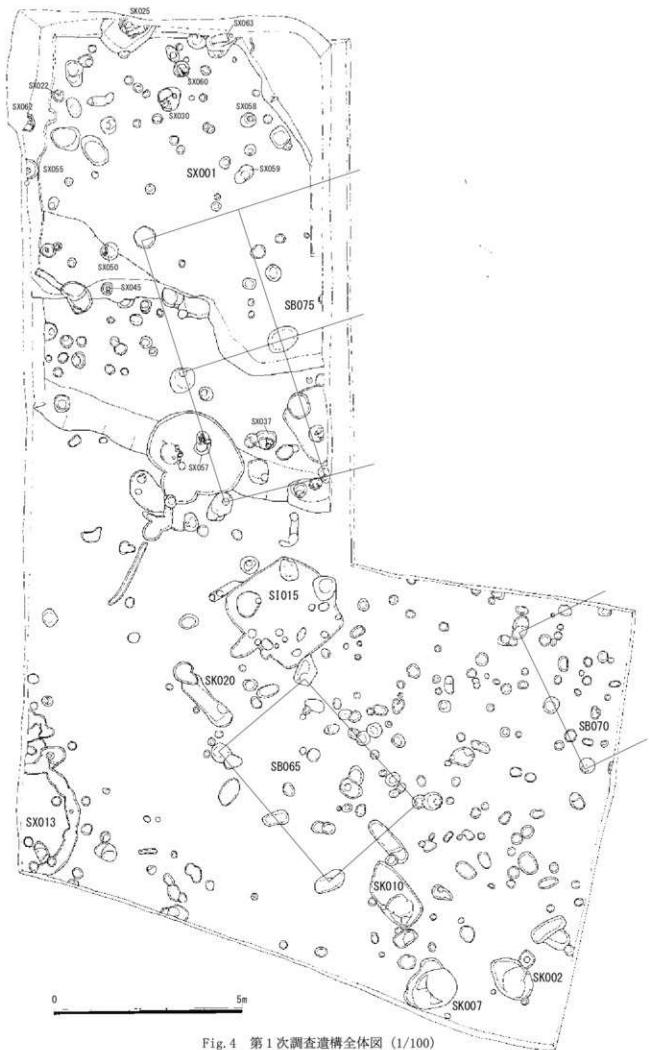


Fig.4 第1次調査遺構全体図 (1/100)

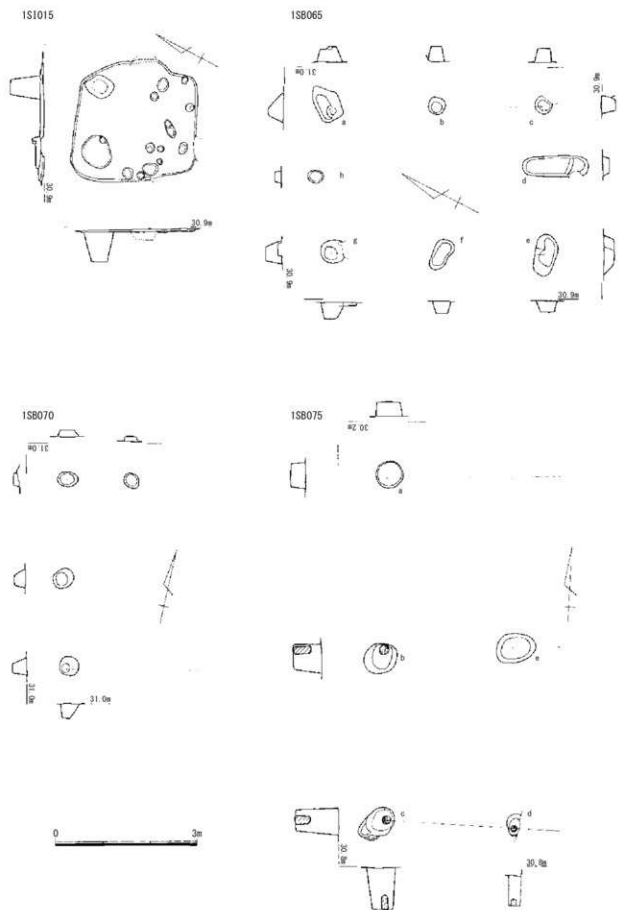


Fig. 5 IS1015、ISB065・070・075 遺構実測図 (1/80)

掘立柱建物

1SB065 (Fig.5)

整理時に確認したもので、東西柱間は約2.2mで、全体規模は2間×2間(約3×4.4m)である。掘り方は径0.35～0.5m前後の円形で、深さ0.3m前後である。

1SB070 (Fig.5)

整理時に確認したもので、調査区端のため、全体規模は2間×2間以上(南北4×東西1.7m以上)。南北柱間は2.1mと1.9m、東西柱間は1.4mである。掘り方の大きさは0.3～0.4m、深さ0.1～0.3mの円形である。

1SB075 (Fig.5)

整理時に確認したもので、流路(1SX001)の埋土に切り込んでいるため、流路埋没後に建てられた建物である。2間×2間以上の総柱掘立柱建物と推測したが、柱穴のひとつは削平され残っていないという前提のため、当初から柱穴がないとなると、1間×2間以上の掘立柱建物となる。柱材が3つの掘り方に残されていて、柱材は径0.14～0.18mで、東西柱間は2.7m、南北柱間は3.6mである。掘り方は径0.48～0.6m、最深0.9mの円形である。

土坑

1SK002 (Fig.6)

長軸1.32m、短軸0.9mの楕円形土坑で、土坑底の一部がさらに深くなり、全体で深さ0.2mである。

1SK007 (Fig.6)

東西1.45m、南北1.3m、深さ0.5mの円形状の土坑である。土坑内は2つの土坑からなっている。

1SK010 (Fig.6)

長軸1.9m、短軸0.96mの長方形の土坑で、土坑底の一部がさらに深くなり、全体で深さ0.24mである。

1SK020 (Fig.6)

長軸1.66m以上、短軸0.57m、深さ0.25mの長方形の溝状の土坑である。

1SK025

調査区端で検出され、さらに調査区外に続いている。短軸1.15m、長軸1.3m以上、深さ0.44mの長方形の土坑である。底面には長軸に沿って木材が検出された。

流路

1SX001

調査地の北側で検出され、さらに調査区外に続いている。深さは北側に向かって深くなり、最深0.75mである。埋土は黒褐色土で、それを除去すると暗茶色粘土面があり、そこに柱材が残る柱穴が検出されている。遺物は弥生中前期半の土器を多く含むが、摩滅が目立ち、接合する土器片は多くないため、この地より上方から流されてきた遺物である可能性が高い。暗茶色粘土の下層は灰色粘土や腐食土が堆積し、腐食土には自然木や加工木材が含まれていたが、土器は含まれていなかった。それを除去すると砂層の地山となる。

その他の遺構

1SX013 (Fig.6)

幅0.35m前後、深さ0.1m前後の溝が、外周で径約3mの円形を呈している。調査区端のため全形は明確でない。

柱穴

柱材が遺存するビットで、SX001の流路内で確認されたものがほとんどで、地下水があったことによ

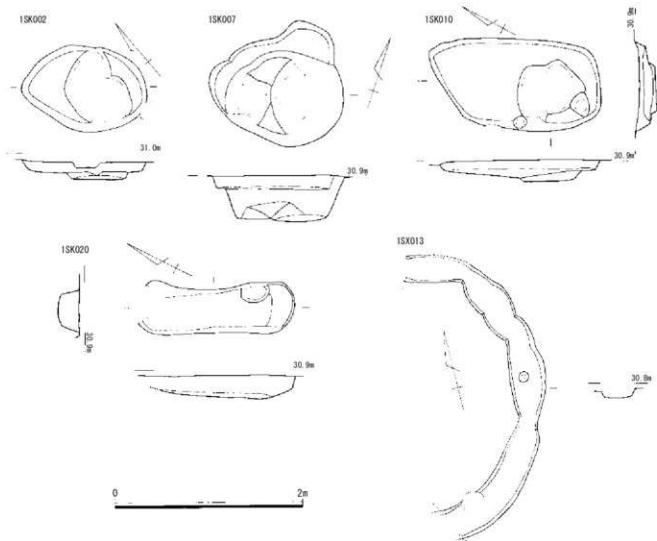


Fig.6 ISK002・007・010・020、ISX013 遺構実測図 (1/40)

り、腐食することなく残存したものと推測される。ここで報告するのは、現状で建物として成立しなかったものだが、自然木ではなく明らかに人為的に造られており、何らかの建造物であったものと推測される。

ISX022 (Fig. 7)

径 0.32m、深さ 0.42m の円形ピットである。径 0.08m、残存高 0.2m の丸太材が遺存していた。丸太先端部は加工され尖らせていた。埋土下半は灰色砂、上部は黒色粘土である。

ISX037 (Fig. 7)

径 0.35m 前後、深さ 0.65m のピットで、径 0.12m、残存高 0.2m の丸太材が遺存していた。丸太材の底には 0.2m 程の礫が据えられている。埋土は礫の下半が暗灰色粘土、それより上は黒色粘土である。

ISX045 (Fig. 7)

SX001 の埋土に掘り込まれた円形ピットで、径 0.3m 前後、深さ 0.48m、径約 0.1m、残存高 0.32m と 0.2m の 2 本の木材があり、木材の下部は切断加工されている。埋土は黒色粘土。

ISX055 (Fig. 7)

調査区端にあり、径 0.52m の円形ピットで、中央に径 0.17m、残存高 0.28m の丸太材が遺存する。埋土は黒色粘土。

ISX058 (Fig. 7)

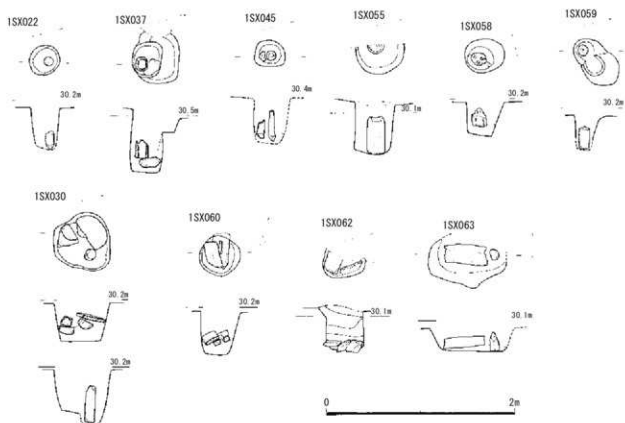


Fig. 7 柱穴・木材検出ピット遺構実測図 (1/40)

径0.36～0.42m、深さ0.37mの円形ピットで、径0.16m、残存高0.2mの丸太材が遺存する。埋土は材の下は灰色砂質、材周囲は黒色粘土である。

1SX059 (Fig. 7)

径0.3m、深さ0.36mの円形ピットで、径0.11m、残存高0.26mの丸太材が遺存する。埋土は灰色砂質。

木材検出ピット

1SX030 (Fig. 7, Pla. 2)

径0.6m、深さ0.4mの円形土坑で、土坑内に扁平板材などが置かれていた。埋土は板材より下が灰色砂礫で、板材を含む上面は黒色粘土である。また、同じ土坑内に柱材がある。

1SX050

径0.48m、深さ0.1mの円形ピットで、木片が遺存していた。

1SX057

大きさ0.6×0.35m、深さ0.3mの楕円形ピットで、ピット内には木片が並べられている。

1SX060 (Fig. 7, Pla. 2)

径0.4m、深さ0.45mの円形ピットで、ピット内には加工された板材が2枚遺存していた。埋土は板材より下部は灰色砂、上部は黒色粘土である。礎板の可能性も考えられる。

1SX062 (Fig. 7)

調査区端で確認された径0.46mの円形ピットで、板材が2枚遺存していた。礎板の可能性も考えられる。

1SX063 (Fig. 7)

幅0.6m、長さ0.82m以上、深さ0.21mの楕円形状の土坑である。土坑内には径0.1m前後の丸太材と長さ0.46m、幅0.2×0.1mの木材が遺存する。埋土は底面近くが灰色砂礫で、それ以外は黒色粘土である。

(4) 出土遺物

竪穴住居

1S1015 出土遺物 (Fig. 8)

弥生土器

甕 (1, 2) 1 は口縁部の小片である。2 は平坦な底面を持つ。

支脚 (3) 小片で形状が明確ではないが、支脚の底部と推測される。復元底径 6.4 cm。

土製品

投弾 (4) 縦 4.15 cm、最大径 2.2 cm。色調は淡灰色や暗灰色を呈する。

1S1015B 出土遺物 (Fig. 8)

弥生土器

甕 (5, 6) 内外面とも摩滅し調整不明。6 は平坦な底部で、復元底径 6.6 cm。

据立柱建物

1SB065

1SB065c 出土遺物 (Fig. 8, Pla. 13)

弥生土器

甕 (7~9) 口縁部は、「く」の字形を呈する。7 は復元口径 21.6 cm。摩滅が目立つが内外面ともハケ目が残る。8 は復元口径 15.1 cm。9 は体部内面にハケ目が残る。

甕もしくは壺 (10, 11) やや丸味のある底部である。内外面とも摩滅し調整不明。10 は底径 6.3 cm。

1SB065d 出土遺物 (Fig. 8)

弥生土器

甕 (12, 13) 12 は口縁部より体部がやや張っている。内外面とも摩滅。13 は僅かに上げ底で、復元底径 9.0 cm。

壺 (14) 復元口径 17.6 cm。口縁端部は肥厚させている。内外面とも摩滅するがヨコナデ調整。

1SB065h 出土遺物 (Fig. 8)

石製品

扁平石製品 (15) 両端を欠損し、現存長 4.8 cm、最大幅 3.45 cm、厚さ 0.65 cm。表裏側面とも研磨され、細かい擦痕が残る。中央に穿孔がある。周縁部に刃部はないが、石包丁を転用した可能性もある。

1SB075

1SB075a 出土遺物 (Fig. 8)

弥生土器

甕 (16~18) 16・17 ともヨコナデ調整。18 は底部が平坦で復元底径 7.7 cm。外面はタテハケ、内面は摩滅するが、内底に炭化物が薄く付着する。

1SB075c 出土遺物 (Fig. 8)

弥生土器

小壺 (19) 薄い器壁で、胎土は 0.5 cm 以下の砂粒を含み、色調は黄橙色を呈する。

器台 (20) 天地が明確ではないが、復元口径 11.6 cm。摩滅し調整不明。

1SB075d 出土遺物 (Fig. 8)

弥生土器

壺 (21) 底径 2.5 cm。内外面ナデ調整。色調は淡黄橙色を呈する。

甕 (22) 平坦な底部である。内外面摩滅し調整不明。

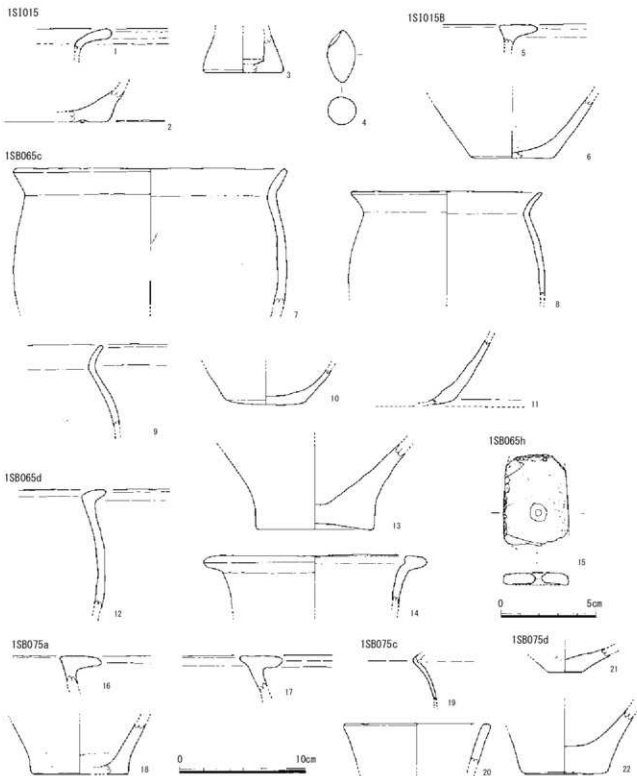


Fig.8 IS1015、ISB065・075 出土遺物実測図 (1/3、15は1/2)

土坑

ISK002 出土遺物 (Fig.9)

石製品

石核 (1、2) 2点とも黒曜石製。1は細かく剥離しているが一部自然面が残る。大きさは2.95×2.65×2.0cm。2は剥離面が風化している部分が半分ほどある。大きさは2.85×2.9×2.2cm。

ISK007 出土遺物 (Fig.9)

弥生土器

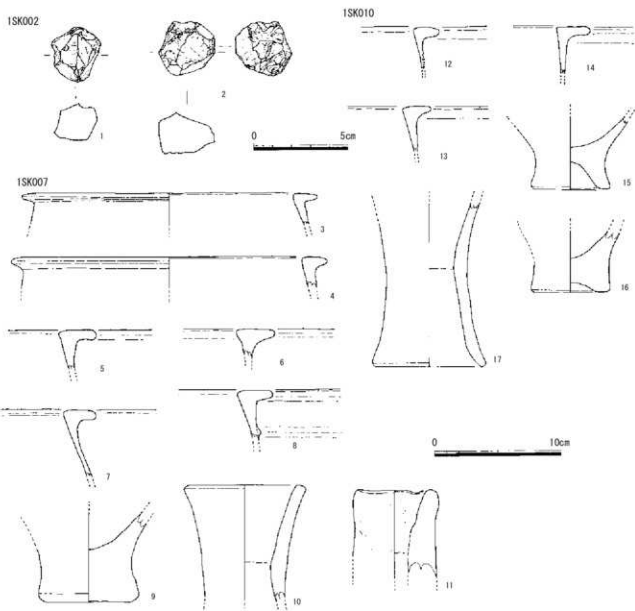


Fig.9 ISK002・007・010 出土遺物実測図 (1/3、1・2は1/2)

甕 (3～9) 全体的に摩滅が目立ち、調整不明瞭。3は復元口径23.4 cm。4は復元口径25.0 cm。8は口縁部外面下に低い突帯を巡らす。9は厚底で平坦な底部である。底径8.0 cm。

器台 (10) 天地が明確ではないが、復元口径9.5 cm。摩滅が目立ち調整不明。色調は薄茶色を呈する。支脚 (11) 胎土は比較的精製され、色調はやや暗い茶灰色を呈する。内外面ともナデ調整で、指頭圧痕が残る。

ISK010 出土遺物 (Fig. 9, Pla. 13)

弥生土器

甕 (12～16) 全体的に摩滅し調整不明。14は口縁部がやや長いL字形を呈する。15の底部は大きく上げ底とする。復元底径6.25 cm。16はやや上げ底で、復元底径6.2 cm。内面底部には炭化物が薄く附着する。

器台 (17) 胎土は細かい砂粒を多く含み、色調は薄茶色を呈する。内外面とも摩滅し調整不明。底径9.0 cm。

ISK020 出土遺物 (Fig. 10)

弥生土器

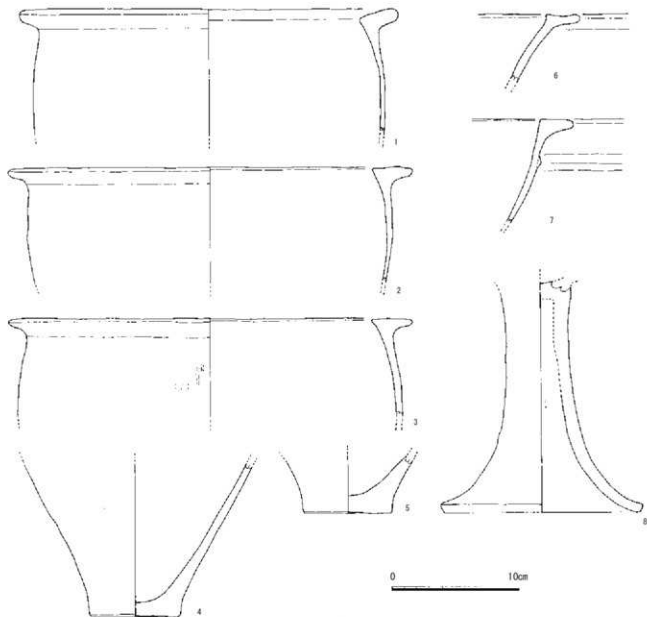


Fig. 10 ISK020 出土遺物実測図 (1/3)

甕 (1～5) 復元口径 30.0～32.0 cm。内外面とも摩滅するが、4は外面タテハケで、2・3の外にも僅かにタテハケが残る。4・5の底部は平坦に仕上げる。色調は黄橙色を呈する。

壺 (6) 口縁部は鋤形口縁である。

鉢 (7) 口縁部外面下に断面三角形の低い突帯を貼付する。

高坏 (8) 復元脚部底径 16.0 cm。内外面とも摩滅し調整不明。色調は暗黄色や淡橙黄色を呈する。

ISK025 出土遺物 (Fig. 11～14)

弥生土器

甕 (1～29) 復元口径 26.0～36.0 cm。口縁部は逆L字形であるが、13・24はやや口縁部が長く僅かに垂れている。21～25は口縁下に低い断面三角形の突帯を貼付する。22は断面M字形に近い突帯を貼付する。摩滅が目立つが、調整が確認できるものは、全て外面タテハケ、内面ナデ調整である。1は若干「く」の字形の口縁部で、体部外面に沈線が巡る。13・22・24は口縁部内側も突出している。22の口縁端部には刻み目のような痕跡が確認できる。7の口縁部と18・21の外と25の突帯上下に煤が薄く付着する。26の底部はやや上げ底で、外面タテハケ、内底には薄く炭化物が付着する。復元底径 7.0 cm。27は復元底径 10.0 cm。外面タテハケ、内底に僅かに炭化物が付着する。28は復元底径 9.8 cm。内

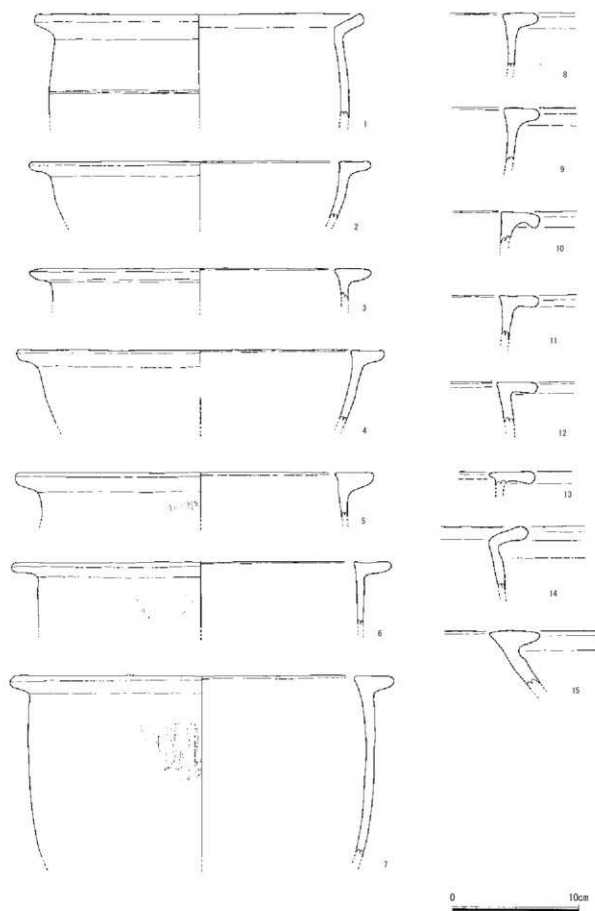
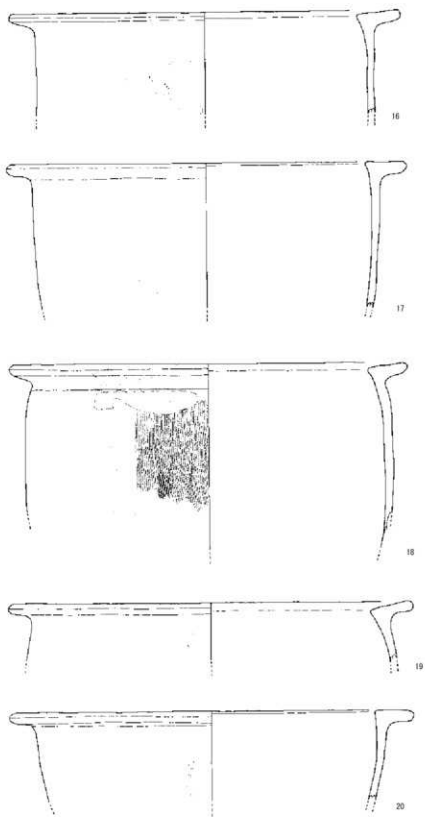


Fig. 11 1SK025 出土遺物実測図① (1/3)



0 15cm

Fig. 12 1SK025 出土遺物実測図② (1/3)

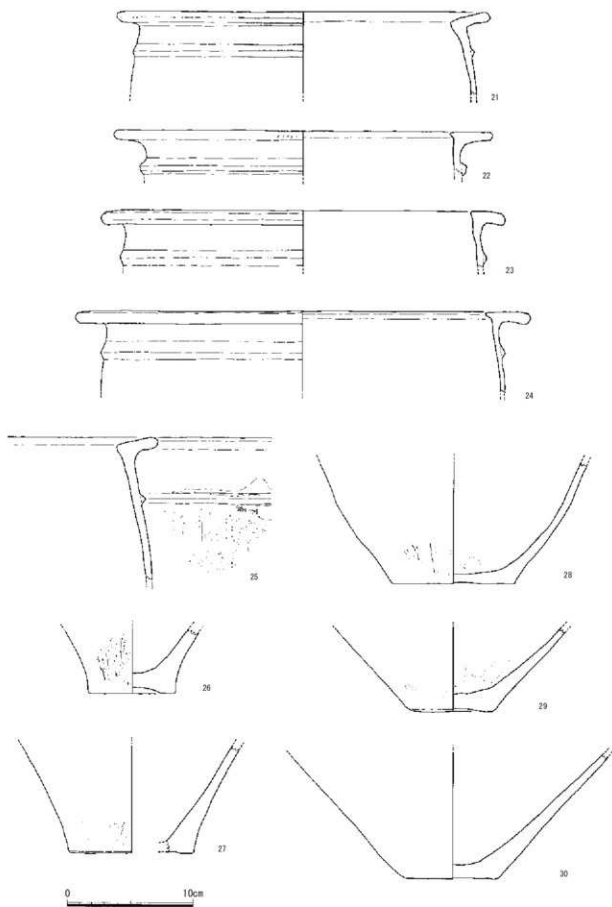


Fig. 13 ISK025 出土遺物実測図③ (1/3)

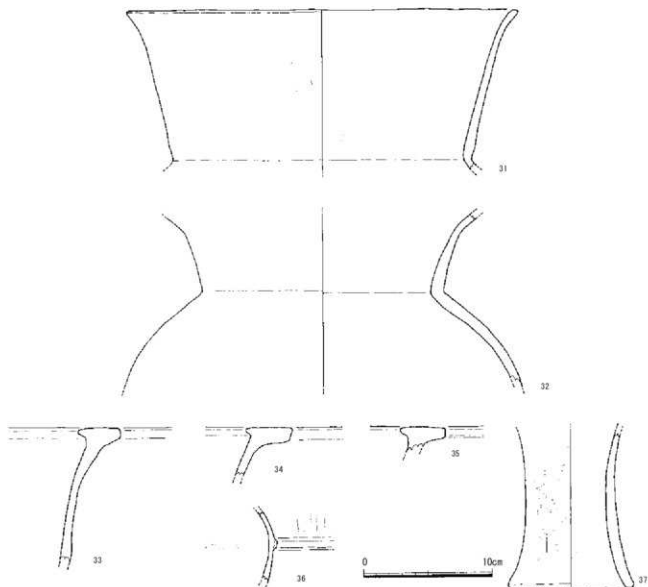


Fig. 14 1SK025 出土遺物実測図④ (1/3)

面ナデ、外面最下部にタテハケが残る。

壺もしくは甕 (29、30) 29は底径6.3 cm。内面ナデ、外面タテハケ。30は底径7.4 cm。内外面摩擦調整不明。

壺 (31～36) 31は広口口縁で、摩擦が目立つが、内外面ともミガキが僅かに残る。32は内外面摩擦調整するが、頸部にミガキがみられる。また、外面は黒褐色に塗られている可能性がある。33は内面横方向のミガキだが、単位不明瞭。外面は不定方向のナデ調整である。33～35は肥厚した口縁部である。口縁部はナデ調整。36はM字形の突帯を貼付する。突帯より上部には縦方向の楕目を施す。外面は暗褐色を呈する。

器台 (37) 下部径10.0 cm。外面タテハケ、内面下部が僅かにヨコハケ調整。

流路

1SX001

1SX001 出土遺物 (Fig. 15)

弥生土器

甕 (1、2) 外面タテハケ、内面ナデ調整、口縁部はヨコナデである。復元口径は、1が28.4 cm、2が30.0 cm。

甕もしくは壺 (3) 復元底径は7.4 cm。内面は縦方向のナデ、外面はミガキのような痕跡が残る。

壺 (4) 内面は細かい横方向のミガキを施す。外面にはうっすらと縦線がみられる。

1SX001 最上層出土遺物 (Fig. 15)

弥生土器

甕 (5~14) 5・6は逆L字形の口縁部で、復元口径32.0 cm。摩滅が目立つが、5の外面には僅かにタテハケが残る。7は復元口径31.6 cmで、口縁部は内側にも突出している。色調は淡橙色を呈する。9~12は、「く」の字形の口縁部下に低い断面三角形の突帯を貼付する。13は平坦な底部で、復元底径10.0 cm。14は底部に円孔を設けている。

甕もしくは壺 (15) 復元高台径10.8 cm。

小甕もしくは壺 (16) 復元底径3.6 cm。

袋状口縁壺 (17) 口縁付近を袋状に作る。復元口径8.4 cm。胎土は茶色粒を含むが精製されている。

壺 (18) 口縁端部に刻み目を施す。現存範囲は全て丹塗りされていたようで、部分的に朱が残る。

高坏 (19) 口縁部から内面にかけて丹塗りされている。

1SX001 上層出土遺物 (Fig. 16・17, Pla. 13)

弥生土器

甕 (1~21) 1は復元口径32.2 cm。断面三角形の口縁端部には刻み目が施され、口縁下に断面三角形の突帯を貼付する。摩滅が目立ち調整不明瞭。2は復元口径25.0 cm。外面タテハケ調整。3は復元口径27.6 cm。4は復元口径16.8 cm。外面タテハケ、内面ナデ調整で、口縁部から外面にかけて朱塗りされる。5・6は口縁部内側にも突出がみられる。7・13の口縁部はやや長い断面三角形を呈する。11・12・15・16は若干「く」の字形の口縁部である。13~16は口縁部下に断面三角形の突帯を貼付する。17~19は上げ底の底部で、外面はタテハケが残る。20は平坦な底部である。21は復元底径7.6 cm。内底に薄く茶褐色の付着物がみられる。

壺 (22~24) 22は肥厚した口縁部で、色調は暗黄褐色を呈する。23は外面に断面台形の突帯を2条貼付し、外面は朱塗りが部分的に残る。24は底径5.3 cm。内外面摩滅し表面がぼろぼろである。

鉢 (25~27) 25は復元口径10.0 cm。内面と口縁部はヨコナデ、体部下半はミガキのような痕跡を残し、中位に突帯を貼付する。色調は黒茶色を呈する。26は復元底径5.0 cm。外面ナデ、内面はやや強いナデ調整。色調は黒茶色を呈する。27は復元口径32.6 cm。

甕もしくは高坏 (28) 内外面朱塗りされている。

蓋もしくは高坏 (29) 復元径13.7 cm。内面ナデ、外面はミガキの後に朱塗りしている。

石製品

石包丁 (30, 31) 30は、横15.9 cm、縦5.4 cm、厚さ0.5 cm。2ヶ所に穿孔があり、表裏に細かい擦痕が残る。輝緑凝灰岩製。31は、厚さ0.4 cmで、全体的に表面が荒れている。これは当初から劣化していたのか、使用后に摩滅したかは不明瞭である。

扁平片刃石斧 (32) 幅3.5 cm、厚さ1.0 cm。全面研磨され、表裏の中央付近が僅かに凹んでいる。白灰色の珪質泥岩製。

石斧 (33) 自然石利用したものとみられ、加工は側面と先端部を中心に行われている。石斧のように見えるが、その他の用途も考えられる。泥岩製。

削器 (34) 側辺部に細かい剝離調整を行い、刃部を作り出す。現存長5.95 cm、現存最大幅3.8 cm、厚さ1.15 cm。安山岩製。

叩き石 (35) 円柱状の石材で厚さは3.6×5.45 cm、上半部は欠損する。先端部に叩きの使用痕が残る。

ISX001

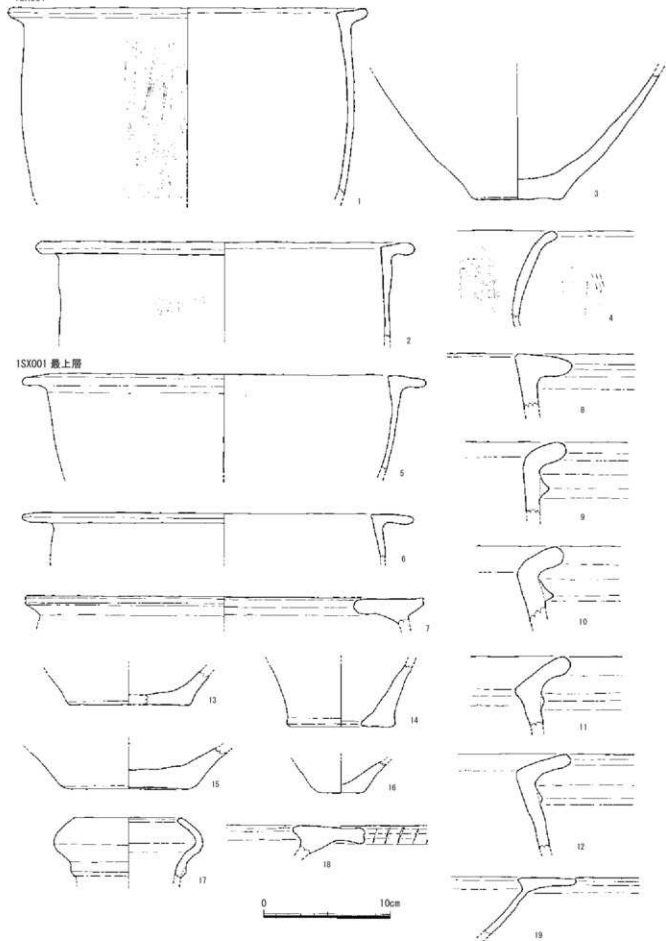


Fig. 15 ISX001・001 最上層出土遺物実測図 (1/3)

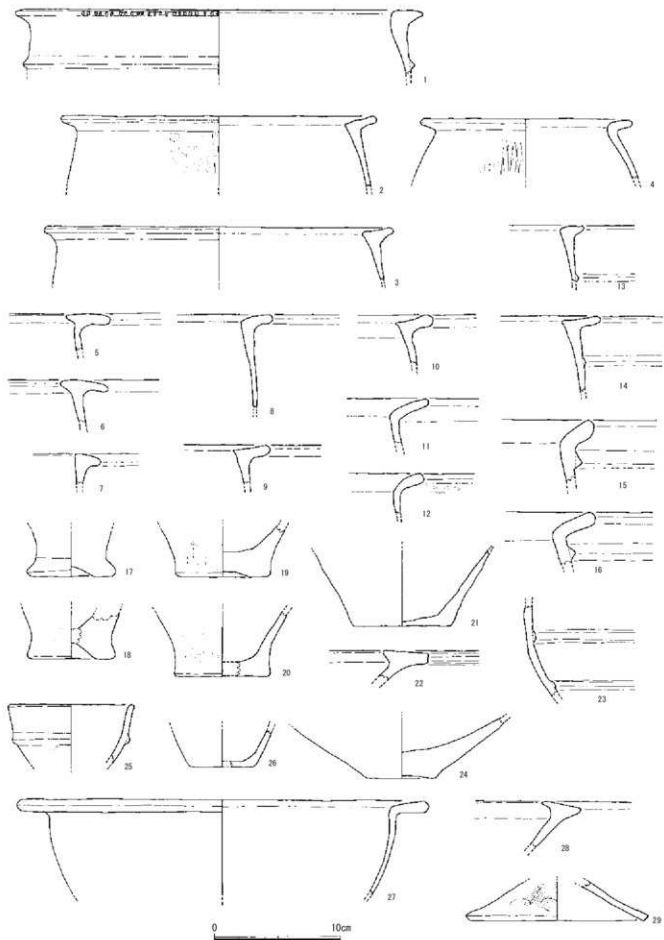


Fig. 16 1SX001 上層出土遺物実測図① (1/3)

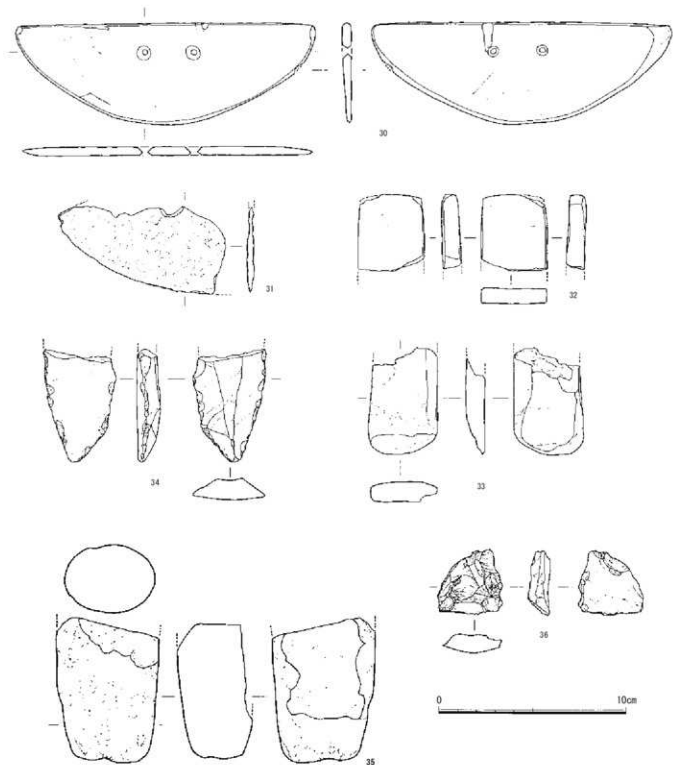


Fig. 17 ISX001 上層出土遺物実測図② (1/2)

剥片 (36) 大きさは $3.45 \times 3.5 \times 1.1$ cm. 黒曜石製。

ISX001 下層出土遺物 (Fig. 18 ~ 28, Pla. 13)

弥生土器

甕 (1 ~ 78) 1 ~ 14 は口縁部外面下に突帯を貼付する。2・6 は断面 M 字突帯であるが、他は断面三角形の突帯である。全体的に摩滅が目立つ。復元口径 27.0 ~ 34.0 cm。8 は口縁部に円孔を穿つ。9 は内外面ともハケ調整である。10 は外面に僅かに煤が付着する。11 は外面タテハケ、内面横方向の細か

いミガキを施す。15～40は復元口径23.8～35.0 cm。18・22は口縁端部が短く断面三角形を呈する。22は内外面摩滅しボロボロで、色調は暗茶灰色を呈する。41～44は外面にタテハケの後に沈線が巡らせる。内面はナデ調整。42～48は口縁部が断面三角形のように短い。外面はタテハケ、内面ナデ調整。51～53は口縁部を「く」の字形に曲げる。40は口縁部がやや長く、外面に煤が付着する。41は復元口径20.0 cm。外面に煤が付着する。42は口縁端部に刻みを施す。43の口縁端部には煤が付着する。46は外面に煤が付着する。48は外面がボロボロである。54・55は口縁部が断面T字形の大甕で、色調は黄白色を呈する。56～78は底部である。底部底面は、大小差はあるが上げ底となる。特に56～59・62・63・65・66は特に上げ底となる。また、56・57・60・61は厚底である。摩滅していないものは外面タテハケである。61の内底には薄く炭化物が付着する。

甕もしくは壺（79～81） 底径6.2～8.6 cm。79は外面底部付近に煤が付着する。

壺（82～115） 82～88は広口壺。82は外面が丁寧なナデ、内面は横方向のミガキ。83は外面摩滅、内面は横方向のミガキ。復元口径16.2～27.0 cm。85は外面に縦方向の工具痕が残る。89～99は口縁部が短めの錫形口縁で、復元口径22.4～30.6 cm。88は内面がミガキの後丹塗りされる。89は口縁部に刻みを施す。頸部の付け根に突帯を巡らす。90・91は内外面とのナデ調整。93は内面ミガキ、外面は黒灰色に塗られている。94は口縁端部の上下に刻み目を施す。外面タテハケ、内面は横方向のミガキ。95は内面ミガキ、外面はヨコナデ。98は外面ヨコナデ、内面ナデ。口縁部上面に丹塗りが残る。99は内外面ともミガキを施す。100は内外面に僅かに丹塗りが残る。袋状口縁壺の頸部か。101は外面に5条の突帯を貼付する。102は瓢型の壺で、内面は摩滅するが、外面はヨコナデで、外面は丹塗りする。103は壺と推測したが、全形が明確ではない。外面に突出する部分を作る。104は外面2ヶ所に小さな突帯を貼付する。内面ナデ、外面はミガキで黒灰色に塗られている。105は胴部最大径に断面三角形の突帯を貼付する。内面ナデ、外面は細かいミガキ調整。外面は茶褐色に塗られている。106は、外面に断面M字突帯を貼付する。外面はミガキで、茶褐色に塗られ、一部黒褐色の筆書きが残る。107は外面ミガキ、内面ナデ調整。断面M字形の突帯を貼付する。108は内面ナデ、外面ミガキか。109は外面に細かいミガキを施す。胎土は白色砂粒が多く、茶灰色を呈する。110はやや小さな壺で、外面タテハケ、胴部最大径に浅い沈線が巡る。底径6.1 cm。111～115は、底径5.4～8.4 cm。全体的に摩滅するが、114は外面にハケのような痕跡が残る。115は外面ミガキで煤が付着する。胎土は黄白色であるが、外面は暗褐色を呈する。

蓋（116～119） 116は復元口径28.0 cm。内外面ナデ調整で、色調は白黄色を呈する。117は復元口径28.4 cm。内面ナデ、外面は細かいタテハケを施す。口縁部内外面はヨコナデである。色調は黄白色を呈する。118は内面ヨコハケ、外面ハケ調整。119は外面丹塗りで、内面はヨコナデか。

鉢（120～122） 120は復元底径12.5 cm。内外面とも摩滅し調整不明。121は外面タテハケ、内面ヨコナデ。122は口縁部が逆L字形を呈し、口縁下に突帯を貼付する。口縁部から外面は丹塗りされている。

把手（123） 外面ナデ調整。

高坏（124～127） 摩滅が目立つ。124は内面ナデ、外面タテハケ。125は底径9.8 cm。外面タテハケが残る。126・127は内外面とも朱塗り。

器台（128～135） 128は復元底径10.0 cm。外面タテハケ。129は復元口径9.0 cm。外面タテハケ。130は復元口径8.8 cm。内外面ともナデ調整。131は復元底径10.0 cm。外面タテハケ。132は復元底径9.0 cm。133は底径8.0 cm。指頭土痕が残る。134は器壁が厚い。底径9.7 cm。135は復元底径9.65 cm。外面タテハケ。

土製品

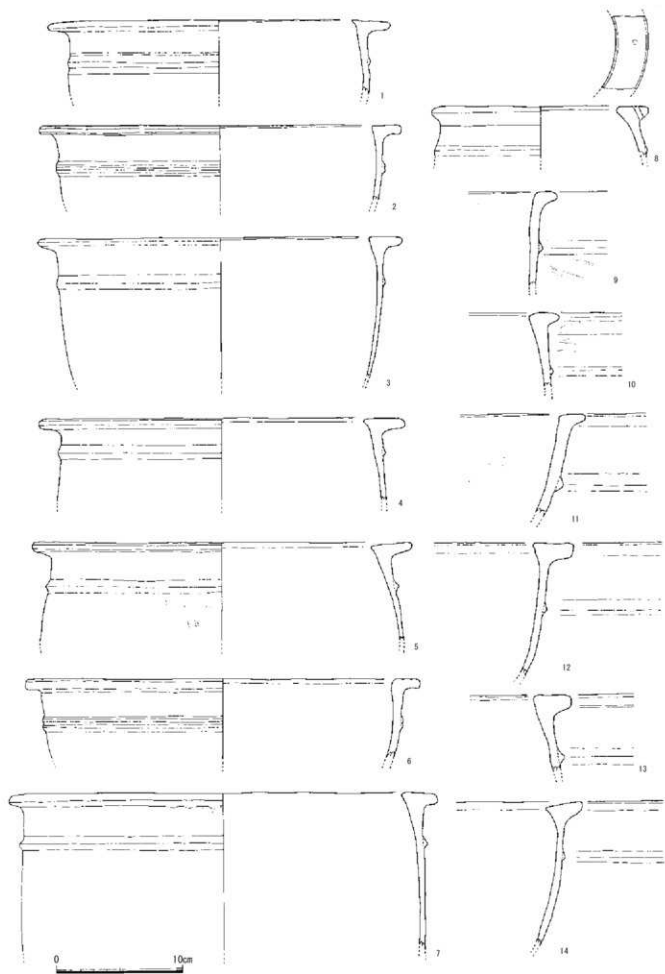


Fig. 18 ISX001 下層出土遺物実測図① (1/3)

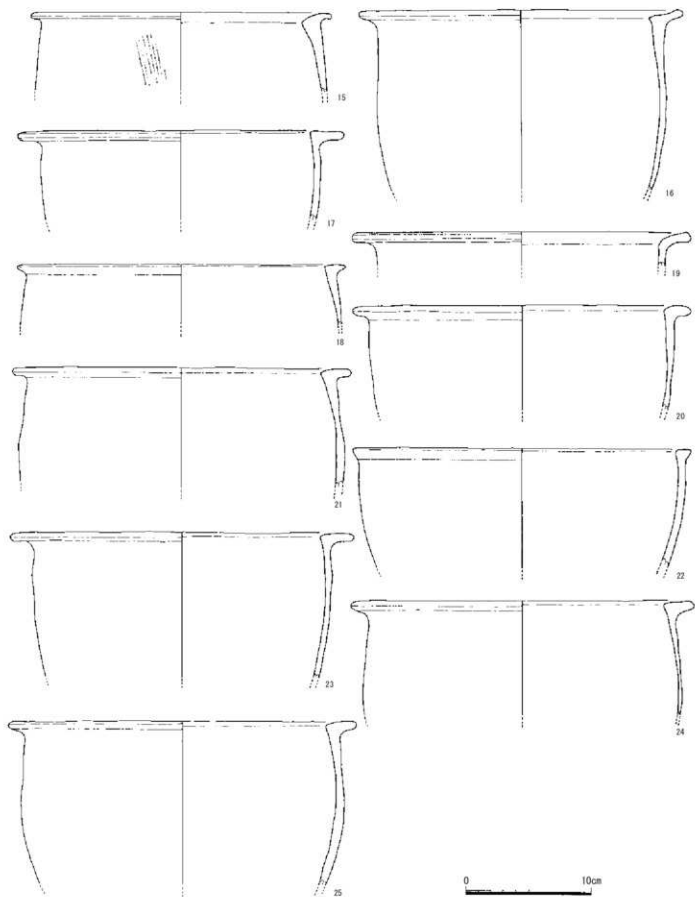


Fig. 19 1SX001 下層出土遺物実測図② (1/3)

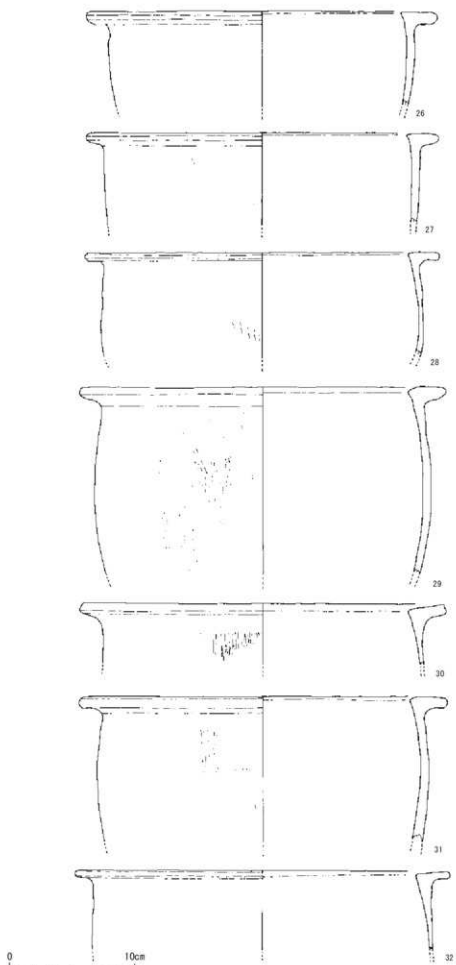


Fig. 20 1SX001 下層出土遺物実測図③ (1/3)

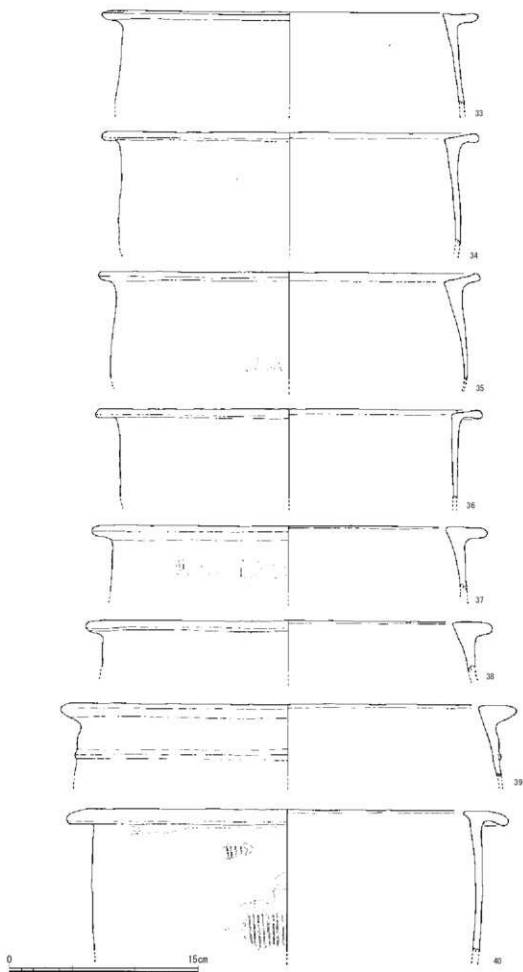


Fig. 21 ISX001 下層出土遺物実測図④ (1/3)

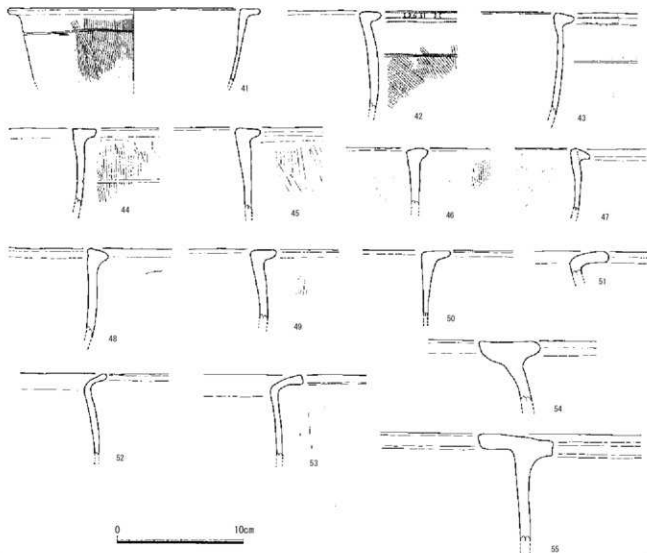


Fig. 22 ISX001 下層出土遺物実測図⑤ (1/3)

棒状土製品 (136) 2 片に分かれているが、同一製品とみられる。最大径 7.5 cm、高さは約 15 cm、底部には窪みがある。胎土は 0.7 cm 以下の白色砂粒を多く含み粗い。色調は暗黄橙色を呈する。

紡錘車 (137) 径 4.05 cm、厚さ 1.15 cm。中央に径 0.6 cm 前後の円孔を設ける。

石製品

砥石 (138, 139) 2 点とも欠損欠落が目立つ。138 は砂岩で 2 面使用され、使用面は緩やかに凹んでいる。139 は 2 面使用されている。

石包丁 (140 ~ 142) 140 は欠損し円孔が僅かに残る。周辺部には刃部を削りだしているが、研磨痕が残っていない。厚さ 0.25 cm。141 は研磨されてなくザラザラしている。142 は内外面とも研磨されてはなく、製作途中と推測される。

石斧 (143) 大きく欠損しているが、太型蛤刃石斧と推測される。

扁平片刃石斧 (144) 先端部は欠損する。現存長 5.2 cm、幅は 2.2 cm、厚さ 1.15 cm。全面研磨され、細かい擦痕が残る。白灰色の珪質泥岩製。

石錘 (145) 長さ 5.1 cm。中央に浅い沈線が巡る。

ISX001 暗茶色粘土出土遺物 (Fig. 29, Pla. 14)

弥生土器

甕 (1 ~ 22) 1 ~ 4 の口縁部は、断面三角形を呈する。外面は細かいタテハケで、内面はナデ調整。3・

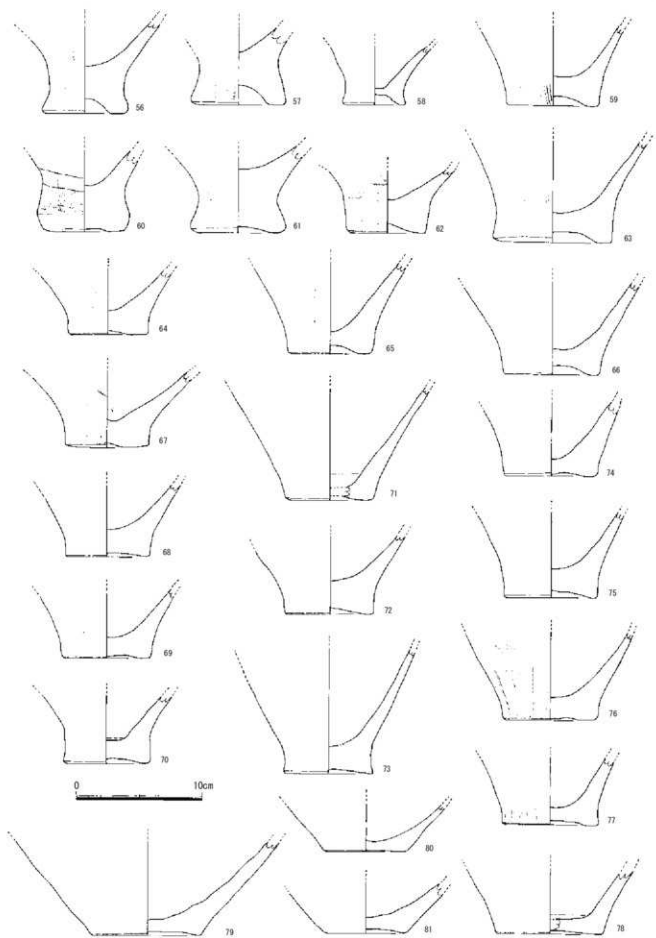


Fig. 23 ISX001 下層出土遺物実測図⑥ (1/3)

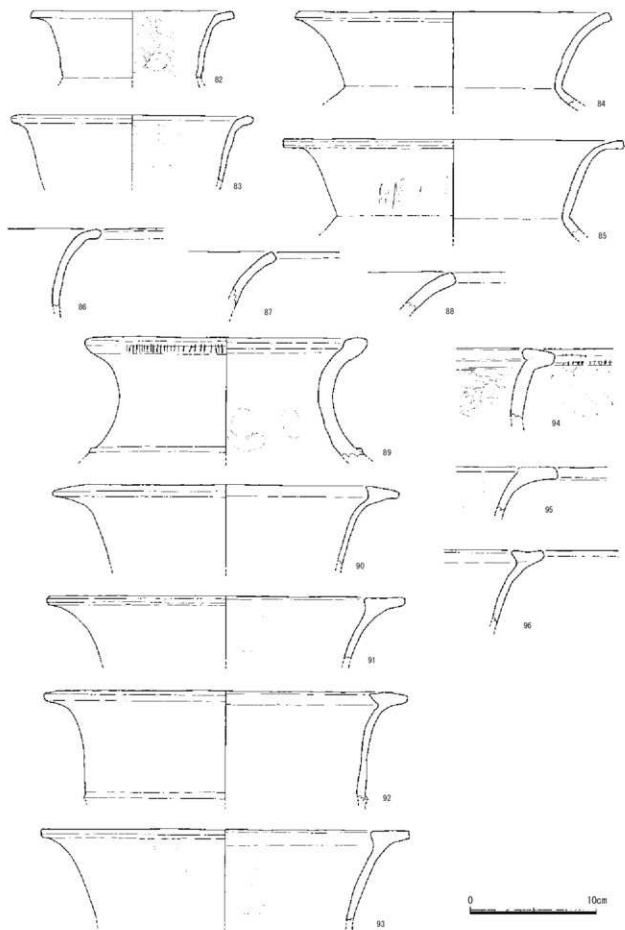


Fig. 24 ISX001下層出土遺物実測図⑦ (1/3)

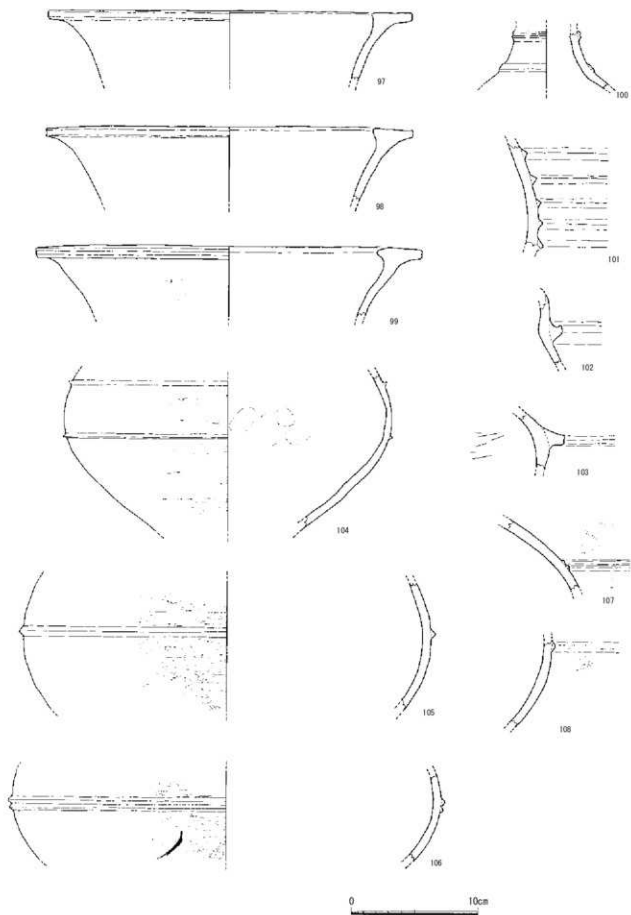


Fig. 25 ISX001 下層出土遺物実測図⑧ (1/3)

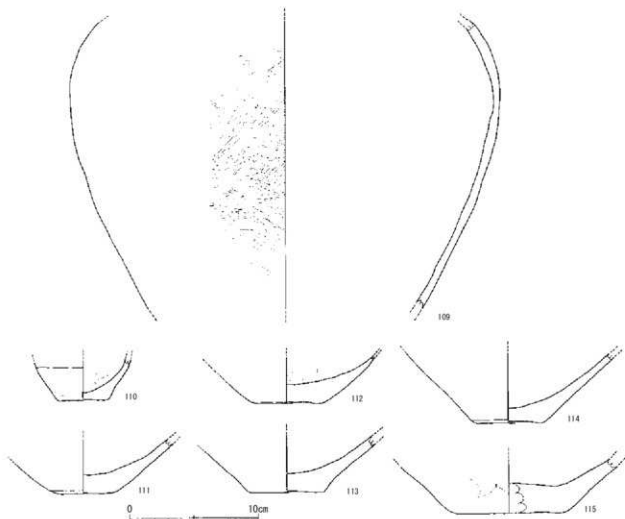


Fig. 26 ISX001 下層出土遺物実測図⑨ (1/3)

4の色調は暗茶褐色を呈する。4は胎土が粗く、全体的に摩滅でボロボロである。5は逆L字形の口縁部で、端部には刻みを施す。6は外面に細かいタテハケの後浅い沈線を巡らす。7は口縁部を大きく曲げる。8が口縁部を緩く曲げる。10は口縁部を断面三角形とし、体部は張っている。11は口縁部をやや長く作る。上面にハケ目が僅かに残る。12は外面タテハケの後、断面三角形の突帯を貼付する。13～17は厚底で、17が平底以外は上げ底でもある。13は外面にタテハケが僅かに残るが、他は摩滅し調整不明。18～20は平底である。18は内底に厚く炭化物が付着する。19は内外面タテハケだが、内面は摩滅が目立つ。内20は外面タテハケ、内面は縦方向のナデ。22は底部に孔を穿つ。

壺 (23, 24) 23は真っすぐ立ち上がり、口縁部を外反させる。摩滅するが外面にタテハケが僅かに残る。24は復元底径7.3 cm。内外面とも摩滅する。

石製品

石剣 (25) 両端を欠損する。現存長8.6 cm、幅4.0 cm、厚さ1.0 cm。全面研磨し断面菱形を呈する。岩脈をうまく利用し模様のように見える。

ISX001 灰色粘土出土遺物 (Fig. 30, Pl. 13)

弥生土器

甕 (1～15) 1～9は断面三角形に近い短めの口縁部で、外面タテハケである。1の口縁部は一部剥落した面にタテハケが確認できる。よって直線的な体部にハケ目を施した後、口縁部を貼付したことがわかる。2は外面に沈線が巡り、煤が付着する。調整はタテハケに見えるが、ナデの可能性もある。

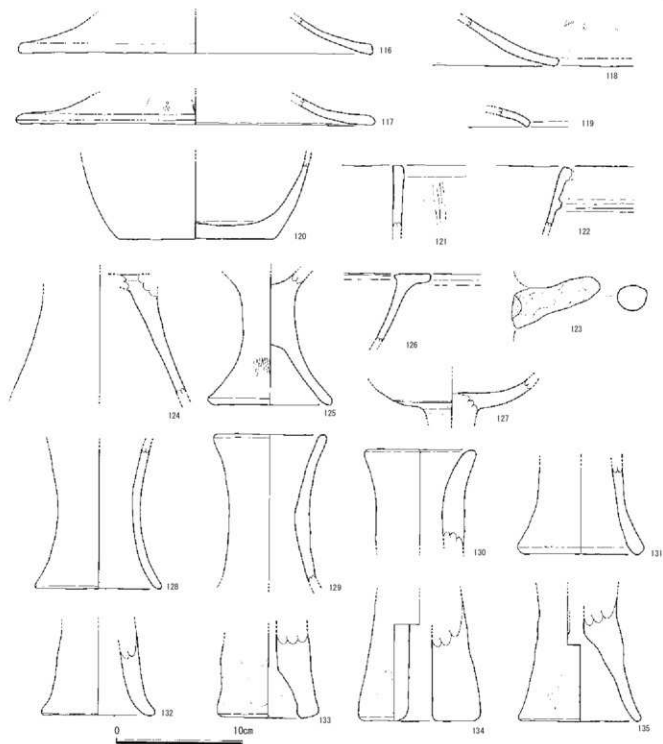


Fig. 27 1SX001下層出土遺物実測図⑩ (1/3)

5は内外面ナデ調整で、外面には沈線を1条施す。10は口縁部を緩く曲げ外反させる。外面タテハケ、内面ヨコハケで、体部はヨコナデ。小片のため傾きが明確にし難く、壺の可能性もある。11～14は厚底で若干上げ底の底部である。摩滅が目立つが、11・14の外面にはタテハケが残る。15は平底で、内外面とも摩滅し調整不明。

甕もしくは壺 (16) 平底で、復元底径8.8 cm。内外面摩滅し調整不明。

壺 (17) 外面はミガキ、底部外面はナデ調整。底部復元径9.7 cm。

小壺 (18) やや小振りの壺で、外面は摩滅するが僅かにハケ目が残る。底径5.8 cm。

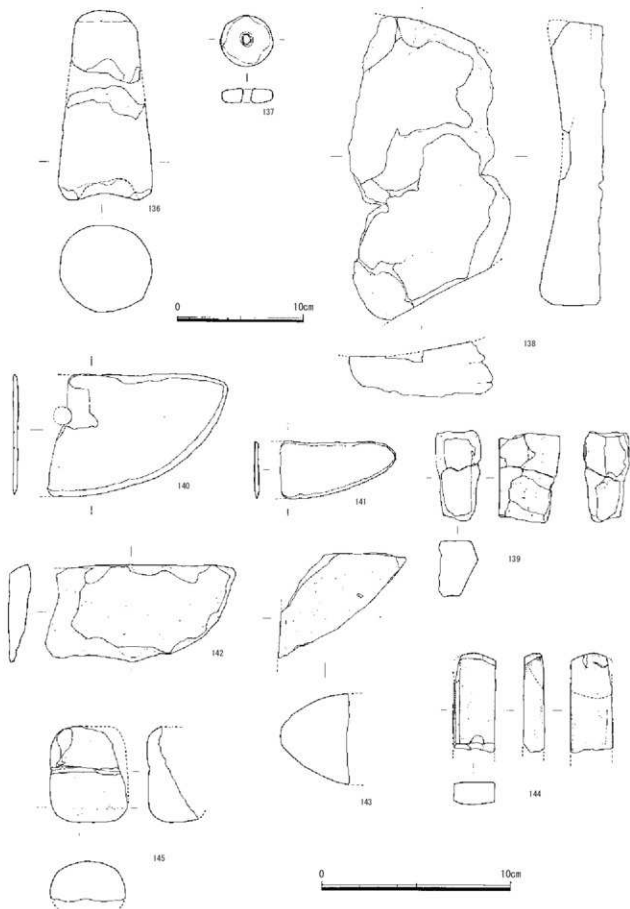


Fig. 28 ISX001 下層出土遺物実測図⑩ (1/3、石製品は1/2)

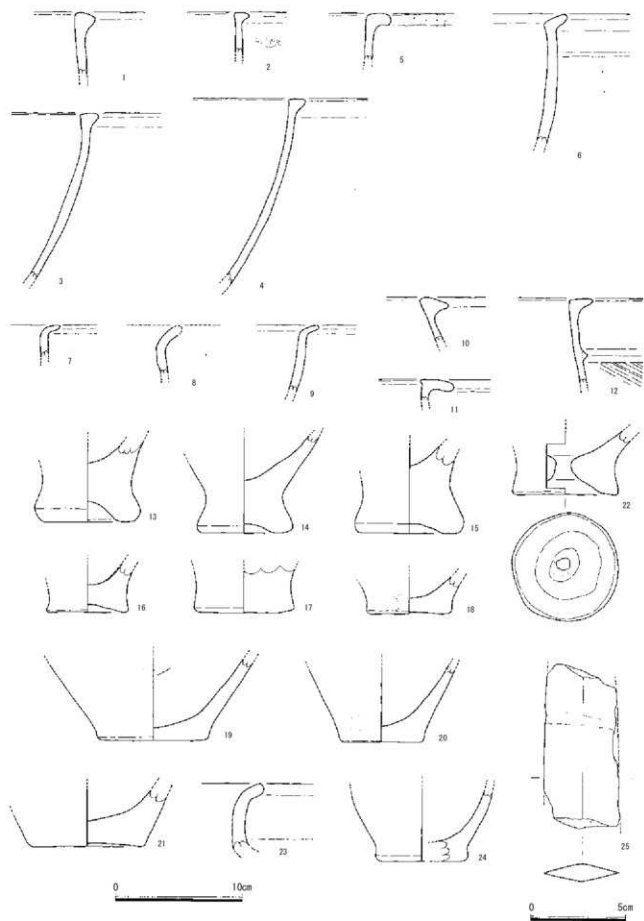
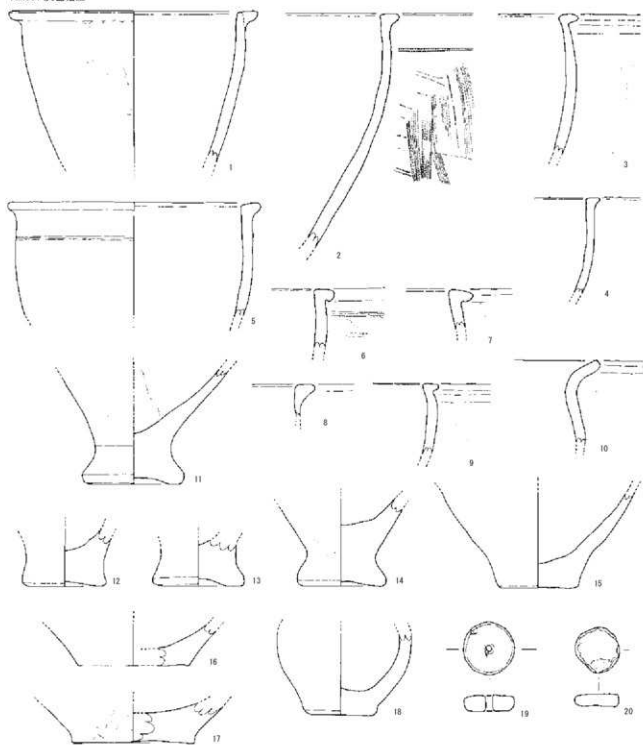


Fig. 29 ISX001 暗茶色粘土出土遺物実測図 (1/3、25 は 1/2)

1SX001 灰色粘土



1SX001 灰色粘土最下層

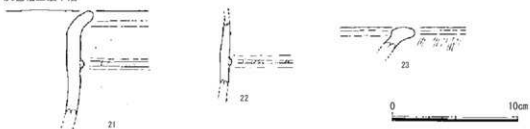


Fig. 30 1SX001 灰色粘土・灰色粘土最下層出土遺物実測圖 (1/3)

土製品

紡錘車 (19) 径 4.0～4.1 cm、厚さ 1.3 cm、径 0.5 cm の円孔がある。

土製円板 (20) 径 3.5～3.6 cm、厚さ 1.0 cm。胎土は 0.2 cm 以下の砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈する。

1SX001 灰色粘土最下層出土遺物 (Fig. 30)

弥生土器

甕 (21、22) 21 の口縁部は直線的な体部から緩く外反する。体部には刻み目突帯が貼付されるが、口縁端部に刻みがあるかは不明瞭。外面は僅かにタテハケが残る。色調は暗茶黒色を呈する。22 は外面に刻み目突帯を貼付する。

壺 (23) 口縁部を僅かに肥厚させる。外面タテハケ、内面ナデ調整。

その他の遺構

1SX013 (S-12) 出土遺物 (Fig. 31)

弥生土器

小甕 (1～3) 色調は茶灰色を呈する。1 は復元口径 10.0 cm。2 は小片のため、傾きが不明瞭である。3 は僅かに丸味のある底部で、底径 4.2 cm。

柱穴

1SX055 出土遺物 (Fig. 31)

弥生土器

甕 (4) 平坦な底部で、復元底径 9.2 cm。内面ナデ、外面タテハケ。底部外面はナデ調整。

木製品

柱材 (5) 丸太材で、上部中心部は空洞となっている。腐食しているが両断面に伐採痕が残る。長さ 40.9 cm、径 17.4×16.1 cm。

木材検出ピット

1SX030 出土遺物 (Fig. 31, Pla. 14)

弥生土器

甕 (6、7) 6 は口縁部が L 字形を呈する。7 は底部近くの破片で、形状から若干厚底の底部を呈すると推測される。外面はタテハケで、内面は炭化物が付着する。

木製品

加工材 (8、9) 8 は、丸木を半裁したままで、半裁面に加工はみられない。片方は二方面に斜めにカットしているが、一方の面は平坦だが加工は不明瞭である。現状では確認できないが、腐食前は樹皮が残っていた可能性が高い。大きさは縦 23.6 cm、幅 18.3×8.1 cm。9 は、丸木を伐採し、さらに半裁しているため、一方の断面には伐採痕が明瞭に残る。上面は腐食しているため、加工は不明瞭である。表面は加工がないようで、現状では確認できないが、腐食前は樹皮が残っていた可能性が高い。大きさは縦 16.7 cm、幅 19.5×9.2 cm。

円盤状板材 (10) 半月状の板材で、表面の加工は腐食し不明瞭である。長軸 40.2 cm、短軸 23.5 cm、厚さ 3.0 cm。

1SX050 出土遺物 (Fig. 31)

弥生土器

壺もしくは高坏 (11) 口縁端部の小片で、外面には僅かにハケ目が残る。

甕もしくは壺 (12) 甕もしくは壺の体部とみられ、台形の突帯を貼付する。内面摩擦するが、外面

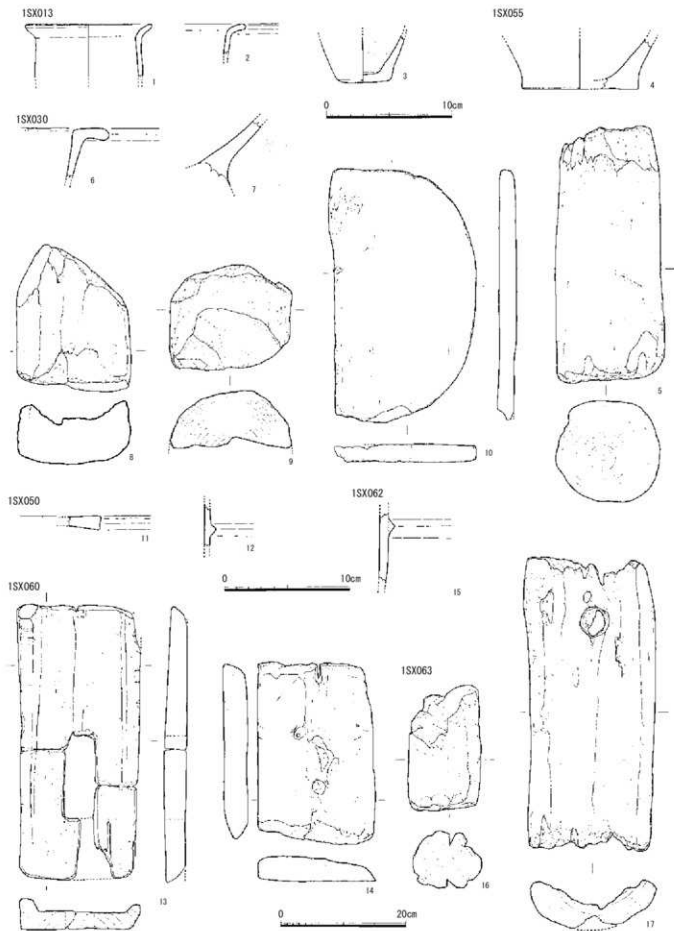


Fig. 31 その他の遺構、柱穴、木材出土ピット出土遺物実測図 (1/3、木製品は1/6)

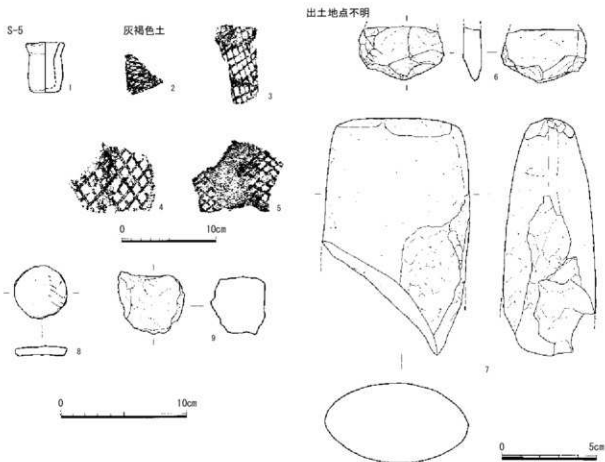


Fig. 32 灰褐色土、その他の出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4、6・7は1/6)

は丹塗りである。

ISX060 出土遺物 (Fig. 31, Pla. 14)

木製品

板材 (13、14) 13は、大きさは縦44.0 cm、横19.6 cm、厚さは3.0 cmで、長辺の両側のみ厚く削り出されていて、最大厚4.9 cmである。中央付近に13×5 cm程の長方形孔を穿っている。加工は明確に確認できない。14は、樹木の節部分を使用した方形板材で、縦29.1 cm、横18.8 cm、厚さ4.0 cm。両端を加工しているように見える。

ISX062 出土遺物 (Fig. 31)

弥生土器

甕 (15) 外面はタテハケで、三角形の突帯を貼付する。うっすらと煤が付着する。

ISX063 出土遺物 (Fig. 31)

木製品

柱材 (16) 縦20.0 cm、径11.6×9.2 cm。下方断面はカット面そのままとみられるが腐食する。

加工材 (17) 縦46.6 cm、幅21.0 cm、最大厚5.2 cm。腐食し加工痕は明確ではないが、断面U字形を呈するため、意図的に抉った可能性がある。樹木の節部分が使用されている。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 32)

弥生土器

ミニチュア土器小壺 (1) 手づくねで作られた土器で、色調は暗灰色を呈する。口径3.0 cm、器高4.0 cm、底径2.4 cm。S-5より出土。

灰褐色土出土遺物 (Fig. 32)

瓦類

丸瓦 (2～4) 2は小さく横長の格子叩き。3はやや不定形な格子叩き。4は縦長の格子叩き。

平瓦 (5) 小さな方形格子叩き。

第1次調査出土遺物 (出土地点不明) (Fig. 32)

石製品

搔器 (6) 縦2.8 cm、幅4.5 cm、厚さ1.0 cm。端部を剥離加工している。安山岩製。

大型蛤刃石斧 (7) 半分ほど欠損する。現存長12.5 cm、現存最大幅7.7 cm、厚さ4.2 cm。玄武岩製。

土製品

土製円板(8) 表面はヘラ描き文があり、壺の肩部付近を再利用したものと推測される。径4.15～4.2 cm、厚さ0.7 cm。

土塊 (9) 胎土は0.5 cm以下の砂粒をやや多く含み、色調は橙黄色を呈する。一部面が存在する。

(5) 小結

調査地北側で検出された流路 (1SX001) は、弥生中期初頭に埋没し始め、弥生中期前半に埋没する。それが埋没した後の弥生中期中葉頃に掘立柱建物 (1SB075) が建てられている。流路の底面には柱材や木製加工品が遺存しており、礎板などの可能性もあることから、不安定地盤で建物を建築する工夫が行われたとみられる。

また、流路 (SX001) の上流延長上とみられる国分松本遺跡第11・13次調査では、流路に奈良時代までの遺物が包含されていたことから、1SX001 が埋没し陸地化した後も、第11・13次調査付近だけ流路が湿地状に残されていた可能性が高い。

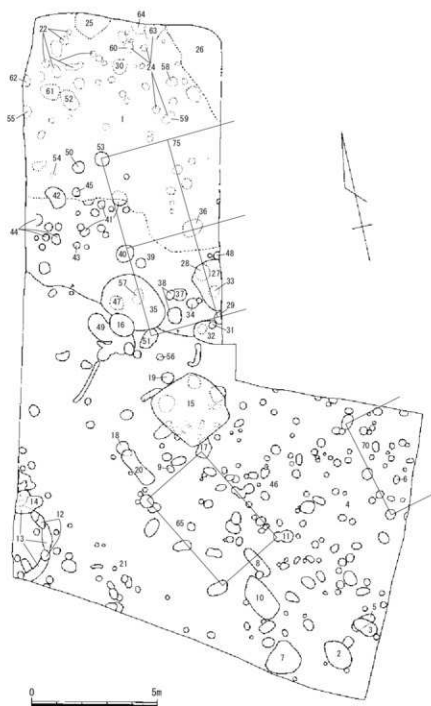


Fig. 33 第1次調査遺構略測図 (1/150)

表.1 国分千足町遺跡第1次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	1SX001	流路		弥生中期初頭～前半	F～J・3～6
2	1SK002	土坑		弥生時代	AB1.2
3		ピット	S-5→3		B1
4		ピット群			A～E1
5		ピット	S-5→3		B1
6		ピット			D1
7	1SK007	土坑		弥生中期初頭～前半	AB2
8	1SB065	土坑			C2, 3
9	1SB065	ピット		弥生中期	D4
10	1SK010	土坑		弥生中期初頭～前半	B2, 3
11	1SB065	ピット		弥生後期後半	C2
12		ピット群		弥生後期?	C5
13	1SX013	円形溝		弥生後期	C5, 6
14		ピット			D5, 6
15	1S1015	竪穴住居		弥生中期後半?	DE3, 4
16		ピット			F4
17	1SB065	ピット	S-17→15	弥生中期	D3
18		ピット		弥生中期中葉	D4
19		ピット			E4
20	1SK020	土坑			D4
21		ピット群			B～E, 3～6
22	1SX022	ピット群	ピット1個に柱材遺存。S-1→22?	弥生中期	IJ5
23		ピット群	S-1→23?		位置不明
24		ピット群	S-1→24?	弥生中期	IJ4
25	1SK025	土坑	板材遺存。	弥生中期中葉	IJ5
26		窪み	S-1最下	弥生中期	IJ3
27		土坑		弥生中期後半	FG3
28		ピット	S-28→27	弥生中期前半～中葉	G3
29	1SB075	柱穴	柱材遺存。	弥生中期	F3
30	1SX030	ピット	板材遺存。	弥生中期初頭～前半	I4
31		ピット		弥生時代	F3
32		土坑		弥生中期	F3
33		ピット	S-27の下。弥生土器壺出土。	弥生後期	F3
34		ピット			F3
35		土坑		弥生中期	F4
36		ピット			G3, 4
37	1SX037	ピット	柱材遺存。	弥生時代	F4
38		ピット群			F4
39		ピット			G4
40	1SB075	柱穴	柱材遺存。		G4
41		ピット群		弥生中期	GH4・5
42		ピット		古墳時代	H5
43		ピット		弥生中期	G5
44		ピット群			G5
45	1SX045	ピット群	柱材遺存。	弥生時代	H5
46		ピット群		弥生中期	A～E, 2・3
47		ピット	S-35の下		F4
48		ピット		弥生時代	G3
49		土坑		弥生時代	F5
50	1SX050	ピット	木片遺存。	弥生中期中葉	H5
51	1SB075	柱穴	柱材遺存。		F4
52		ピット		弥生中期	I5
53	1SB075	ピット		弥生中期中葉	H5
54		ピット		弥生中期	H5
55	1SX055	ピット	柱材遺存。	弥生中期前半	I6
56		ピット		弥生時代	E4
57	1SX057	ピット	板材遺存。	弥生時代	F4
58	1SX058	ピット	柱材遺存。	弥生時代	I4
59	1SX059	ピット	柱材遺存。	弥生時代	I4
60	1SX060	ピット	板材遺存。		J4
61		ピット		弥生時代	I5
62	1SX062	ピット	板材遺存。	弥生中期	I6
63	1SX063	ピット	木材遺存。		J4
64		ピット	木片遺存		J4
65	1SB065	掘立柱建物		弥生後期中葉～後半	B～D, 2～4
70	1SB070	掘立柱建物		?	DE1
75	1SB075	掘立柱建物		弥生中期中葉	F～H, 3～5

表 2 因分千足町遺跡第1次調査 出土遺物一覧表

S-1	弥生土 器 甕、甕口縁、甕底、甕口縁、甕底、甕×甕、破片 木 製 品 木片	S-26	弥生土 器 甕、甕底、破片 木 製 品 木片
S-1上層	須恵 器 坏蓋、甕 弥生土 器 甕口縁、甕底、甕、甕口縁、袋状口縁甕、甕×甕 瓦 類 平瓦(無文) 石 製 品 剥片(黒曜石)、丸石	S-27	弥生土 器 甕口縁、甕底、小甕、丹塗り土器、破片
S-1上層	弥生土 器 甕口縁、甕底、甕、甕口縁、甕底、器台、鉢 丹塗り土器、破片 石 包丁、石斧、扁平片刃石斧 石 製 品 剥片(黒曜石)	S-28	弥生土 器 甕、甕口縁、丹塗り土器、破片
S-1下層	弥生土 器 高坏、大甕、小甕、甕、甕×甕、甕、甕×高坏、器台、把手、支脚、蓋、鉢、器台、把手、瓢型土器 石 製 品 砥石、石包丁、扁平片刃石斧、石斧、扁平石、剥片(黒曜石)、石包丁字、石鏃 土 製 品 紡錘車、棒状土製品	S-29	弥生土 器 甕底、甕底、破片 土 製 品 土埴 木 製 品 柱材(S-29でない可能性あり)
S-2	弥生土 器 破片 石 製 品 石核(黒曜石)、丸石	S-30	弥生土 器 甕口縁、甕底、破片 木 製 品 加工材、円盤状板材、板材、木片
S-5	弥生土 器 ミニチュア土器小壺	S-31	弥生土 器 破片
S-6	弥生土 器 支脚、破片	S-32	弥生土 器 甕口縁、破片
S-7	弥生土 器 甕口縁、甕底、支脚、器台、破片	S-33	弥生土 器 甕、破片
S-8	弥生土 器 甕口縁、甕底、甕口縁、破片 石 製 品 丸石	S-35	弥生土 器 甕口縁、甕底、支脚、破片
S-9	弥生土 器 甕口縁、破片 石 製 品 石包丁	S-37	弥生土 器 破片 木 製 品 柱材(S-37でない可能性あり)
S-10	弥生土 器 甕口縁、甕底、器台、破片	S-41	弥生土 器 甕口縁、甕底、支脚?、破片
S-11	弥生土 器 甕、器台、甕×甕	S-42a	弥生土 器 甕口縁、破片
S-12	弥生土 器 小甕、破片	S-42b	須恵 器 破片 弥生土 器 甕口縁、甕底、甕、破片 木 製 品 木片
S-13	弥生土 器 破片	S-43	弥生土 器 甕?、甕?、支脚、破片
S-15	弥生土 器 甕口縁、甕底、支脚、破片 土 製 品 投彈	S-45	弥生土 器 甕、破片 木 製 品 木片
S-15B	弥生土 器 甕口縁、甕底、破片 石 製 品 剥片(黒曜石)	S-46	弥生土 器 甕口縁、破片
S-17	弥生土 器 甕口縁、甕、丹塗り土器片、破片	S-48	弥生土 器 破片
S-18	弥生土 器 甕口縁、甕底、破片 石 製 品 剥片(黒曜石)	S-49	弥生土 器 甕底、甕、破片 石 製 品 剥片(黒曜石)
S-20	弥生土 器 高坏、甕、甕底、甕 石 製 品 剥片(黒曜石)、石斧、丸石	S-50	甕口縁、甕底、丹塗り土器、甕×甕、甕×高坏、支脚、破片
S-22	弥生土 器 甕口縁、甕、破片	S-51	弥生土 器 甕?、甕底、小甕、器台、破片 木 製 品 木片
S-24	弥生土 器 甕口縁、甕底、甕?、丹塗り土器、支脚、破片	S-52	弥生土 器 甕底、甕、支脚?、破片 石 製 品 石刷
S-25	弥生土 器 甕、甕口縁、甕底、甕、甕口縁、広口甕、甕×甕 器台、破片 石 製 品 石包丁? 木 製 品 木片	S-53	弥生土 器 甕口縁、甕底?、破片 石 製 品 砥石?
		S-54	弥生土 器 甕口縁、破片
		S-55埋土中	弥生土 器 破片
		S-55	弥生土 器 甕口縁、甕底、破片 木 製 品 柱材

S-56

弥生土	器・破片
木製	品 柱材、板材（共にS-50可能性あり）

S-57

弥生土	器・破片
木製	品 木片

S-58

木製	品 柱材？（S-58ではない可能性あり）
----	----------------------

S-60

木製	品 板材
----	------

S-61

弥生土	器 甕口縁、甕×高坏、破片
-----	---------------

S-62

弥生土	器・甕、破片
木製	品 板材

S-63

弥生土	器・甕(丹塗り)、破片
木製	品 柱材、加工材、木片

S-64

木製	品 柱材、木片（共にS-64ではない可能性あり）
----	--------------------------

灰褐色土

国産陶	器・甕？
弥生土	器 甕口縁、甕底、丹塗り土器、器台、支脚、破片
瓦	類 平瓦(調目、格子)、丸瓦(調目、格子)

暗灰色粘土

弥生土	器・甕、甕口縁、甕底、甕、小甕、丹塗り土器、破片
石製	品 石鉋、玄武岩片

灰色粘土

弥生土	器・甕口縁、甕高、甕×甕、甕、小甕、破片
石製	品 砥石？
土製	品 粘練率、土製円板

灰色粘土最下

弥生土	器・甕、煎目突帯、破片
-----	-------------

灰褐色土

木製	品 木片
----	------

表層

弥生土	器・甕、破片
石製	品 礫

表土

須恵	器？
弥生土	器・甕、破片
瓦	類 平瓦(調目、格子)

出土地不明

白	類 破片(?)
弥生土	器 高坏、甕、甕、器台、円錐形加工品、支脚、丹塗り土器、破片
瓦	類 平瓦(格子)
石製	品 剥片(黒曜石、安山岩)、大形槍刃石斧、搔器
土製	品 土製円板、土塊

2、国分千足町遺跡第2次調査

(1) 調査に至る経緯

太宰府市大字国分（現国分3丁目）489-2で、筑前国分寺跡の南西約300mに位置する。

1988（昭和63）年8月に宅地造成に対する文化財についての問い合わせがあった。1989（平成元）年5月20日、確認調査を実施し、遺構が確認された対象地北半部を中心に発掘調査を実施することとなった。発掘調査は1990（平成2）年8月7日～9月30日にかけて、開発者の費用負担で実施した。調査は城戸康利が担当した。調査対象面積966㎡、調査面積427㎡。

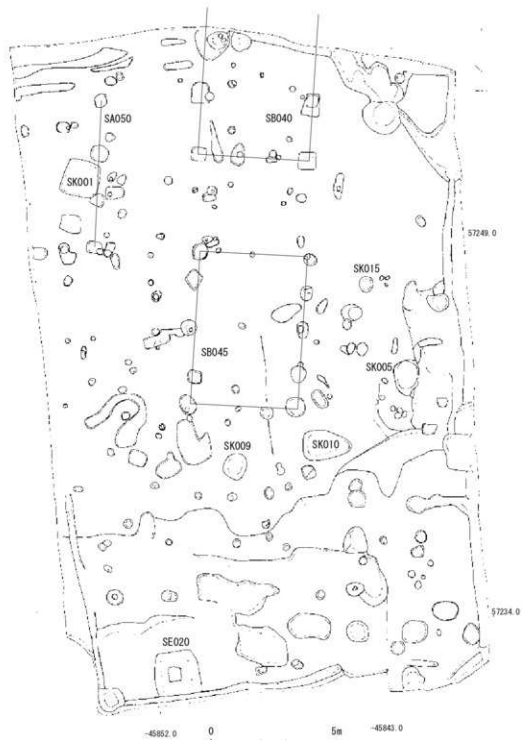


Fig. 34 第2次調査遺構全体図 (1/150)

(2) 基本層位 (Fig. 35)

遺構面は1面で、北から南へ低くなっており、耕作土上面からの遺構面の深さは、北端で0.25m、南端で0.7～1.2mほどである。さらに調査区外南側は9世紀前半代



Fig. 35 第2次調査区土層模式図

と考えられる氾濫原となり遺構は残存していない。このことから本調査は氾濫原の端部に位置し遺構はかなり削平されていると考えられる。調査地は水田の耕作土や床土が全体を覆い、その下に黄色土があり、それを除去すると遺構が検出されるが、南側ほど遺構検出面は深いため、包含層が覆っている。包含層は南側ほど厚くなる粘質の暗灰色土である。地盤は礫や砂質で硬い淡褐色土、その下層に砂っぽい黄茶色土、さらにその下には明茶色のやや粗い砂質土である。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

2SB040 (Fig. 37, Pla. 4)

桁行2間(2.4m)以上、梁間3間(4.4m)の南北棟で、北側は調査区外に続いている。掘り方は一辺0.7m前後の方形であるが、梁間の掘り方は方形をなしていない。柱間は、桁行は約2.4m、梁間は両側が約1.6m、中央が約1.2mである。

2SB045 (Fig. 37, Pla. 4)

桁行2間(6.2m)×南北2間(4.3m)の南北棟である。掘り方は径0.6m前後の円形で、梁間は中央の掘り方が径0.2mと小さい。柱間は桁行が約3.1m、梁間は約2.15mである。

柵列

2SA050 (Fig. 36)

南北3間の柵列で全長6mである。掘り方は一辺0.5～0.6mの隅丸方形で、柱間は約2mである。

井戸

2SE020 (Fig. 38, Pla. 5)

調査区内で南端にあり、大きく削平されているとみられる。掘り方は東西1.8m、南北1.76m、深さ0.48mの方形で、その中央には0.56×0.5m、深さ0.08m程の方形井戸枠痕跡が確認できる。

土坑

2SK001 (Fig. 38)

東西1.48m、南北1.46m、深さ0.29mの方形土坑である。

2SK005 (Fig. 38, Pla. 5)

東西1.0m、南北1.4m、深さ1.0mの楕円形土坑である。

2SK009 (Fig. 38)

東西8.6m、南北1.0m、深さ0.6mの楕円形土坑である。

2SK010 (Fig. 38)

東西1.9m、南北1.2m、深さ0.36mで、イチジ

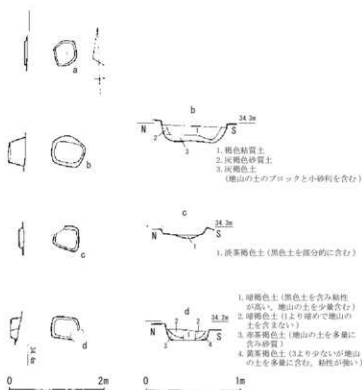
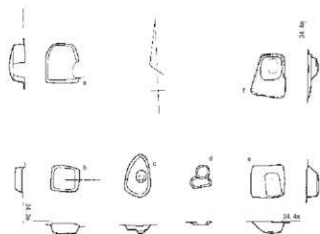


Fig. 36 2SA050 遺構実測図 (1/80, 1/40)

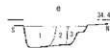
2SB040



1. 明褐色土
2. 淡褐色砂質土
3. 暗茶色土 (粘質や砂あり)
4. 明黄茶色砂質土



1. 暗茶色土 (黄色土ブロックを含む)
2. 淡褐色土 (砂質)
3. 黄灰色砂質土
4. 茶灰色土
5. 暗黄茶色土 (少し粘質あり)

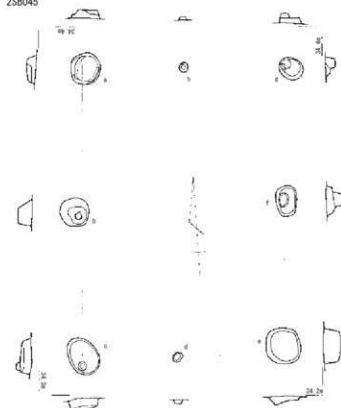


1. 暗黄茶色粘質土
2. 黄灰色砂質土
3. 明黄灰色砂質土



1. 暗灰色土
2. 黄灰色砂質土
3. 茶色砂質土
4. 黄色粘質土

2SB045



1. 暗褐色土
2. 暗茶褐色土
3. 明黄褐色土 (地山のよつれた土)
4. 暗褐色土 (1の土に地山の土を含む)



1. 暗灰色土
2. 暗黄褐色土
3. 暗赤褐色土
4. 暗灰色土 (1の土に灰色の粘土が混入)
5. 黄褐色土 (汚れた地山の土)



1. 暗茶色土
2. 黄茶色粘質土



1. 暗褐色土 (黄色土ブロック、粗砂を含む)
2. 暗茶色土 (少し粘質あり)



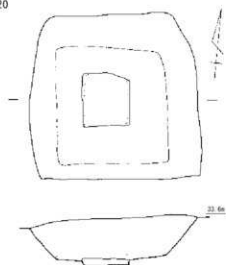
1. 暗茶褐色土 (柱痕跡少)
2. 茶褐色土 (黄色土ブロック含む)
3. 黄茶色粘質土 (地山の可能性あり)

0 3m

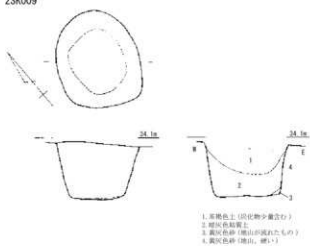
0 1m

Fig. 37 2SB040・045 遺構実測図 (1/80、1/40)

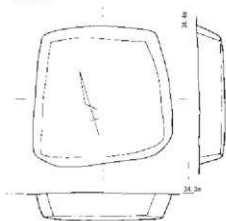
2SE020



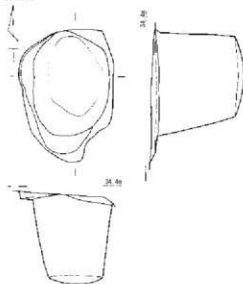
2SK009



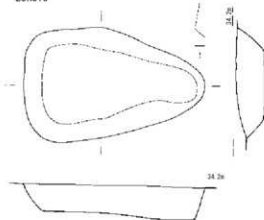
2SK001



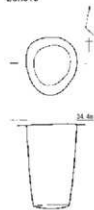
2SK005



2SK010



2SK015



0 2m

Fig. 38 第2次調査井戸・土坑遺構実測図 (1/40)

ク形をした土坑である。

2SK015 (Fig. 38)

東西 0.54m、南北 0.6m、深さ 0.89m の円形のピットである。

(4) 出土遺物

掘立柱建物

建物の掘り方から出土した遺物は僅かであったため、図化できるものを掲載した。

2SB045b (S-16) 出土遺物 (Fig. 39)

弥生土器

甕 (1) 復元底径 9.6 cm。全体的に摩滅するが外面に僅かにタテハケのような痕跡が残る。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は内面が黒灰色、外面は淡橙黄色を呈する。

2SB045c (S-18) 出土遺物 (Fig. 39)

須恵器

甕もしくは壺 (2) 焼成良好で、内外面回転ナデ、色調は暗灰色を呈する。

弥生土器

甕 (3) L字形に曲げた口縁部で、色調は淡橙黄色を呈する。

2SB045e (S-27) 出土遺物 (Fig. 39)

弥生土器

甕 (4) 口縁端部の小片で、色調は淡橙黄色を呈する。

土坑

2SK001 出土遺物 (Fig. 39・40、Pl. 14)

須恵器

蓋 3 (5、6) 5 は口縁端部を若干折り曲げている。6 は口縁端部が断面三角形ではなく、丸味のある形状をなす。

土師器

坏 d (7) 復元口径 15.8 cm、器高 2.5 cm、復元底径 7.6 cm。全体的に摩滅し調整不明。色調は橙色を呈する。

皿 a (8) 復元口径 23.0 cm。底部は若干丸味があり、口縁端部は僅かに外反し、内側に段が施されていたような痕跡がみられる。胎土は精製され、色調は橙色を呈する。

瓦類

丸瓦 (9) 全体的に摩滅が目立つが、欠損は一部だけで、長さ 37.0cm、現存最大幅 16.2cm。焼成還元不良で、色調は橙白色を呈する。内面は布目が明瞭に残り、外面は粗い縄目叩きの後、縄目をナデ消している。

軒平瓦 (10) 全体的に摩滅が目立つが、欠損は一部だけである。長さ 37.1cm、最大幅 32.5cm、瓦当面は上外区が 23 個の珠文、下外区と脇は鋸歯文、それらに囲まれて扁形唐草文が施されている。凸面は縄目叩き、凹面には模骨痕と布目がうっすら残る。

2SK005 出土遺物 (Fig. 41)

須恵器

坏 c (1、2) 2 点とも色調は灰白色を呈する。1 は低い高台を貼付する。

土師器

坏 a もしくは d (3) 底部のみで、全形は不明瞭。全体的に摩滅し調整が明瞭ではないが、底部外面

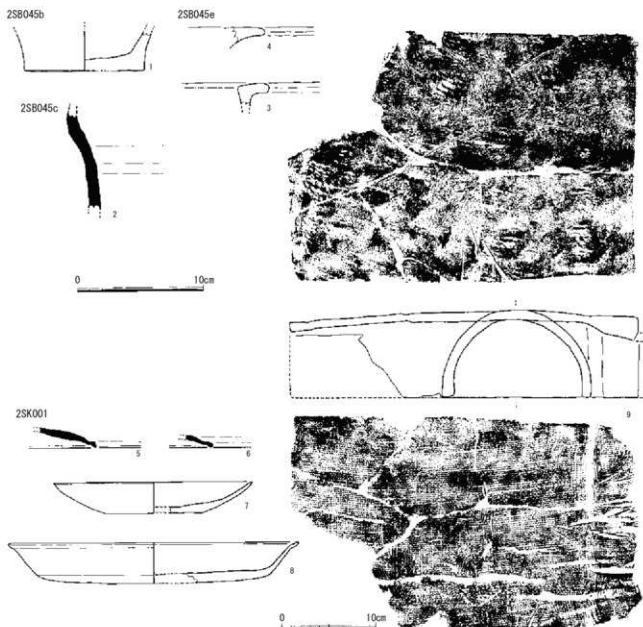


Fig. 39 2SB045・2SK001 ①出土遺物実測図 (1/3, 9は1/4)

には板状圧痕が残る。色調は橙褐色を呈する。

黒色土器

甕 (4) A類。胎土は白色砂粒や茶色粒を多く含み、全体的に摩滅するが外面下半に煤が付着する。

瓦類

丸瓦 (5) 焼成良好で、色調は白灰色を呈する。凹面は布目残り、凸面は縄目叩きをナデ消している。

平瓦 (6) 凹面は布目、凸面は縄目叩きを施す。側面はヘラケズリ調整。焼成良好で色調は白灰色を呈する。

2SK009 出土遺物 (Fig. 41)

須恵器

蓋 3 (7, 8) 2点とも口縁端部は貧弱な断面三角形を成す。色調は灰白色を呈するが、8の端部は黒色を呈する。

蓋 (9) 蓋の小片で、外面上半部に墨書があるが、文字の内容は不明である。

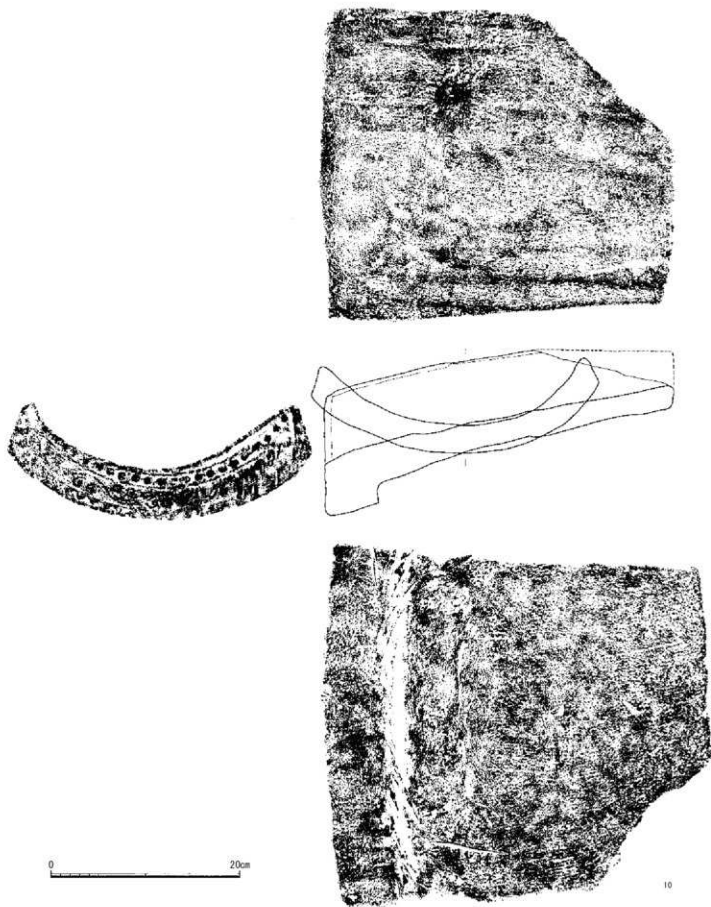


Fig. 40 2SK001 ②出土遺物実測図 (1/4)

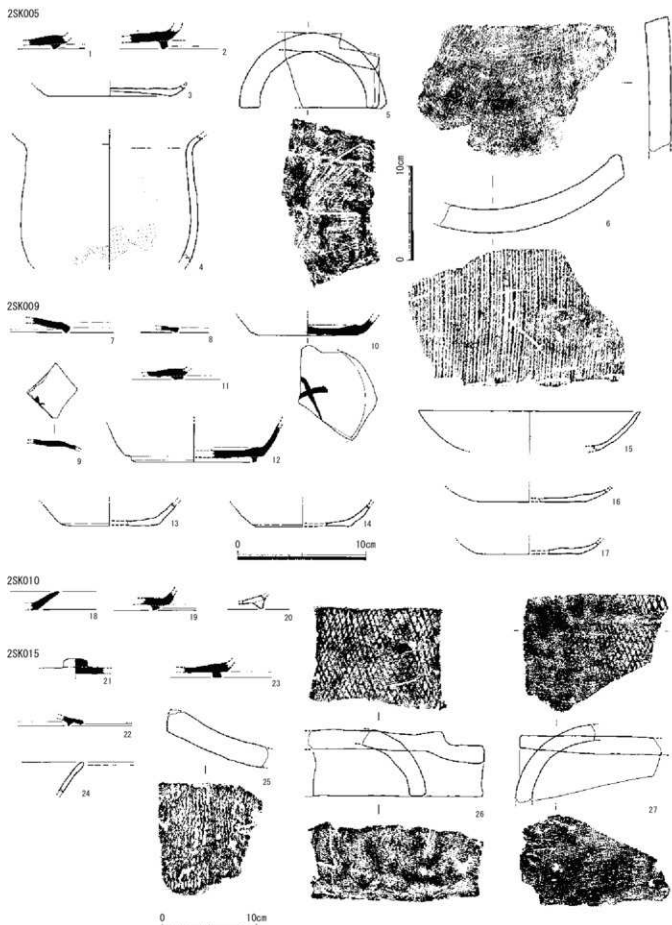


Fig. 41 2SK005・009・010・015 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

坏 a (10) 復元底径 9.0 cm。色調は灰白色で外面底部は粗いナデ、その他は回転ナデ調整である。底面外面に墨書が薄く残るが、文字か記号かは不明である。

坏 c (11, 12) 11 は低い高台を貼付する。12 は細い高台を貼付し、復元高台径 10.0 cm。底部内面は不定方向のナデ、外面はナデ、その他は回転ナデ調整。

土師器

坏 a (13, 14) 2 点とも底部は平坦で、体部と底部境は若干丸味がある。13 は復元底径 8.0 cm。色調は黄白色を呈する。14 は復元底径 8.0 cm。色調は橙黄色を呈する。

坏 d (15 ~ 17) 3 点とも色調は橙色や暗橙色を呈する。15 は復元口径 17.6 cm。内外面にミガキ a が残る。16 は復元底径 9.0 cm。底部は回転ヘラケズリである。17 は復元底径 8.5 cm。底部は回転ヘラケズリである。

2SK010 出土遺物 (Fig. 41)

須恵器

皿 (18) 器高 1.5 cm で、色調は灰色で、口縁端部は黒色を呈する。

坏 c (19) 若干潰れた高台を貼付する。色調は暗灰色を呈する。

土師器

碗 c (20) 小片で摩擦が目立ち調整不明である。色調は白黄色を呈する。

2SK015 出土遺物 (Fig. 41)

須恵器

蓋 c (21) ボタン状のツマミを貼付する。

蓋 1 (22) 焼成良好で色調は灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

坏 c (23) 断面方形の高台を貼付し、内外面とも回転ナデ調整である。

土師器

坏 (24) 内外面とも回転ナデ調整。色調は白黄色を呈する。

瓦類

平瓦 (25) 焼成が若干不良で摩擦が目立つが、凸面は縄目叩きを施し、側面はヘラ切りである。

丸瓦 (26, 27) 2 点とも凸面に小さな格子叩きを施す。凹面は布目が残る。焼成は良好で淡灰色などを呈する。

井戸

2SE020 掘り方と枠中出土遺物 (Fig. 42)

須恵器

坏 c (1, 2) 1 は復元口径 14.2 cm、器高 3.0 cm、復元高台径 10.4 cm。底部端に低い高台を貼付する。色調は灰色を呈する。2 は復元高台径 7.8 cm。色調は暗青灰色を呈する。

土師器

坏 d (3) 外面は回転ヘラケズリ、内面はミガキ a が施されている。焼成良好で色調は橙黄色を呈する。

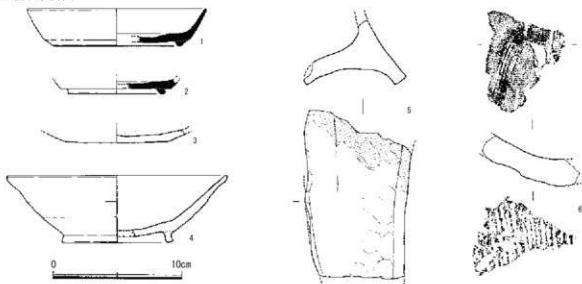
碗 c (4) 復元口径 17.4 cm、器高 5.3 cm、復元高台径 8.8 cm。直線的に外反する体部で、内外面とも回転ナデ調整で、色調は黒茶色を呈する。

移動式竈 (5) 庇の前面部分で、内外面ともナデ調整で指頭圧痕が残る、部分的に煤が付着する。

瓦類

平瓦 (6, 7) 6 は凹面に布目、凸面には粗い縄目叩きが施されている。色調は黒灰色を呈する。7 は凹面には糸切りと布目痕跡が残る。凸面には縄目叩きを施す。側面はヘラ切りである。色調は暗灰色や

2SE020 掘り方と枠中



その他の遺構

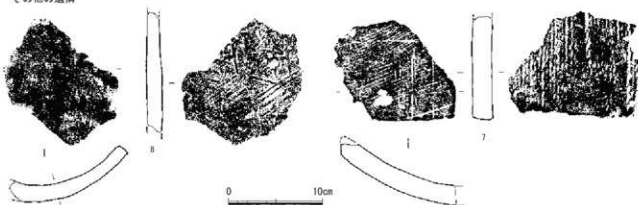


Fig. 42 2SE020、その他の遺構出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

黒茶色を呈する。

その他

その他の遺構出土遺物 (Fig. 42)

瓦類

平瓦 (8) 凸面は「未」の文字と平行叩きを施す。S-7 より出土。

(5) 小結

今回の調査で検出した遺構について、弥生土器は出土するものの、遺構に直接伴うものではなく、全て8世紀後半～9世紀初頭にかけての遺構であった。掘立柱建物 (2SB040・2SB045) と柵列 (2SA050) については、出土遺物が僅かで、その遺物は弥生土器や須恵器であったが、時期を決定するには乏しい状況である。弥生土器については、周辺の調査で弥生中期の集落が確認されていることもあり、遺構に混入することはあり得る環境である。これらのことから、掘立柱建物と柵列についても、周囲の遺構と同じく8世紀後半～9世紀初頭頃のものと同推測される。

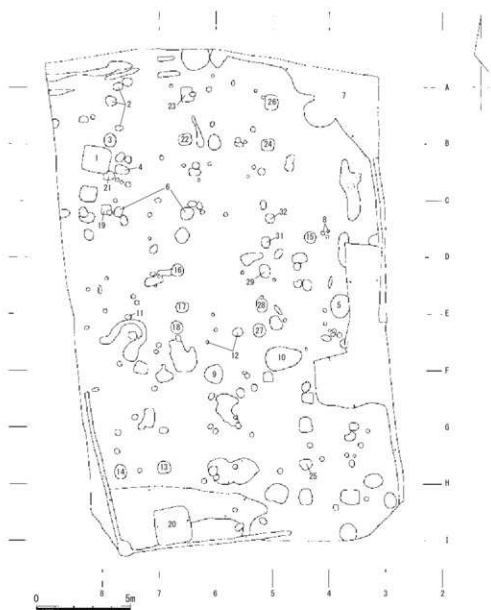


Fig. 43 第2次調査遺構略測図 (1/200)

表.3 国分千足町遺跡第2次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	2SK001	土坑		8世紀後半～末	C7・8
2	2SA050a	ビット群	一部がS-50	古代	B7
3	2SA050b	ビット	S-50の一部	古代	B7
4		ビット			C7
5	2SK005	土坑		8世紀末前後	E3
6	2SB045a	ビット群	一部がS-45	奈良時代	D6・7
7		横乱	掘抜き	近代～	A～G、3～5
8		ビット群		奈良時代	D4
9	2SK009	土坑		9世紀初頭	F6
10	2SK010	土坑		平安初期	F4
11		ビット		古墳時代以降	F7
12		ビット群		古代	F5・6
13		ビット		古代	H6
14		ビット		古代	H7
15	2SK015	土坑		平安初期	D4
16	2SB045b	ビット	S-45の一部		E6
17		ビット	暗褐色灰色土、礫少し含む		E6
18	2SB045c	ビット	S-45の一部	古墳時代以降	F6
19	2SA050d	ビット	S-50の一部		D7
20	2SE020	井戸		8世紀後半～末頃	I6
21	2SA050e	ビット	S-50の一部		C7
22	2SB040b	ビット	S-40の一部		B6
23	2SB040a	ビット	S-40の一部		B6
24	2SB040e	ビット	S-40の一部		B5
25		ビット		奈良時代	H4
26	2SB040f	ビット	S-40の一部		B5
27	2SB045e	ビット	S-45の一部		F5
28		ビット			E5
29	2SB045f	ビット	S-45の一部		E5
31		ビット			D5
32	2SB045g	ビット	S-45の一部		D5
40	2SB040	掘立柱建物		8世紀後半～9世紀初?	A～C、5・6
45	2SB045	掘立柱建物		8世紀後半～9世紀初?	D～F、5・6
50	2SA050	横列	S-2、3、19、21	8世紀後半～9世紀初?	B～D7

表.4 国分千足町遺跡第2次調査 出土遺物一覧表

S-1	
須 惠	器蓋3、破片
土 師	器蓋×皿?, 皿a、坏d、甕、破片
瓦	類丸瓦(調酒し)、軒平瓦
S-2	
須 惠	器环
瓦	類平瓦(格子)
S-3	
須 惠	器蓋?
土 師	器破片
瓦	類平瓦、丸瓦
S-4	
石 製 品	黒石?
S-5	
須 惠	器坏c、甕、壺、破片
土 師	器坏、坏a×d、甕
黒色土器A	類碗、甕
瓦	類平瓦(調日、格子、無文)、丸瓦(調酒し)
S-6	
須 惠	器蓋3、坏蓋、破片
土 師	器破片
石 製 品	測片(黒曜石)
S-7	
須 惠	器蓋、坏a、坏c、甕、鉢?
肥前系磁器	碗
国産陶器	土管、土瓶
弥生土器	甕
瓦	類平瓦(調日、格子、無文)、丸瓦(格子、無文)
S-8	
須 惠	器蓋3、甕
瓦	類破片
S-9	
須 惠	器蓋3、坏、坏a、坏c、甕、蓋(墨蓋)
土 師	器坏a、坏d、甕
瓦	類平瓦(調日)
S-10	
須 惠	器蓋、坏、坏c、皿、甕
土 師	器蓋、碗c、甕、甕類
瓦	類破片
金屬製品	銅鐸
S-11	
土 師	器甕
S-12	
土 師	器坏、甕類
S-13	
土 師	器高坏
瓦	類平瓦(無文)
S-14	
須 惠	器破片
S-15	
須 惠	器蓋1、蓋c、坏c、甕、壺?
土 師	器坏、甕
瓦	類平瓦(調日)、丸瓦(格子、無文)
S-16	
弥生土器	甕
S-18	
須 惠	器甕、破片
土 師	器甕?
弥生土器	甕
S-20掘り方と枠中	
須 惠	器坏c、破片
土 師	器坏、坏d、碗c、カマド
瓦	類平瓦(調日)
S-20枠内	
須 惠	器破片
土 師	器甕?
S-25	
須 惠	器坏c、破片
S-27	
弥生土器	甕
精灰色土+黄色土	
須 惠	器蓋3、高坏
土 師	器蓋3、高坏
黒釉陶器	天目碗
瓦	類丸瓦(調酒し)
黄色土	
須 惠	器蓋3、蓋c、坏a、坏c、甕、壺、破片
土 師	器破片
瓦	類平瓦(調日、破片)、丸瓦(調日、格子)
茶色土	
須 惠	器蓋3、蓋c、坏a、坏c、甕、鉢
土 師	器坏a、碗c、甕
黒色土器A	類碗
瓦	類平瓦(調日、格子、無文)、丸瓦(無文)
石 製 品	測片(黒曜石)

3、国分千足町遺跡第3次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市国分三丁目4-28(584番8)で、共同住宅の基礎工事によって遺構に影響が及ぶため、発掘調査を実施することとなった。調査は緒方俊輔が担当し、狭川真一、山村信榮、塩地潤一が補佐し、1991(平成2)年6月24日～9月4日に実施した。開発対象面積は1000㎡で、調査面積は840㎡である。

(2) 基本層位

調査地付近は四王寺山の南西裾に広がる扇状地の標高38mに位置する。調査前の調査地は畑地で、南側約50mに大谷川があり西に流れる。

基本的な層位は、耕作土である灰色土、黄灰色土が20～30cmほど堆積し(以上が表土)、近世までの遺物を含む茶褐色の遺物包含層が、厚さ15cmほど堆積し遺構面を部分的に覆っていた。後述する住居跡や掘立柱建物の遺構の深さが10cm足らずの箇所もあり、耕作による土地改変により1mから50cm程度の削平を受けているものと考えられる。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

3SB010 (Fig. 45)

東西3間、南北3間の方形プランで、検出長は東西5.7m、南北5.1m、方位はN-2°40'-Wを測る。柱穴eには直径20cmの一段深い穴が残存していた。掘方の残りは浅く10cm程度で、柱は柱穴eの所見から径20cm程度であったことが知られる。柱穴gから須恵器壺の高台が出土し8世紀以降の所産で、南北に長い3SB040とはセット関係にある建物と考えられる。

3SB040 (Fig. 46, Pla. 7)

東西3間(南側は2間)、南北5間の南北に長い長方形プランで、検出長は5.2×12.8m、方位はN-1°50'-Wを測る。KとQを除く柱穴で直径20cmの柱痕跡が確認されている。柱穴の掘方は方形を呈し、aの柱痕跡の下には沈み込みを避けるため小礫が置かれている。筑前国分寺周辺では最大級の建物である。8世紀後半の3SK038に切られる。8世紀後半以降の所産である。

竪穴住居

3SI020 (Fig. 47, Pla. 8)

調査区の南西側に検出された遺構で、南北6.2m、東西4.8m、深さ0.1mの南北に長い長方形プランを呈す。埋土は炭が多く混じる褐色土の上に焼土や木炭塊がのる。床面中央が方形に一段低く、壁際には幅15cmほどの壁溝が巡り、東側中央では2か所が中央に向かってL字形に張り出している。主柱は明確でなくa, d, eが候補として考えられる。eはL字に張り出す溝の間にあり、床面より20cmほど掘りくぼめられている。東側の壁際中央の埋土中より初期須恵器の高坏片が出土している。

3SI030 (Fig. 48, Pla. 8)

調査区中央にあり南北6.2m、東西6.6m、深さ0.1mの方形プランを呈す。埋土は褐色土で壁際には幅10cmほどの壁溝が切れ切れに巡っている。中央に床の北側が赤く焼けた窪みhがあり炉跡の可能性もある。その周辺は方形の浅い窪みgがある。主柱はb, c, d, iの4本とみられる。床面で布留式新相段階の甍が出土している。

井戸

3SE002 (Fig. 49, Pla. 9)

調査区中央付近で3SI030の東側を切る形で検出された遺構で、直径5m、深さ4mを測る。断面形は



Fig. 44 第3次調査遺構全体図 (1/200)

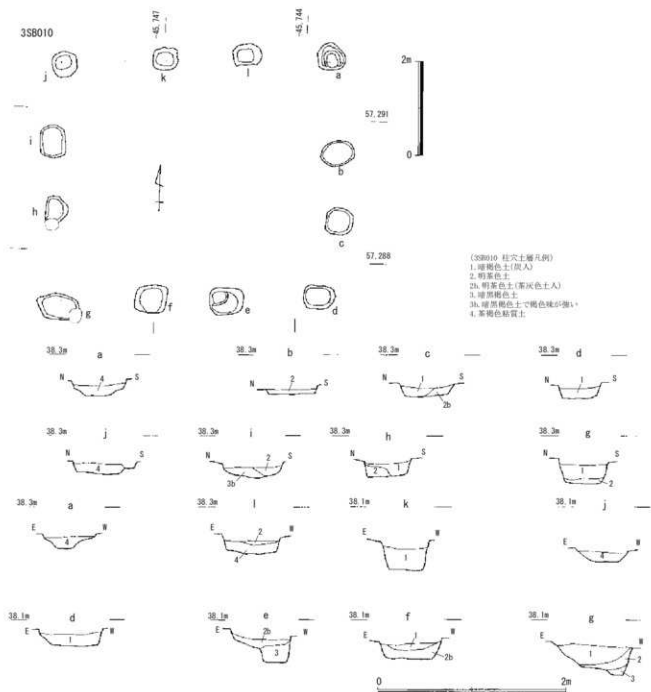


Fig. 45 3SB010 遺構実測図 (1/80, 1/40)

上位が円形の漏斗状に開く形状で、下位は方形で深さ50cmの段が付く。井戸杵などの木質は残っていない。8世紀後半から9世紀初頭頃の遺物が出土している。検出された位置から掘立柱建物に関連する遺構と考えられる。

3SE036 (Fig. 49, Pla. 9)

調査区南側で発見された遺構で、掘方の長径は4.1m、井戸杵の内径は0.5m、深さ1.8mを測る。杵は下位が高さ0.8mの円形の桶状の木製品で、上位は角亜礫の積み石によって構築されている。瓦を主体とする9世紀後半以降の遺物が出土している。

土坑

3SK003 (Fig. 48)

2.1×1.2mの東西に長い方形の遺構で、深さ0.2mを測り、上位に褐色土、下位に淡褐色土があり、

3SB040

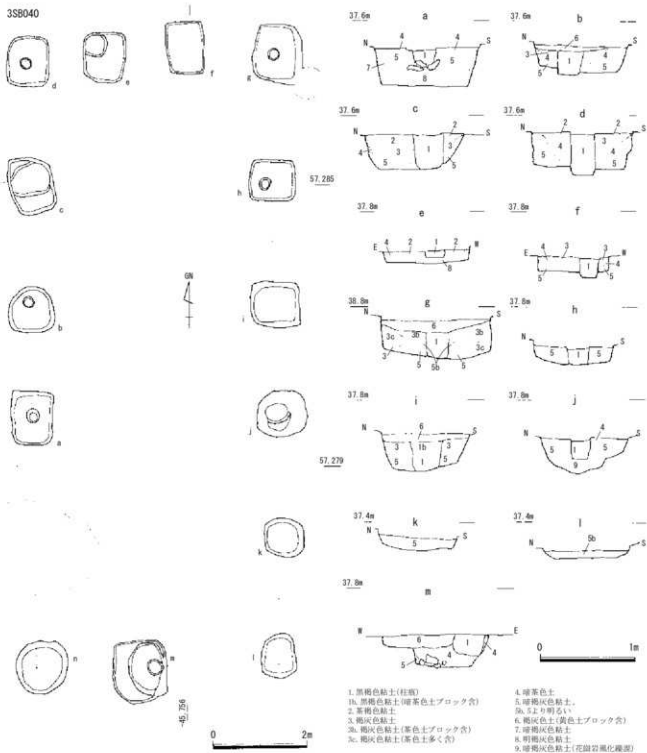


Fig. 46 3SB040 遺構実測図 (1/80、1/40)

その間に薄く木炭が堆積する。

3SK035 (Fig. 49)

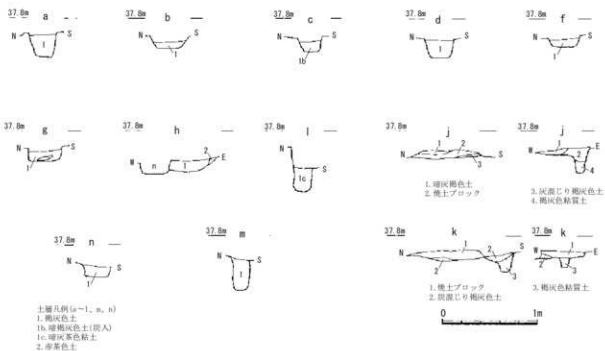
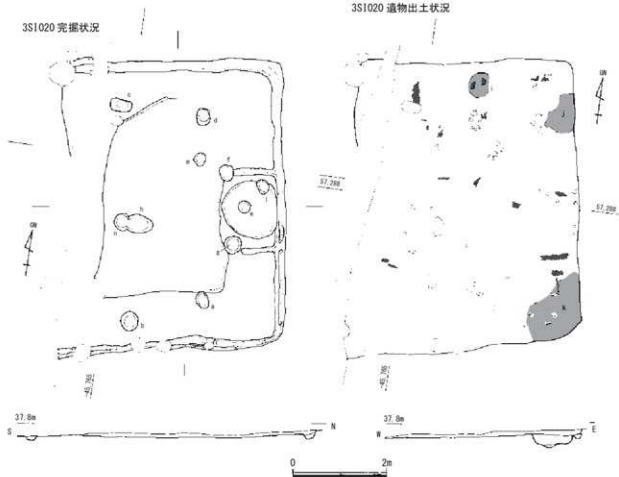
調査区南側で3SE036を切る遺構として検出された。直径1.6m、深さ0.6mを測る。9世紀後半以降の遺物が出土している。

3SK038 (Fig. 48)

調査区南側の3SB040の西側で検出された平面形が楕円形を呈す遺構で、南北1.8m、東西2.3m以上、

3S1020 完掘状況

3S1020 遺物出土状況



土層凡例 (a-n)
 1. 褐色土
 1b. 埋戻り褐色土 (灰入)
 1c. 埋戻り褐色粘土
 2. 赤褐色土

Fig. 47 3S1020 遺構実測図 (1/80、1/40)

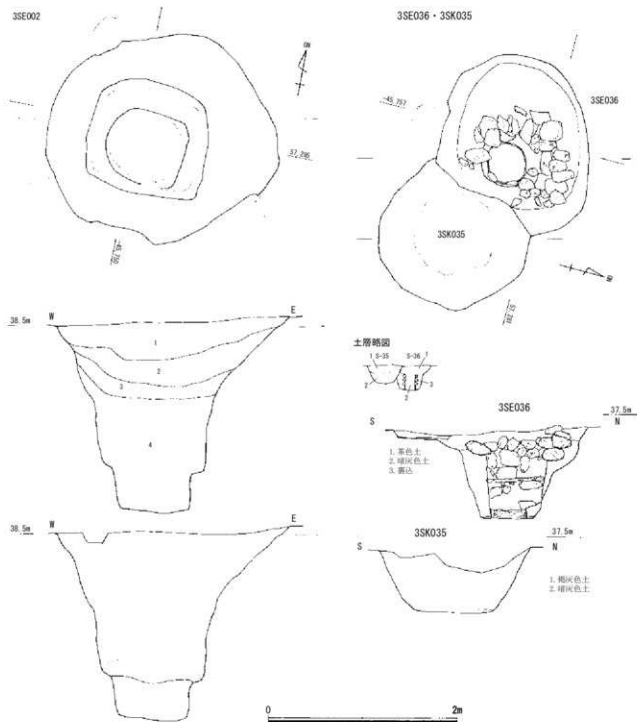


Fig. 49 3SE002・036、3SK035 遺構実測図 (1/40)

深さ 0.5m を測る。

(4) 出土遺物

掘立柱建物

3SB010 出土遺物 (Fig. 50)

須恵器

壺 a もしくは b (1) 高さ 1.5cm ほどの外に開き気味の高台片で、焼成は還元し硬質である。

3SB040c 出土遺物 (Fig. 50)

土製品

輪羽口 (2) 直径 5cm ほどに復元される輪羽口の薄片で、厚さは 1.4cm を測る。内面は明るい橙色、芯は黄灰色、外面は灰色～黒色を呈す。小型品で小鍛冶炉や銅の溶解炉などの用途のものか。

3SB040m 出土遺物 (Fig. 50)

須恵器

坏 a (3) 底径 8.0cm に復元されるもので、底部は切り離しのままで、削りなどの手間は省かれている。軟質で灰白色を呈す。8 世紀後半の所産。

竪穴住居

3SI020e 出土遺物 (Fig. 50, Pla. 14)

土師器

高坏 (4) 口径 17.8cm、高さ 13.0cm、底径 13.6cm を測る。酸化焼成で橙褐色を呈す。坏部の外面下半部が緩い稜線を持って屈曲する。脚部は直線的に開き、端部が短く屈曲する。布留式土器の新相段階の所産と考えられる。

3SI020 出土遺物 (Fig. 50, Pla. 14)

須恵器

高坏 (5) 無蓋式高坏の坏部片で外反せず丸く屈曲する体部を持ち、外面には上位と中位に 2 条の低い突帯を表現する。最終的な焼成は還元焼成で、胎土は硬質で緻密。外面は暗灰色、芯はセピア色を呈す部分がある。須恵器であれば初期段階のもので、半島の陶質土器の可能性もある。

土師器

高坏 (4) 口径 17.0cm を測る。酸化焼成で橙褐色を呈す。坏部の外面下半部は緩い傾斜を持って屈曲する。坏部底に突状の突起を設け脚部と接合している。色調は黄褐色を呈す。

小型丸底壺 (7～12) 9 を除き口径が胴部径より大きな形状で、直線的に開く口縁部に球形の胴部が取り付く。7 の口縁部は中央がやや膨らむ古式の様相を呈す。9 と 10 はやや体部が厚く、内面のナデも指で掻き上げるような状況で新しい様相を持つ。色調は全体に赤みを帯びた黄褐色から明褐色を呈す。布留式の中相から新相段階の所産。

甕 (13) く字形に屈曲して緩く外反して開く口縁部の薄片である。

金属製品

碗形滓 (14) 厚さ 1cm 程度の鉄錆で覆われた薄片で、外縁は直線とカーブを持つため平面形が小判型を呈すものと思われる。

3SI030 出土遺物 (Fig. 50, Pla. 14)

土師器

甕 (16) 口径 16.4cm、高さは現状で 23.3cm を測る。口縁は体部最大径より小さく、く字形に屈曲し短く直線的に立ち上げる。体部外面には細く細かいハケ目が施され、内面は上方斜位にケズリが施される。体部中央付近では器壁の厚みは 0.5cm ほどである。体部は長胴だが器壁は厚めであり、布留式の中相から新相段階の所産といえる。

小型丸底壺 (15) ごく短く上方に立ち上がる口縁と丸底を呈す。内面は粘土紐を押しつぶしたような指押さえの跡があり、口縁内面にハケ目が横方向に見られる。器壁が厚く新しい傾向を示している。

井戸

3SE002 暗黒色土出土遺物 (Fig. 51)

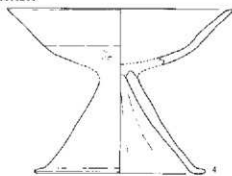
須恵器

蓋 (1、2) 1 は口径 16.5cm に復元され、口縁端部が三角形を呈す。2 は環状のツマミが付く b タイ

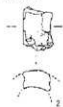
3SB010



3SI020e



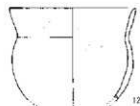
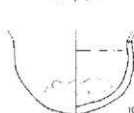
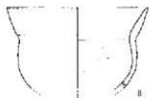
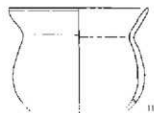
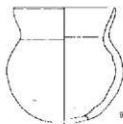
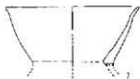
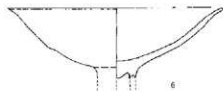
3SB040c



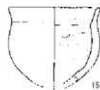
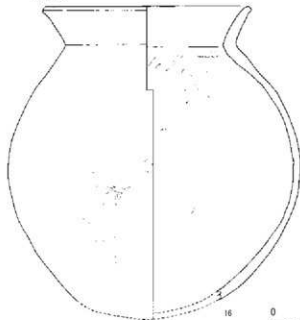
3SB040m



3SI020



3SI030



0 10cm

Fig. 50 3SB010・040、3SI020・030 出土遺物実測図 (1/3)

ブのもので、内面は平滑になり墨の痕跡が見られ、転用硯であることがわかる。還元焼成で暗灰色を呈し硬質である。

坏(3) 3は13.6cmに還元され、大きく開きながら開く形状の口縁を持つ。8世紀でも後半の新しい傾向のものと言える。還元焼成で灰色を呈し硬質である。

平瓶(4) 口径3.4cm、器高7.6cm、底径4.6cmとかなり小振りなミニチュア製品である。そばん玉形の胴部に直立した煙突状の口縁が中心を外した位置に付けられる。天井部にあった把手は欠損している。高台を付ける前に胴部下半は回転ヘラケズリを施しており、正規品の製法を忠実に模倣している。硬い還元焼成で灰色を呈す。

土師器

坏a(5, 6) 5は器高12.8cm、高さ3.8cm、底径7.6cmを測り、底部はやや丸底傾向で口縁端部はやや外に開く。淡い橙褐色を呈す。6は白みを帯びた褐色を呈し、底部は丸底傾向のもの。内外面に墨痕があり、外面は複数が重複するようだが「介」の字が読み取れる。

坏d(7, 8) 7は器高14.0cm、高さ3.3cm、底径7.5cmを測り、底部はやや丸底傾向で口縁端部はやや内反り気味。調整はナデのみでミガキを施さず、このタイプのものとしては新しい傾向を示す。色調は淡い橙褐色を呈す。8は底径8.6cmに還元され平底を呈す。

皿a(7) 緩く「く」字形に短く屈曲する口縁を持ち、底部外面は回転ヘラケズリを、内面には回転を利用したミガキaを施す。8世紀でも古式の傾向を示す。

碗c(10, 11) 10は底径が11.2cmに還元され、外に開く高台が体部との境の底部外側に付けられる。11は径が7cm程に還元されるもので、外底部に墨書で異体字「本」の文字が見られる。色調は、10は白みを帯びた灰色、11は明るい橙色を呈す。

鉢b(12) 口縁端部が短く緩く屈曲して開く形状のもので、明るい橙色を呈す。

甕a(13) く字形に屈曲して開く口縁を持ち、内面は斜位のケズリが施される。灰褐色を呈す。

黒色土器A類

皿a(14) 口径14cm、器高2.5cm、底径6.9cmを測る。薄く端正な作りで、口縁端部が若干屈曲して開く形状で、内面には手持ちの細直線状のミガキが施される。

碗もしくは坏(15) 直線的に開く口縁を持つ。内面にミガキbが施される。

土製品

鋳型(16) 内側は極めの細かい砂状の面となり、外面は粗い土を張り合わせたような状態となる。内面が製品表面側で曲面となっている。

石製品

被熱痕跡のある石(17) 花崗岩礫で表面に帯状に煤が付着している。

3SE002 暗茶色土出土遺物 (Fig. 52, Pl. 14)

緑釉陶器

鉢(1) 黄色味を帯びた白色の精製された胎土で、薄い緑色を帯びた透明釉に、外面は濃緑色の釉が流れるように掛けられている。形状から鉢と考えられるが、三彩である可能性もある。

金属製品

鉄塊系遺物(2) 長さ4.3cm、幅1.8cm、厚さ1.5cmを測る。鉄錆に覆われた多面で棒状の形状を呈する。

3SE002 暗褐色土出土遺物 (Fig. 52, Pl. 14)

越州窯系青磁

碗(3) 端部がやや厚く丸みを持って内側に緩く反る口縁を持つ。黄白色のざらつとした胎土を持ち、

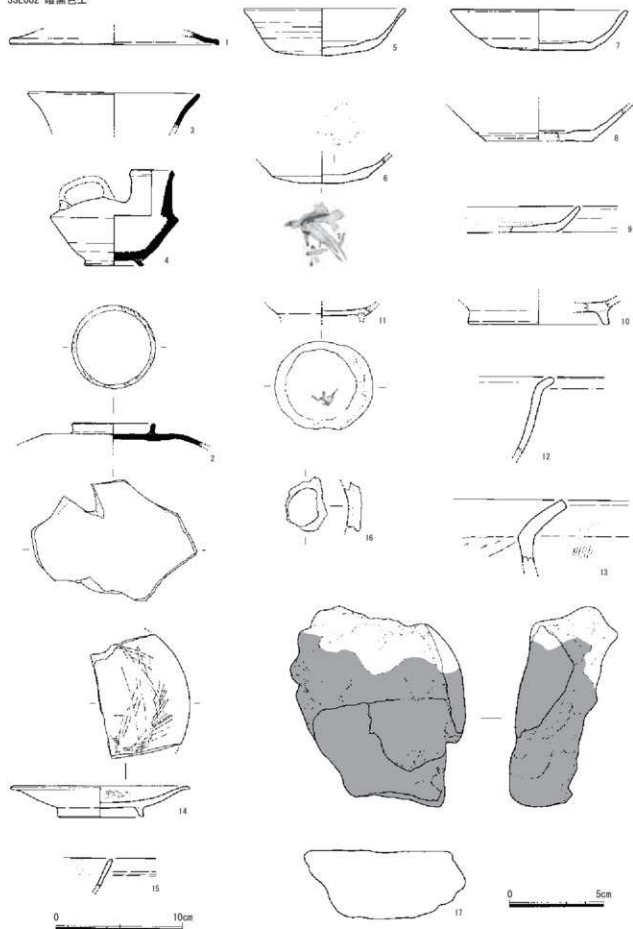


Fig. 51 3SE002 暗黒色土出土遺物実測図 (1/3, 17は1/2)

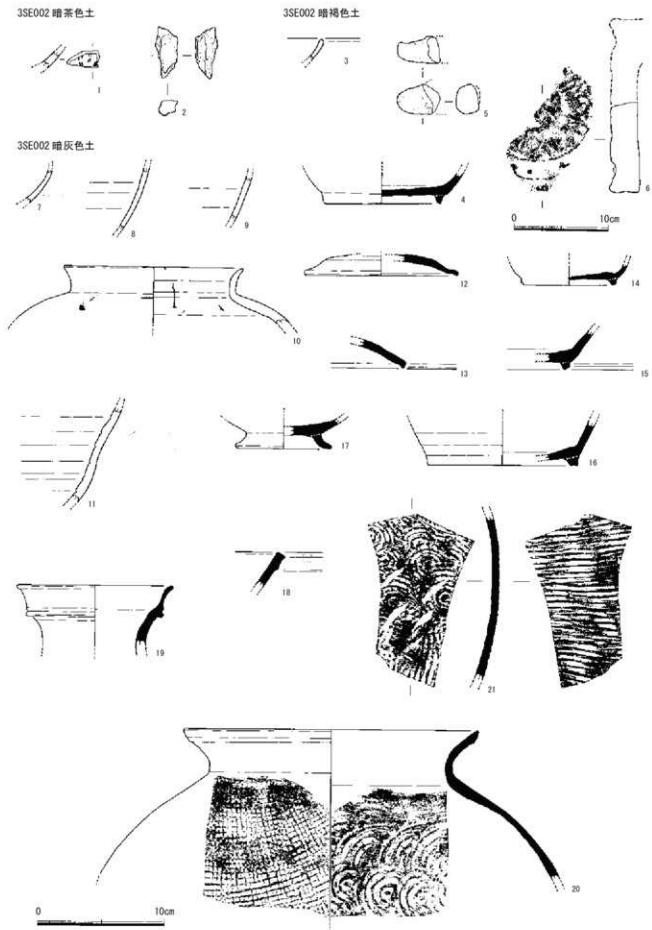


Fig. 52 3SE002 暗茶色土・暗褐色土・暗灰色土①出土遺物実測図 (1/3、6は1/4)

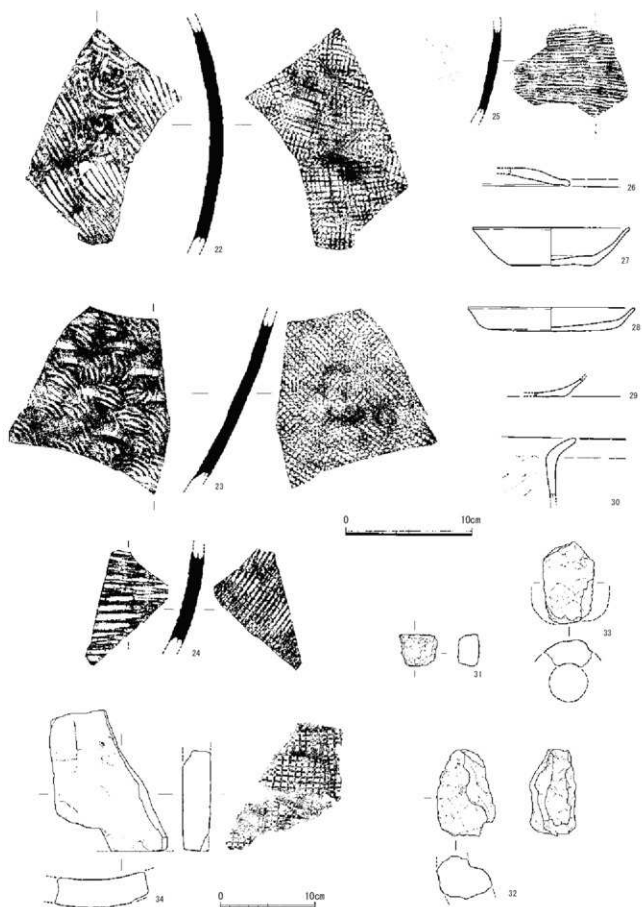


Fig. 53 3SE002 暗灰色土②出土遺物実測図 (1/3、34は1/4)

黄緑色の不透明な釉が施される。長沙窯系青磁の可能性もある。

土製品

鉢型 (5) 長さ 3.5cm、幅 2.5cm の細かい砂が固まったような状態のもので、中子のような用途のものか。

瓦類

軒丸瓦 (6) 外周が珠文帯の鴻臚館系の瓦当面を持つ。厚さ 3.4cm を測る。軟質な還元焼成で灰白色を呈す。

3SE002 暗灰色土出土遺物 (Fig. 52・53, Pl. 14)

須恵器

蓋 3 (12、13) 口縁端部が三角形を呈すもので、12 は口径 12.2cm、器高 1.8cm を測る。天井部に回転ヘラケズリを施す。両者とも硬質な還元焼成で明灰色を呈す。

坏 c (14～16) 高台が体部の外寄りに付けられた c4 タイプのもので、16 は底径が 12.2cm に復元される。どれも硬質な還元焼成で明灰色を呈す。

脚付坏 (17) 短く急に外に開く脚を持つ。径は 7.6cm に復元される。硬質な還元焼成で暗灰色を呈す。

鉢 (18) 口縁端部がくぼんだ方形に厚い形状を呈する。硬質な還元焼成で白灰色を呈す。甕の口縁である可能性もある。

壺 d (19) 外面は稜線を持って屈曲する二重口縁を持つ。口径 12.4cm に復元される。硬質な焼成で芯は酸化、表面はおおよそ還元化している。肥後荒尾地方の窯の産と考えられる。

甕 (20～25) 硬質で 25 のみ表面が酸化しているが、他は還元焼成で暗灰色を呈す。調整は 21 と 25 が外面に平行刻みの、他は格子目のタタキ具を使用し、内面には同心円の青海波文様の当て具痕跡がある。23 は平行刻みの当て具が併用されている。

土師器

蓋 (26) 緩く S 字状に屈曲する口縁端部を持つ。軟質でくすんだ茶褐色を呈する。

坏 a (27) 口径 12.6cm、器高 3.0cm、底径 7.0cm を測る。調整はナデのみでミガキはない。

皿 a (28、29) 29 は口径 12.8cm、器高 2.1cm、底径 10.8cm を測る。ナデ調整。

甕 a (30) く字形に開く口縁に直線的に伸びる胴部を持つ。外面には縦方向のハケ目、内面は斜位のヘラケズリの痕跡が見られる。焼成は硬質で、淡い黄褐色を呈する。

緑釉陶器

壺 (10) 肩の張る胴部から短く外反する口縁を持つ。精製された黄白色の胎土に緑色味を帯びた透明釉がかけられ、流し掛けの手法で濃緑色の釉を施す。

越州窯系青磁

碗 (7) 精製された黄茶色の胎土に淡黄色の釉が掛けられる。長沙窯系の製品である可能性もある。

中国陶器

壺 (8、9) 精製されざらざらした淡赤褐色の胎土に黒褐色の釉が掛けられる。肩衝の長胴になるタイプのものか。

無釉陶器

壺 (11) 器壁が厚さ 0.6cm ほどのもので、外面は不定方向にナデを施し押圧で中央が若干窪み、内面は浅い横方向の沈線が入る。還元焼成で硬質、淡灰褐色を呈す。鴻臚館跡の平安期の出土品などに見られる。朝鮮半島系の須恵質の土器と思われる。

土製品

炉壁 (31, 32) 橙茶色の胎土に 31 は黒褐色の鉱物質の、32 は黒褐色でガラス質の付着物が見られる。31 は焼けた面が上面と側面の連続した 2 面であり、炉の上面と思われる。

輪羽口 (33) 直径 6.5cm ほどに復元される筒状の口の部分で、外面の先端ほど黒色の鉱物化しており、反対側は茶色の土師質になっている。

瓦類

平瓦 (34) 厚さ 3cm の黄灰色の酸化焼成の瓦で、幅 5cm 程の板状のタタキ具による長軸に対して横位の正格子のタタキを施す。格子目は水城跡東門側の瓦窯跡で出土した鴻臚館式期（奈良時代）のものに似ている。厚みがある点も含め平安期のものより古式のものと考えられる。

3SE036 裏込土出土遺物 (Fig. 54・55)

土師器

碗 c (1) 底径 8.1cm を測り、灰白色を呈す。断面三角形の低い高台が付けられ、坏の底部はやや押し出し気味に膨らむ。Ⅷ期以降の所産か。

土製品

炉壁 (2) 茶褐色を呈す厚さ 3.1cm ほどの板状のもので、片側は平坦な面になり褐色の付着物が見られる。炉の内側の断片と考えられる。

瓦類

軒丸瓦 (3) 厚さ 2.6cm ほどの乳灰褐色を呈す軟質のもので、子葉を線で表現するタイプの瓦当面を持つ。九州歴史資料館分類 230 形式に相当し、大宰府政庁第Ⅲ期成立期（940 年以降）の所用瓦である。

丸瓦 (4～7) 1.8～2.2cm ほどの厚みを持ち、還元焼成で灰色を呈し、4 と 7 は軟質、他は硬質の焼成である。長軸方向に長い幅 3cm ほどの斜格子のタタキ目を持ち、大半が筑前国分寺跡南西角での第 21-1 次調査で分類した C2 類に該当する。

平瓦 (8, 9) 2.0cm ほどの厚みを持ち、還元焼成で暗灰色を呈し、9 は軟質、8 は硬質の焼成である。側辺は分割の切り込みが内側のみであり、外側寄りには破面のままとまっている。長軸方向に長い幅 4cm ほどの斜格子のタタキ目を持ち、筑前国分寺跡第 21-1 次調査で分類した C2 類に該当する。

3SE036 茶色土出土遺物 (Fig. 55)

須恵器

甕 (8) 厚さ 1.2cm ほどで、還元焼成で硬質であり薄灰色を呈す。外面は並行刻みのタタキ目、内面には青海波文の当て具痕が残る。

土師器

碗 c (9) 底径 8.4cm に復元され、丸底気味の底部に開く形状の高台が付く。白っぽい褐色を呈す。

瓦類

丸瓦 (10, 11) 厚さ 1.5～2.1cm ほどで、還元焼成で硬質であり暗青灰色を呈す。C2 類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。側辺小口には内側に分割のための切り目があり、外側は破面のままである。

平瓦 (12～14) 厚さ 2.2～2.5cm ほどで、酸化気味の軟質な焼成であり、13 は淡い橙色、他は白っぽい灰褐色を呈す。C2 類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。

3SE036 暗灰色土出土遺物 (Fig. 55, Pl. 14)

土師器

坏 a (15, 16) 15 は口径 10.9cm、器高 2.6cm、底径 7.6cm を測る。平底で直線的に開く体部を持つ。口縁端部が帯状に黒色化する。16 は口径 11.3cm、器高 2.8cm、底径 7.8cm を測る。少し膨らみ気味の底でやや内湾気味に開く体部を持つ。

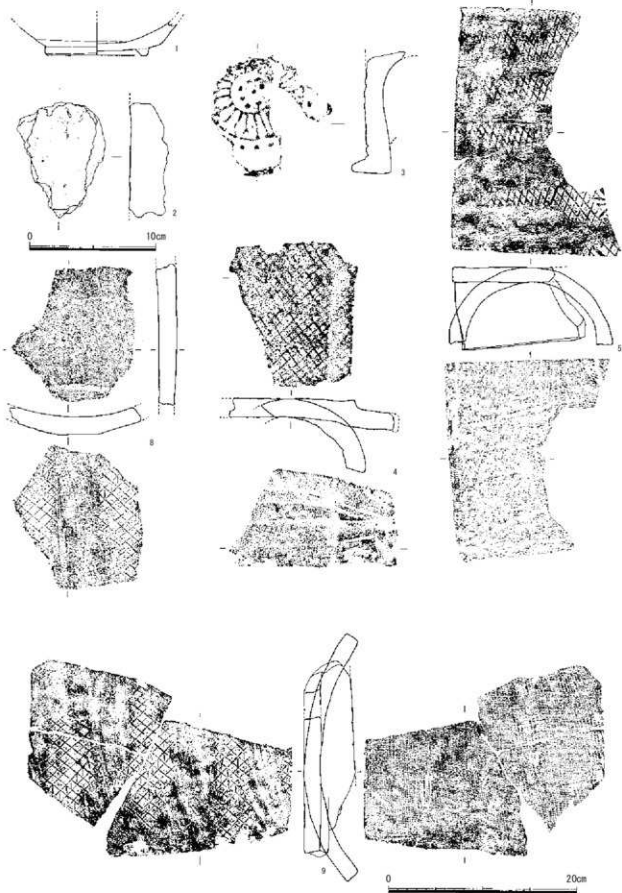
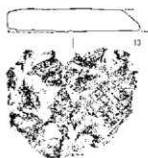
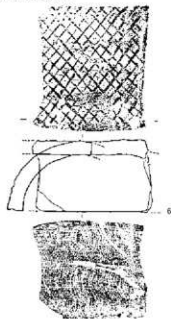


Fig. 54 3SE036 裏込土①出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

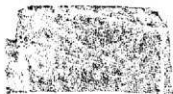
3SE036 裏込土



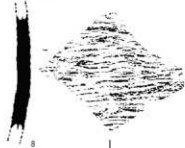
3SE036 暗灰色土



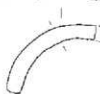
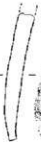
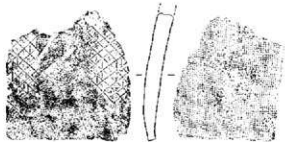
0 10cm



3SE036 茶色土



8



0 10cm

Fig. 55 3SE036 裏込土②・茶色土・暗灰色土出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

瓦類

軒平瓦 (17) 瓦当面の幅が 5.8cm を測り、軟質な還元焼成で表面は黒味を帯びた灰色を呈す。瓦当面は上下の縁に珠文帯があり、中に左から右に流れる偏行唐草文が表現される。九州歴史資料館瓦分類の 601A 型式に当たる。

3SK003 褐色土出土遺物 (Fig. 56)

須恵器

蓋 (1) 口縁端部は暖味な三角形を呈す形状で、硬質な還元焼成で灰色を呈す。重ね焼きのためか口縁上面の縁の部分だけ帯状に暗灰色を呈す。

坏 c (2) 低平で幅広い高台を有す。軟質な還元焼成で黒味を帯びた灰色を呈す。

皿 a (3) 器高 2.0cm で底部からゆるく屈曲して直線的な体部につながる。硬質な還元焼成で明るい灰色を呈す。重ね焼きのためか口縁外面の縁の部分だけ帯状に暗灰色を呈す。

鉢 b (4) 底径 10.6cm に復元され、体部外面から底部は回転ヘラケズリを施す。やや軟質な還元焼成で明るい灰色を呈す。

土師器

坏 d (5) やや膨らむ底部から斜めに体部が開く形状で、底部外面は回転ヘラケズリを施す。酸化焼成で薄い橙色を呈す。

3SK035 暗灰色土出土遺物 (Fig. 56)

土師器

甕 (8) 全体に丸くカーブしながら開き、端部が丸く処理された口縁を持つ。

黒色土器 A 類

碗 c (6, 7) 6 は高台径が 7.8cm に復元され、丸底気味の底部に直線的に開く形状の高台が付く。7 は高台径が 8.0cm を測り、断面三角形の高台が付く。内底面は黒色化し外面は白味のある灰褐色を呈す。

瓦類

平瓦 (9～12) 厚さ 1.6～2.3cm で内面にはやや目の粗い布目が残る。硬質な還元焼成で灰色を呈す。C2 類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。10 は「介」の字のある文字瓦である。

3SK035 褐色土出土遺物 (Fig. 56・57)

須恵器

甕 (13) 厚さ 0.9cm ほどで、硬質な還元焼成で灰色を呈す。外面には格子目の叩きを、内面には平行刻み目の当て具痕が残る。

土師器

碗 c (14) 高台径は 9.0cm に復元される。丸底気味の底部に先の丸い短い高台が付く。灰褐色を呈す。

甕 (15) 体部に把手を付けた部分の破片で、内面に同心円の当て具痕が明瞭に残る。

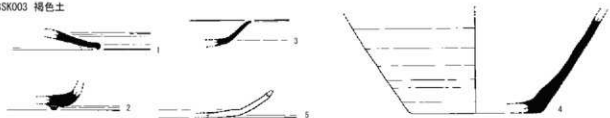
瓦類

丸瓦 (16) 厚さ 1.5cm ほどの還元焼成で硬質なもので明るい灰色を呈す。側辺の小口は内側のみに分割の切り込みの痕跡がある。C2 類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。

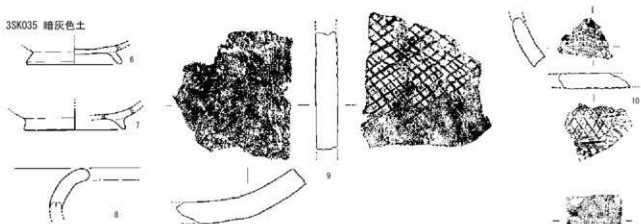
平瓦 (17～21) 1.6cm から 2.1cm ほどの厚さのもので、17 は酸化焼成で淡い橙色を呈し、他はやや軟質な還元焼成で白っぽい灰色を呈す。21 は半分が酸化焼成で淡い橙色を呈す。20 は内面の布の目が大きく新しい様相を呈す。C2 類に該当する斜格子のタタキ目を持つが、17 は二重格子目の叩き具を使用し新しい要素を持つ。

3SK038 出土遺物 (Fig. 57)

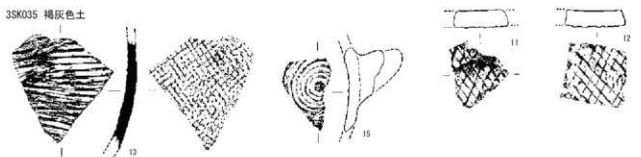
3SK003 褐色土



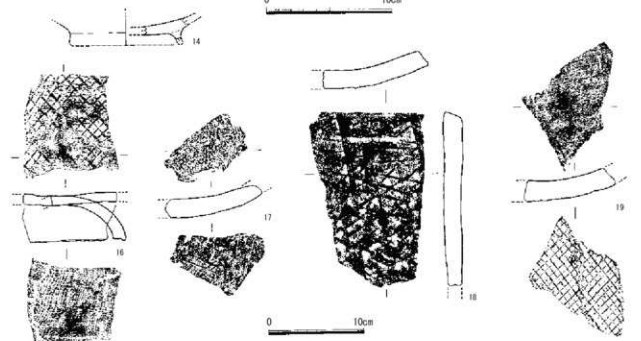
3SK035 暗灰色土



3SK035 褐色土



0 10cm



0 10cm

Fig. 56 3SK003 褐色土・暗灰色土、3SK035 褐色土①出土遺物実測図 (1/3、瓦は 1/4)

須恵器

蓋 c3 (1～3) 中央部に欠損があるがナデの痕跡から全てつまみを有する c タイプの蓋である。天上部は回転台から切り離し後に粗くナデを施す。硬質な還元焼成で青味を帯びた灰色を呈す。1は口径17.8cm、器高2.3cmを、2は口径17.8cm、器高1.7cm、3は口径14.1cm、器高1.7cmに復元される。

杯 c (4、5) 内側に寄った位置に角高台を付け、底部と体部の境にはケズリは施さないタイプの杯である。硬質な還元焼成で青味を帯びた灰色を呈す。1は口径13.7cm、器高4.3cm、高台径8.2cmに、2は高台径9.3cmに復元される。

土師器

皿 a (6) 平底でゆるく直線的に短く開く口縁を持つ。底部外面は回転ヘラケズリを、内面から体部外面には回転を利用したミガキ a を施す。口径21.8cm、器高1.9cm、高台径18.2cmに復元される。酸化焼成で橙色を呈す。

甕(7) ゆるいカーブを描いて開く形状の口縁を持つ。やや先に向かって薄くなる。淡い灰褐色を呈す。

金属製品

鉄塊系遺物 (8) 長さ5.5cm、幅4.7cm、厚さ4.0cmを測る。全体に茶褐色の鉄錆に覆われている。

3SD001 出土遺物 (Fig. 57)

瓦類

丸瓦 (9、10) 1.8～2.0cmほどの厚みを持ち、硬質で淡い灰色を呈す還元焼成の製品である。C2類に該当する斜格子のタタキ目を持つ。

3SD015 出土遺物 (Fig. 57)

土師器

杯 a (11、12) やや膨らみを持つ底部から直線的に開く口縁を持つ。軟質な酸化焼成で黄褐色を呈す。11は口径13.4cm、器高3.6cm、底径9.2cm、12は口径13.0cm、器高3.6cm、底径8.0cmを測る。

長沙窯系青磁

碗 (13、14) 緻密で硬質な白灰色を呈す胎土を持ち、くすんだオリーブ色で若干光沢のある薄い釉を施す。高台はボタン状で中央部は抉り取って窪みとしている。接合しないが両者は同一個体である可能性がある。そうした場合、体部はゆるいカーブを描きながら内側に反る形状を呈す。

壺 (15) 精製された硬質で灰色を呈す還元化した胎土を持ち、黒褐色のややムラのある釉を施す。肩衝の形状で口縁は短く若干のカーブを持って開く。内面の釉は口縁から肩口まで掛けられる。

中国陶器

甕 (16) 肩が強く張る形状で、口縁は一旦垂直に立ちあがって、先端は短く三角形の形状で横に折れる形状を呈す。硬質な酸化焼成で胎土はザラザラで白色粒を含み、赤みの強い橙色を呈す。釉は暗緑灰色のものが外面と内面は口縁内側まで施されている。

石製品

チャート原石 (17) 長さ2.9cm、幅2.7cm、厚さ1.8cmを測る。赤褐色を呈す。関門層群に由来し人的に持ち込まれたもので、縄文時代の所産か。

3SX026 出土遺物 (Fig. 57)

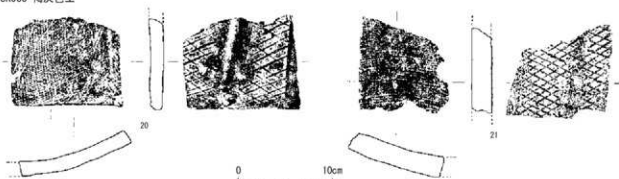
金属製品

鉋滓 (18) 長さ4.8cm、幅2.8cm、厚さ2.5cmを測る。全体に多孔質で茶褐色の鉄錆に覆われている。

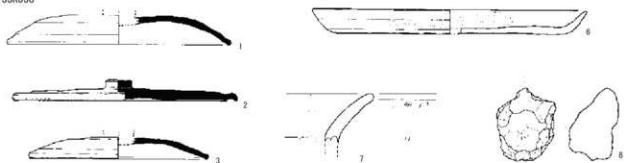
3SX033 出土遺物 (Fig. 58)

土製品

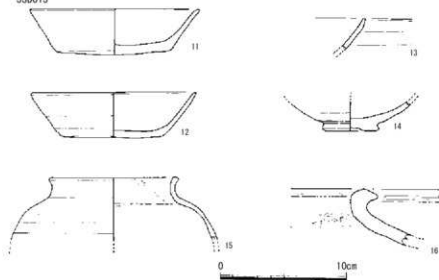
3SK035 褐灰色土



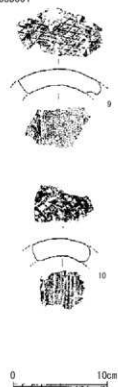
3SK038



3SD015



3SD001



3SX026



Fig. 57 3SK035 褐灰色土②、3SK038、3SX026、3SD001・015 出土遺物実測図 (1/3、17は1/2、瓦は1/4)

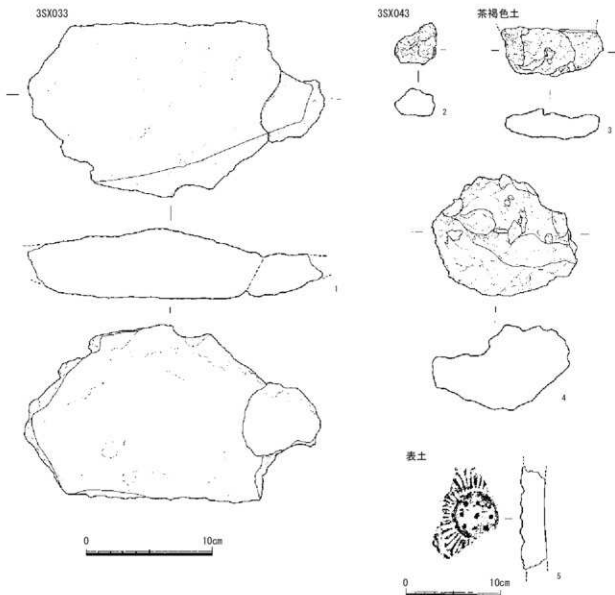


Fig. 58 3SX033・043、茶褐色土、表土出土遺物実測図 (1/3, 5は1/4)

炉壁 (1) 長さ23.2cm、幅13.7cm、厚さ5.5cmを測る。花崗岩塊のような質感で片側は丸底風で対面は表面に鉄錆がしみ込んだような状態となっている。

3SX043 出土遺物 (Fig. 58)

金属製品

鉾滓 (2) 長さ3.4cm、幅3.4cm、厚さ2.1cmを測る。多孔質で茶褐色の鉄錆が付着している。

茶褐色土出土遺物 (Fig. 58)

金属製品

碗形滓 (3,4) 3は小判型の碗形滓の破片で長さ8.2cm、幅4.0cm、厚さ2.5cmを測る。4は半球形を呈し、長さ11.4cm、幅9.6cm、厚さ6.8cmを測る。

表土出土遺物 (Fig. 58)

瓦類

軒丸瓦 (5) 複葉弁で中房に1+8の珠文を有す鴻臚館系の製品である。硬質な還元焼成で表面は灰色を呈す。

(5) 小結

本遺跡は2棟の3SI020・030の住居跡からなる4世紀中頃から5世紀頃の集落、2棟の掘立柱建物3SB010・040からなる8世紀後半の官衙的様相、8世紀末から9世紀初頭の井戸3SE002、溝3SD015、9世紀後半から10世紀前半頃の井戸3SE036、土坑3SK035、のおよそ4期の遺構が重複して検出された。

4世紀中頃から5世紀頃の集落は御笠川上流域ではほとんど知られておらず、国分周辺では同時期の古墳も未発見であり、成立した背景が見えにくい。3SI030からは椀形滓が出土しており、小規模な小鍛冶程度の金属加工がおこなわれていた可能性がある。

8世紀から9世紀前半にかけては、2棟の掘立柱建物を中心に井戸や土坑が形成され、転用硯などもあり官衙的な様相を観ることが出来る。8世紀末から9世紀初頭頃の井戸3SE002や溝3SD015には長沙窯系青磁や越洲窯系青磁などの初期輸入陶磁器、半島系の陶質土器、緑釉陶器の複数の鉢や壺などの奢侈品があり、同時期の大宰府条坊内の遺跡と比較しても優位な遺物を消費している。3SE002では鋳型や輪羽口などがあり、域内で小規模な鋼製品などを扱った鋳造作業がおこなわれたことを示唆している。これらのことから、この場所は筑前国分寺の政所院や大衆院といった寺院に付帯する関連施設が展開していた可能性が考えられる。そうした場の利用は井戸3SE036、土坑3SK035の存在から10世紀代まで続いたようである。

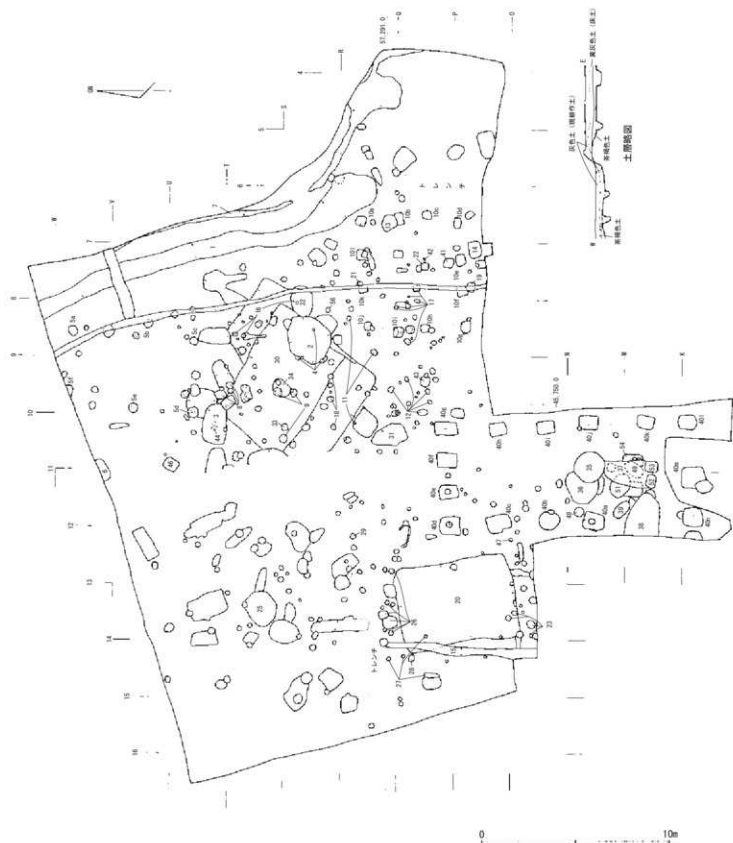


Fig. 59 第3次調査遺構略測図 (1/200)

表. 5、国分千足町遺跡第3次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	切り合い等	時期	地区番号
1	3SD001	溝	10→1	9世紀～	7ライン
2	3SE002	井戸		8世紀末、9世紀初～	R8
3	3SK003	土坑		8世紀後～	T10
4		ビット群	2→4		R9
5		ビット群			O9
6		ビット			V11
7		溝			6ライン
8		ビット群			T9
9		ビット群			S10
10	3SB010	掘立柱建物 a～l		8世紀～	P9
11		ビット群			R9
12		ビット群			P9
13		ビット		8世紀前～	Q6
14		ビット			O7
15	3SD015	溝	20→15	8世紀末、9世紀初～	P14
16		ビット群		7世紀後～	S8
17		ビット群			P8
18		ビット群			R9
19		ビット			O7
20	3SI020	竪穴住居		5世紀前～?	OP13
21		ビット			Q7
22		ビット			P7
23		ビット群		8世紀～	N13
24		ビット		8世紀～	O12
25		土坑			S13
26	3SX026	ビット群		8世紀～	Q13
27		ビット群		8世紀～	P14
28		ビット		5世紀～	P14
29		ビット		8世紀～	Q12
30	3SI030	竪穴住居		4世紀中～	R9
31		土坑		5世紀～	Q10
32		土坑	2→32	8世紀後～	R8
33	3SX033	ビット	30→33		R10
34		ビット	30→34		R10
35	3SK035	土坑	36→35	9世紀後～	M11
36	3SE036	井戸	36→35	9世紀中～	M11
37		窪み			K11
38	3SK038	土坑		8世紀中～	K11
39		ビット			K11
40	3SB040	掘立柱建物 a～n		8世紀中～	M11
41		ビット			P7
42		ビット			P7
43	3SX043	ビット			P9
44		ビット	14→3		T10
46		ビット			U11
47		ビット		5世紀～	O12
48		ビット			M11
49		ビット	49→37		K11
51		窪み	51→37		K11
52		ビット	52→37		K11
53		ビット	53→37		K11
54		ビット	54→49→37		K11
56		ビット			R8

表.6 国分千足町遺跡 第3次調査 出土遺物一覧表

S-1	
須 惠	器 环c3、鏝、甕?
土 師	器 破片
瓦	類 丸瓦(須惠貫、柘子目c3)、平瓦(須惠貫、溝目)、平瓦(土師貫、溝目)
S-2埋褐色土	
須 惠	器 蓋3、蓋b(飯用碗)、鉢b、小型平瓶
製 龜 土	器 蓋1
黒 色 土 器 A	類 皿a、鉢×皿
土 師	器 环a(蓋蓋)、环d、皿a、柄c、柄c(蓋蓋)、小甕、土甕
須 惠	器 蓋a、鉢?
須 惠	器 二趾鉢
瓦	類 平瓦(須惠貫、溝目)、平瓦(瓦貫、溝目)、丸瓦(須惠貫、無文)
金 属 製 品	品 短刀、短弓、瓦輪状土製品
石 製 品	品 自然石(花崗岩、玄武)
S-2埋茶色土	
須 惠	器 土甕、环c3
黒 色 土 器 A	類 蓋1
土 師	器 环a
須 惠	器 鉢輪、鉢
瓦	類 平瓦(瓦貫、溝目)
金 属 製 品	品 鉄鍋系遺物
S-2埋褐色土	
須 惠	器 蓋3、大甕、环a、环c3、大环×大皿c3、大甕、鉢b
土 師	器 环a、环d、甕
須 惠	器 鉢輪陶器、环?
緑 州 系 青 磁 類	
瓦	類 平瓦(瓦貫、溝目)、丸瓦(瓦貫、無文)、軒丸瓦(土師貫、連續形式)
土 製 品	品 鈴堂?
S-2埋灰色土	
須 惠	器 蓋3、蓋c、环a、环c3、脚付环、甕、甕b、蓋d、鉢a?
製 龜 土	器 破片
緑 州 系 青 磁 類	品 碗、破片(1)
土 師	器 蓋3、蓋c、环c3、环d、皿a、甕a、甕把手、甕
無 輪 陶 器	類 朝鮮系器(1)
緑 輪 陶 器	類 蓋(1)
中 国 陶 器	器 二趾鉢(1)
瓦	類 平瓦(瓦貫、溝目)、平瓦(須惠貫、溝目)、平瓦(土師貫、溝目)、平瓦(土師貫、柘子目A)、丸瓦(瓦貫、溝目)、丸瓦(瓦貫、無文)
土 製 品	品 印壺、輪印口
S-3褐色土	
須 惠	器 蓋3、环c3、皿a、小甕、鉢b
土 師	器 环d、甕
瓦	類 平瓦(瓦貫、無文)
S-3埋層	
土 師	器 供餅具
瓦	類 平瓦(瓦貫、無文)
S-3埋褐色土	
須 惠	器 甕
土 師	器 供餅具
S-4	
須 惠	器 供餅具
土 師	器 环4
S-5c	
土 師	器 供餅具
S-5d	
土 師	器 甕?
S-6	
土 師	器 甕?
瓦	類 平瓦(瓦貫、溝目)
S-8	
須 惠	器 甕?
土 師	器 供餅具
S-9	
土 師	器 供餅具
S-10	
須 惠	器 鉢a2
土 師	器 甕?、供餅具
S-10b	
瓦	類 平瓦(瓦貫、無文)
S-11	
土 師	器 甕?
瓦	類 平瓦(須惠貫、無文)
S-12	
須 惠	器 蓋1、甕
黒 色 土 器 A	類 破片
土 師	器 供餅具
瓦	類 丸瓦(須惠貫、無文)

S-13	
須 惠	器 蓋2、环c3、高环b
瓦	類 平瓦(瓦貫、溝目)
S-14	
須 惠	器 环c3、甕
土 師	器 环c3、甕a
S-15	
須 惠	器 蓋1、Hc3、小甕、甕、甕?
緑 州 系 青 磁 類	品 瓦(1)
長 沙 系 青 磁 類	品 碗(1)、蓋(1)
土 師	器 环a、甕a
中 国 陶 器	器 破片(1)※未分類
瓦	類 平瓦(瓦貫、溝目)
石 製 品	品 ナールト原石
S-16	
須 惠	器 蓋1、蓋3
土 師	器 破片
S-17	
須 惠	器 甕、甕?
土 師	器 鉢c
S-18	
土 師	器 甕?、供餅具
S-19	
瓦	類 平瓦(須惠貫、溝目)
S-20①	
金 属 製 品	品 陶器型序
S-20②	
土 師	器 高环
S-20③	
土 師	器 甕×甕
S-20④	
土 師	器 甕、甕、丸底甕
S-20⑤	
土 師	器 高环、丸底甕
S-20⑥	
土 師	器 高环
S-20⑦	
土 師	器 丸底甕
S-20⑧	
土 師	器 甕、丸底甕
S-20⑨	
土 師	器 丸底甕
S-20⑩	
土 師	器 丸底甕
S-20⑪	
土 師	器 丸底甕
S-20⑫	
土 師	器 丸底甕
S-20⑬	
土 師	器 高环
S-20⑭	
土 師	器 甕?
S-20⑮	
土 師	器 高环、甕、甕?
S-20⑯	
土 師	器 甕
S-20⑰	
土 師	器 甕?
S-20⑱	
土 師	器 甕
S-20⑲	
土 師	器 甕、小甕?
S-20東御燈溝	
土 師	器 甕、甕
S-20堀土1	
土 師	器 甕?、甕×甕
土 製 品	品 染土瓦
S-20堀土4	
土 師	器 甕?

S-20a	
土 部	器 高坏、甕、小甕
S-20b褐色土	
土 部	器 高坏、甕、丸底甕
瓦	類 平瓦(瓦質、罫目)(炭入品)
S-20	
土 部	器 甕
須 惠	器 高坏(陶質土器?)
S-22	
土 部	器 破片
S-23	
須 惠	器 小甕?、甕、供膳具
土 部	器 甕、供膳具
S-24	
土 部	器 供膳具
瓦	類 破片(瓦質)
S-25暗褐色土	
須 惠	器 甕、破?
土 部	器 甕、供膳具
S-25a褐色土	
土 部	器 甕?
S-26	
須 惠	器 甕c、坏c?
土 部	器 供膳具
金屬 製	品 磁序
S-27	
須 惠	器 供膳具
土 部	器 供膳具
S-28	
土 部	器 甕?、供膳具
S-29	
土 部	器 供膳具
S-30土製	
土 部	器 甕、丸底甕、小型丸底甕
S-30c	
土 部	器 破片
S-30g	
土 部	器 破片
S-30h	
土 部	器 破片
S-30i褐色土	
土 部	器 高坏、甕
S-31	
土 部	器 甕?
S-33	
須 惠	器 大甕
瓦	類 平瓦(瓦質、罫目)
土 製	品 伊壁
S-34	
陶 磁 土	器 香
土 部	器 破片
S-35	
須 惠	器 甕c、坏c
土 部	器 甕a、甕
金屬 製	品 磁序系遺物
瓦	類 平瓦(須惠質、格子目c?)
S-35a褐色土	
須 惠	器 坏c3、甕
土 部	器 坏c、罫仁平 平瓦(瓦質、格子目c2、c3)、平瓦(瓦質、罫目)、 瓦 類 平瓦(土師質、二重格子目e2)、 瓦 類 平瓦(須惠質、格子目c?)
S-35b褐色土	
須 惠	器 坏c3、甕?
黑色 土 器 A 類	物c
横 州 質 系 青 磁 土	器 破片(i)
土 部	器 坏c、甕?、移動式甕
瓦	類 平瓦(須惠質、格子目c?)
S-36葛站	
須 惠	器 坏面、坏a、甕
陶 磁 土	器 香
土 部 質 土 器	物c、甕
瓦	類 平瓦(瓦質、罫目)、平瓦(瓦質、格子目c3)、 瓦 類 平瓦(土師質、罫目)、平瓦(須惠質、格子目c?)、 瓦 類 平瓦(瓦質)
土 製	品 伊壁

S-36茶色土	
須 惠	器 甕3、坏c3、甕
陶 磁 土	器 香
土 部	器 坏c、甕、甕
瓦	類 平瓦(瓦質、罫目)、平瓦(瓦質、格子目c?)、 瓦 類 平瓦(須惠質、罫目)、平瓦(須惠質、格子目c?)、 瓦 類 平瓦(瓦質)
S-36a褐色土	
須 惠	器 甕3、甕
土 部	器 坏c
瓦	類 軒平瓦(須惠質、60A型式)
S-37	
須 惠	器 甕3、坏c3、甕
土 部	器 坏c、高坏、甕
瓦	類 平瓦(瓦質、罫目)、瓦瓦(瓦質、無文)
S-38	
須 惠	器 小甕3、高?、高c3、坏c3、大甕、甕、直甕、 小甕
陶 磁 土	器 香
土 部	器 坏?、直a、甕a
弥 生 土 部	物(須良式?)
瓦	類 平瓦(瓦質、罫目)、瓦瓦(須惠質、無文)
金屬 製	品 磁序系遺物
S-39	
須 惠	器 坏c、鉢?
土 部	器 甕、供膳具
瓦	類 平瓦(土師質、罫目)
S-40煎り方	
土 部	器 甕?
S-40a煎り方下層	
土 部	器 高坏
S-40a上層	
土 部	器 破片
S-40a住居	
須 惠	器 甕b?
土 部	器 小甕?
S-40	
須 惠	器 小甕
土 部	器 丸底甕
S-40b煎り方	
土 部	器 破片
S-40b最上層	
土 部	器 破片
S-40b	
須 惠	器 供膳具
土 部	器 供膳具
S-40c	
土 部	器 甕、供膳具
S-40c煎り方	
土 部	器 高坏、甕
土 製	品 輪郭口
S-40c煎り方	
土 部	器 破片
S-40c煎り方	
須 惠	器 坏c、大坏c×直a×h
S-40c最上層	
土 部	器 小甕?
S-40b煎り方	
土 部	器 甕?
S-40i煎り方	
土 部	器 高坏、甕?
S-40j煎り方	
土 部	器 甕?
瓦	類 平瓦(須惠質、罫目)
S-40j最上層	
須 惠	器 坏c、甕
土 部	器 破片
S-40k	
土 部	器 小甕?
S-40k	
須 惠	器 坏c
瓦	類 丸瓦(須惠質、無文)
S-41	
土 部	器 坏×柄

S-42
須 惠 器 陶c
瓦 類 平瓦(瓦質、縄目)、破片(須恵質、格子目c3)

S-43
須 惠 器 陶
土 師 器 供養具
金 属 製 品 陶片押

S-44
須 惠 器 供養具
土 師 器 供養具

S-46
須 惠 器 皿a
土 師 器 破片
瓦 類 破片(須恵質)、破片(土師質)

S-47
土 師 器 供養具
木 製 品 木炭

S-48
須 惠 器 供養具
土 師 器 破片
瓦 類 平瓦(瓦質、縄目)

S-49
須 惠 器 皿c、坪
土 師 器 坪c3
瓦 類 丸瓦(土師質、無文)
石 製 品 丸石(被熱)
土 製 品 輪口?

S-51
須 惠 器 遺×鉢
土 師 器 遺

S-52
須 惠 器 供養具
土 師 器 供養具

S-53
須 惠 器 坪e2
土 師 器 遺
瓦 類 平瓦(瓦質、無文)

S-54
須 惠 器 坪
土 師 器 坪?

S-56
土 師 器 供養具

実褐色土
須 惠 器 蓋3、坪c3、大輪×大皿c3、甕、大甕、壺b~f、鉢b
土 師 器 高坪b
瓦 類 平瓦(瓦質、縄目)、平瓦(土師質、縄目)、
丸瓦(須恵質、格子目c2)、平瓦(須恵質、無文)、
丸瓦(須恵質、格子目c3)
金 属 製 品 陶片押

灰色土
須 惠 器 蓋3、蓋c、坪c3、高坪b、皿a、小甕、甕、壺b
土 師 器 高坪、小甕、甕、肥子
国 産 陶 器 坪×板(砂目)、壺、甕?
瓦 類 平瓦(須恵質、格子目c2)、平瓦(瓦質、無文)、
丸瓦(瓦質、縄目)、丸瓦(須恵質、格子目c3)、
丸瓦(瓦質、無文)
石 製 品 磁石(中級)

表土
須 惠 器 蓋2、蓋3、坪蓋e、坪w、坪c3、高坪b、皿a、甕、
大甕、鉢a3
製 陶 土 器 坪?
越 前 系 青 磁 輪1(1)、壺1、坪(1)
土 師 器 蓋c、坪c、高坪、輪c、甕、豊肥手、坪
肥 前 系 陶 磁 器 染付、壺、輪
国 産 陶 器 大甕(中型)
瓦 類 平瓦(瓦質、無文)、平瓦(瓦質、縄目)、
丸瓦(瓦質、無文)、軒丸瓦(須恵質、溝縁筋式)
金 属 製 品 鉄塊
石 製 品 安山岩コア

PS試験トレンチ増土
須 惠 器 坪、甕
瓦 類 平瓦(瓦質、縄目)、平瓦(土師質、縄目)、
丸瓦(瓦質、無文)

4、国分千足町遺跡第7次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市国分3丁目492-1で、遺構面の標高31.5～33mで南西に向かって下がっていく立地である。

2012(平成24)年4月、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財についての照会があり、4月27日に確認調査を行い、耕作土直下の全面で遺構が確認された。その後、事業者と協議を重ね、建物部分のほか周囲擁壁部分について、遺構に影響があると判断されたため、開発者の費用負担で発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は2012(平成24)年10月12日～2013(平成25)年1月25日に実施した。開発対象面積は1223.93㎡で、調査面積は780㎡である。調査は宮崎亮一が担当した。

なお、調査地以外の駐車場等は未調査で、遺構は地下に保存されている。

(2) 基本層位 (Fig. 60)

調査地一帯には西側に向かって下がっていく4枚の田圃があり、その西側2枚と東側2枚の一部の田圃が調査対象地である。その耕作土(灰色土)が厚さ0.2m、その下に暗茶色土の包含層が厚さ0.15m程あり、それを除去すると、地山は北半分が淡茶色土や淡灰色土に礫が混じる層、南半分は淡黄褐色土や橙黄色土の地山で、それに切り込んで遺構が確認できる。西側ほど田圃が下がっていく関係と同様に西側ほど削平が目立つ。遺構の埋土は、ほとんど茶褐色土で、深いピットなどは下部ほど灰色粘質土になる。

(3) 検出遺構

竪穴住居

7S1001 (Fig. 62, Pla. 11)

大型の円形竪穴住居である。上面が削平され、竪穴部分は消失し、貼り床部分が検出された。遺構検出段階では北側に張り出した部分があり、平面形がいわゆる帆立貝形をなしている。埋土は茶褐色土で、包含層直下という状況から、最上面には古代の遺物がごく僅かに含まれているものの、時期はその他の遺物から弥生時代中期中頃とみて良いだろう。

遺構内部の床面に多数の柱穴や凹凸が検出された。これらは約3重の円を描くように掘られているように見え、数回の建替えがあったと推測される。よって、その柱穴のうち一連のものとみられるくくりをA・Bとその他の3つに分けて報告する。

まずAは大周りの柱穴のくくりで、南北9.2m、東西10.3mのやや楕円形の大型竪穴住居と推測される。柱穴はその周縁部に約2m間隔で並び、大きさ1m前後の掘り方を持つ柱穴が掘られている。この遺構を検出した際、部分的に黄褐色土が露出している部分がみられた。これは後述するとおり、貼り床や地山

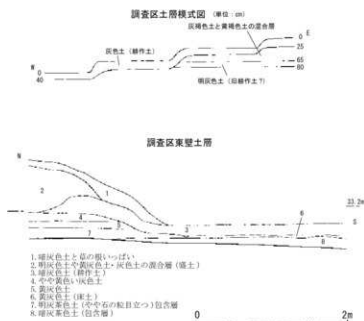
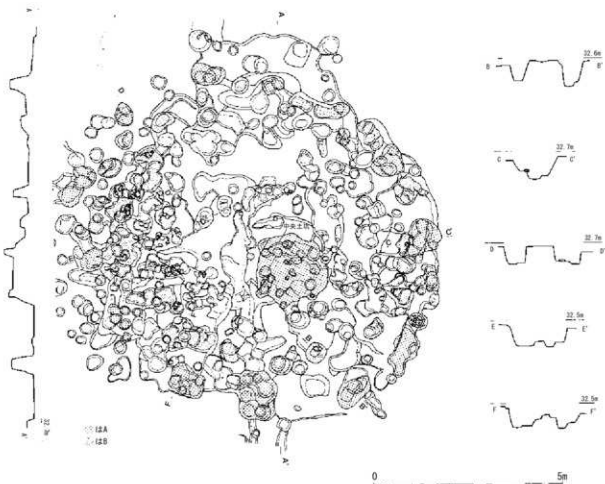
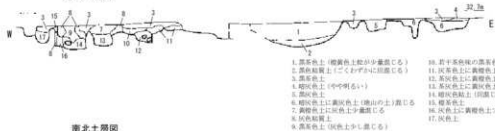


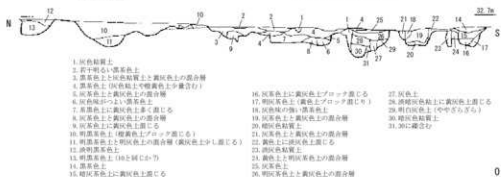
Fig. 60 調査区土層図 (1/50) と模式図



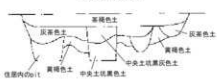
東西土層図



南北土層図



7S1001 模式図



中央土坑模式図



Fig. 62 7S1001 遺構実測図 (1/100, 1/80)

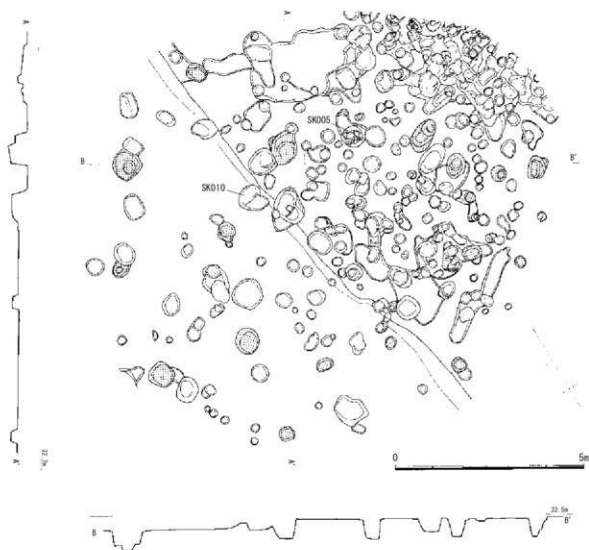


Fig. 63 7SI035 遺構実測図 (1/100)

だったことから、遺構検出面がほぼ住居の最終段階の床面と考えられる。その床面は灰茶色土で、そこで検出される柱穴や土坑の埋土は、黄褐色土と灰茶色土の混合層や暗灰色土であった。床面で硬化面は未検出で、水分を含んだ際は足にまわり付く粘土質となる。中央やや東側に $2.1 \times 1.9\text{m}$ 、深さ 0.57m の円形土坑（中央土坑）が検出された。埋土は黒茶色土や黒色土で僅かに下層に炭が混じる程度で、明瞭な焼土は検出されず、炉と確定するには至っていないが、位置的にはその役目を持つ土坑と考えられる。また、この中央土坑北側を中心にひと回り大きい形状で、埋土が黄灰色土・黄色土・黒灰色土の混合層の部分がある。これは古い段階の中央土坑と推測される。土坑内の周壁部にはピットが多く検出された。

Bは南北約 8m 、東西約 9m のやや楕円形で、北側に幅 3.5m 、長さ 1.5m 程の張り出した部分があった。床面に硬化した部分は検出されなかったが、ここが入口であった可能性が考えられる。入口は形状からAに伴うものよりBに伴うものとした方がバランスは良いため、Bのものと推測した。埋土はAのものと同じであったが、Aのところで述べた中央土坑のひと回り大きな土坑は、Bと同時期のものと推測される。柱穴は 1m 前後の間隔であるが、Aと重複している部分もある。また、床面は柱列付近から堅穴で掘り下がっている部分が多いことから、Aを建替え、若干拡張してBを建てたと推測される。

貼り床については、上記の状況から考えると、B段階で地盤を掘り下げ、貼り床を行ったと推測され、遺構検出面でみられた灰茶色土がA・B両方とも住居の床面であったと推測される。そして、最初の貼り床については明瞭な箇所もあるが、地山との区別がつきづらい所も多い。貼り床自体の土質は主に黄褐色土で一見地山に近いが、灰茶色土が混じっているため、それを持って地山と区別した。

また、A・B以外にも、住居内にはさらに小さい径を描くようにある柱穴など明確にまとめきれない柱穴が多く存在する。これらはAやBと同時期にあった住居内の柱の可能性が高いが、それぞれの柱の取り換え等も考えられる。また、西側を中心に柱穴のうち一部で礫を敷いたものがあつたが、全てにあるわけではなく、礫敷きだけでは建物が成立しない状況である。

また、南東方向に溝(SD224)が検出され、SI001と同じ埋土であった。その切り合いは確認できなかったため、住居に伴う溝である可能性が高い。溝はSK025に向かって流れており、住居内からの排水路の可能性が考えられる。

出土遺物については、後述するとおりであるが、それ以外にも黒曜石の剥片が多量に出土した。

7SI035 (Fig. 63, Pla. 11)

SI001の西側で検出されたピット群であるが、調査区全体の検出状況からするとピットや土坑がかなり集中していることがわかる。これらピット群はSI001の状況から考えて、円形の竅穴住居の上面が削平された状態の可能性が考えられる。住居の外側に柱穴が並ぶとした場合、直径約10.4～12mの楕円形の大型竅穴住居と推測される。炉と言える明確な遺構はないが、礫入り土坑(SK005)や土器集中遺構(SK010)が検出された。東側がSI001と切り合っているが、新旧は不明瞭である。外回りの柱穴以外にも住居内には多くのピットがあるが、明確に柱穴とは決め難い状況である。

SK005は礫がまとまって置かれている土坑で、大きさは0.7m×0.55m、深さ0.4m。底面は中央がピット状に深い。礫は中央の礫が平らな石を使用しているが、その周りに置かれている礫は花崗岩の川原石である。SI001で礫敷の柱穴が多く検出されたため、竅穴住居の柱穴の可能性が考えられる。SK010は弥生土器の甕がまとまって出土した土坑で、住居内の土坑と推測される。大きさは0.74m×0.64m、深さ0.24m。甕は割れた状態で、置いている状況ではなく、破片も全て残っている状況ではない。弥生時代中期。

掘立柱建物

7SB015 (Fig. 64, Pla. 12)

振れが約E-26° 2' -Nの東西棟で、現段階では1×3間(3.1～3.4×9.6m)であるが、西側調査区外に続く可能性はある。柱間は桁行・梁間とも3.2m前後だが、西側ほど柱間がやや広がっている。掘り方は大きさ0.5～1.2m、深さ0.29～0.45m、柱痕は土層断面から0.2m程と推測される。弥生時代前半～中頃？

7SB040 (Fig. 64, Pla. 12)

調査区際のため掘り方は2個のみ検出した。柱間は4.1mで、振れが約E-16° 23' -Nの掘立柱建物と考えられる。北側の国分松本遺跡第11次調査では未検出のため、この調査地の北西側にかけて展開するものと考えられる。2つの掘り方とも南側に中段があり、大きさは南北に長く、aが1.2m×0.96m、深さ0.78m、bが1.25m×0.86m、深さ0.86mで、北側端に柱材が残存していた。aの柱材は径23.5～26.0cmで、建物の重さのため柱材の底部には地山の砂粒がめり込み、固くなっていた。bの柱材は径23.6cmで、柱材の底に平らな花崗岩礫を敷かれていた。これは沈み込み防止もしくは高さ調整のためと考えられる。弥生時代中期中頃前後。

7SB045 (Fig. 65)

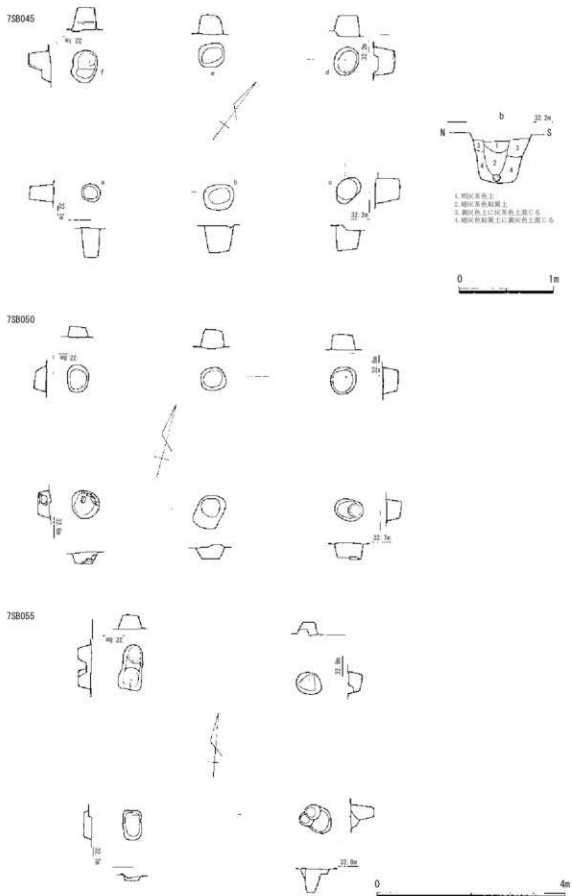


Fig. 65 7SB045・050・055 遺構実測図 (1/80、1/40)

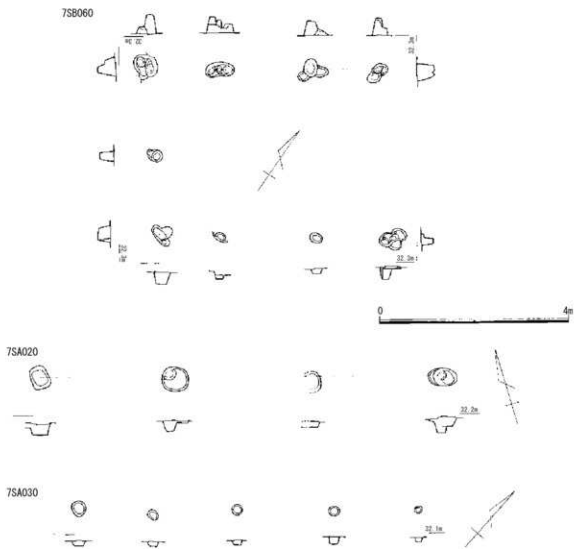


Fig. 66 7SB060, 7SA020・030 遺構実測図 (1/80)

1×2間 (約 2.8×5.4m) で、振れが約 E-37° 35′ -N。掘り方は円形で、径 0.5m 前後、深さ 0.4～0.6m、柱間は約 2.7m。整理中に確認した建物で、調査段階で柱痕跡は未確認である。弥生時代中期前半。

7SB050 (Fig. 65)

1×2間 (約 2.8×5.6m) で、振れが約 E-15° 9′ -N。整理中に確認した建物で、掘り方は径 0.6m 前後、深さ 0.25～0.4m の円形である。柱痕跡は未確認であるが、南西隅の掘り方では礫が検出され、柱を安定させるためのものと推測される。建物の規模は、SB045 と同規模とみられる。古墳時代以降。

7SB055 (Fig. 65)

1×1間 (約 2.8×3.8m) で、東西にやや長い建物で、振れが約 E-5° 42′ -N。整理中に確認した建物で、掘り方は大きさ 0.4～0.6m 前後、深さ 0.18～0.5m。調査段階で柱痕跡は未確認である。古代。

7SB060 (Fig. 66)

流路 (SX025) 沿いにある建物で、2×3間 (約 3.6×4.8m) で、振れが約 E-36° 26′ -N。整理中に確認した建物で、調査段階で柱痕跡は未確認である。柱穴の大きさは、径 0.3m 前後、深さ 0.3m 前後と小さい。周囲には同様のピットがまともって検出されているため、他にも建築物があった可能性が高い。弥生時代中期。

柵列

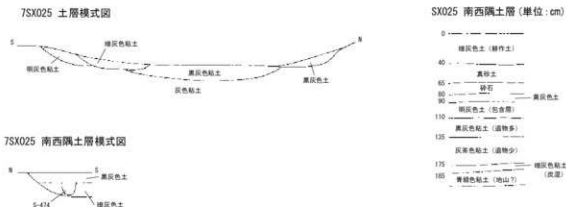


Fig. 67 7SX025 土層模式図

7SA020 (Fig. 66)

調査区南側で検出されたため、現状では建物として成立していないため柵列とする。検出長 8.4m で、柱間は 2.8m の 3 間分確認された。掘り方は隅丸方形や楕円形で、大きさは 0.5m 前後、深さ 0.1 ~ 0.35m である。振れは約 E-16° 21' -S を示す。弥生時代中期中頃前後。

7SA030 (Fig. 66)

検出長 7.2m で、柱間は 1.6 ~ 2m の 4 間分が確認された。SX025 の流路の岸辺に同じ方位で検出された。柱穴の大きさは径 0.25m 前後、深さ 0.1 ~ 0.15m で、北端の柱穴には木質が遺存していたが、腐植著しく端部を含め柱の状況は掴めなかった。振れは約 E-41° 54' -N を示す。弥生時代中期か。

流路

7SX025 (Fig. 67)

調査区の南側を横切る流路で、調査は擁壁工事で遺構が破壊される部分をトレンチ状に行った。地盤が軟らかく、周囲の土砂の崩落が目立ち、東側は兩岸を確認したが、底面まで到達できなかった。西側については北岸のみだが、底面には到達した。しかし、隣接地に危険がおよぶ状況であったため、バックホウで底面を確認した。流路の振れは約 N-43° 25' -E で、幅約 13m、深さ約 1m。流路の埋土はほとんどが黒灰色粘土で、底面近くが灰色粘土で、両層近くは粘質が弱くなり、流路北辺に礫を含む黒灰色土がある。黒灰色粘土は弥生土器を多く含むが、灰色粘土は遺物の包含が少ない。最上面こそ古代の遺物が少量出土するものの、遺物のほとんどが弥生時代中期前半 ~ 中頃のものである。

この調査地を含め、近隣の調査でも石包丁が出土するため、このような粘土質の場所が水田であった可能性が考えられるが、それを実証する根拠は得られなかった。

(4) 出土遺物

竪穴住居

7SI001 茶褐色土出土遺物 (Fig. 68)

弥生土器

壺 (1) 内外面磨滅するが、外面に一部タテハケが残る。色調は暗黄色や茶褐色を呈する。

石製品

石包丁 (2) 半分欠損する。両面研磨し、紐穴を開ける。輝緑凝灰岩製で立岩産とみられる。

7SI001 灰茶色土出土遺物 (Fig. 68)

弥生土器

甕 (3 ~ 16) 胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は橙色や茶褐色などを呈する。全体的に磨滅し調整不明。3 は口縁部があまり突出しない断面三角形の口縁部である。4 ~ 10 は断面が長い三

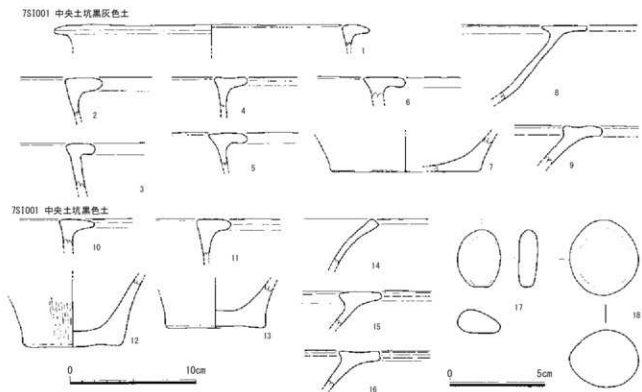


Fig. 69 7S1001 中央土坑出土遺物実測図 (1/3、17・18 は 1/2)

壺 (17～19) 口縁部は粘土を貼付し肥厚させ、さらに内側に稜線を付け突出させる。全体的に磨減し調整不明。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。

石製品

石斧 (20) 両端を大きく欠損する。現存長 6.9cm、幅 7.9cm、厚さ 3.9cm。玄武岩製。

搔器 (21) 側面が欠損する。現存長 5.5cm、最大幅 3.9cm、厚さ 1.6cm。内外面とも加工し、先端部を細かく加工し刃部を作り出している。安山岩製。

管玉 (22) 縦 1.1cm、径 0.4cm、中央に径 0.2cm の円孔が貫通する。石材は暗緑色を呈し、緑色凝灰岩製と推測される。

土製品

紡錘車 (23) 径 4.0cm、厚さ 1.0cm。中央両面に径 0.4cm の円形の穴を開けるが、貫通していない。紡錘車の未完成品か。全面著しく磨減する。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡灰色や灰黒色を呈する。

7S1001 黄褐色土出土遺物 (Fig. 68)

弥生土器

甕 (24～27) 24 は口縁部を短く曲げ断面三角形とする。胎土は白色砂粒を多く含む。25 は逆 L 字形に曲げた口縁部で体部より薄い。26・27 は平坦な底部で、色調は淡橙色を呈する。内外面磨減し調整不明。26 は平底で復元口径 7.0cm、27 は平底で復元口径 6.0cm。

壺 (28) 外面磨減するが、内面にはヨコハケが残る。色調は茶黒色を呈する。

7S1001 中央土坑黒灰色土出土遺物 (Fig. 69)

弥生土器

甕 (1～7) 全体的に色調は淡橙色を呈する。内外面磨減し調整不明。1・2 は断面が長い三角形の口縁部で、1 は復元口径 25.0cm。3 は短く逆 L 字形に曲げた口縁部で、外面に僅かにタテハケが残る。4～6 は口縁部が逆 L 字形で端部が若干垂れる。7 は復元口径 12.0cm。

高坏 (8) 鋤形口縁で、胎土は砂粒を含むが精製されている。色調は淡橙色を呈する。全面磨減し調

整不明。

高坏もしくは壺(9) やや短い勲形口縁で、色調は茶褐色を呈する。

7S1001 中央土坑黒色土出土遺物 (Fig. 69)

弥生土器

甕(10~13) 10はやや長い断面三角形の口縁部で、色調が黄白色を呈する。11は短めの逆L字形の口縁部である。12は平底で、底径7.8cm。13は僅かに上げ底で、底径8.0cm。

壺(14) 外反する直口縁部である。内外面とも磨滅するが、外面の一部に丹塗りが残る。

高坏もしくは壺(15、16) 2点とも口縁部に粘土を貼付し肥厚する。内外面磨滅し調整不明。15の色調は黄白色を呈する。16の色調は淡橙赤色を呈する。

石製品

丸石(17、18) 17は丸く仕上げるが、人工物かどうか明確ではない。大きさは3.1×2.2cm、厚さ1.2cm。18は全面的に丸く仕上げ、一部強く研磨している。大きさ4.0×3.6cm、厚さ3.0cm。

7S1001 底面ピット群出土遺物 (Fig. 70・71, Pla. 15)

弥生土器

甕(1~37) 全体として内外面とも磨滅し調整不明。1~12は口縁部が断面三角形。1・2はS-249下層より出土。3はS-254下層より出土。4は外面屈曲部にヨコナデ調整が残る。S-384より出土。5はS-381下層より出土。6はS-328より出土。7はS-301より出土。8はS-266より出土。9はS-342より出土。10はS-268より出土。11はS-371より出土。13~27は口縁部が逆L字形。13はやや短い口縁部で、復元口径26.6cm。S-348より出土。14はS-328より出土。15はS-371より出土。16はS-268より出土。17はS-394より出土。18は復元口径30.6cm。口縁直下はヨコナデが確認できる。S-279より出土。19は復元口径26.6cm。口縁部上部に僅かにヨコハケが残り、その他はヨコナデ調整。S-336より出土。20は復元口径26.8cm。S-361より出土。21は復元口径26.0cm。S-311より出土。22はS-271より出土。23はS-408より出土。24は外面に僅かにタテハケが残る。S-273より出土。25は屈曲部外面にヨコナデが残る。S-316より出土。26はS-371より出土。27はS-301より出土。28・29は口縁部が逆L字形で端部が若干垂れている。28はS-359より出土。29はS-371より出土。30は口縁部が明瞭な稜線を付けずに逆L字形に曲げる。屈曲部外面に僅かにヨコナデが残る。S-348下層より出土。31は厚い底部で、若干上げ底である。胎土は白色砂粒を多く含む。底径6.3cm。S-256より出土。32~35は僅かに上げ底である。32はS-269より出土。33はS-372より出土。34は若干上げ底の底部で、底径6.6cm。S-266より出土。35はS-283より出土。36・37は平底である。36は復元底径8.0cm。S-254より出土。37は復元底径7.8cm。外面には細かいタテハケが残る。S-341より出土。

甕もしくは壺(38、39) 38は丸味のある口縁部である。S-313より出土。39は若干上げ底気味で、復元底径8.6cm。全面磨滅するが、外面に僅かにタテハケが残る。S-319より出土。

壺もしくは高坏(40) 口縁部内面に粘土を貼付する。内外面磨滅し調整不明。S-348より出土。

壺(41) 口縁部内面に粘土を貼付し、内側に突出させるが、外側への突出は小さい。S-357より出土。

蓋(42) 内外面とも磨滅し調整不明。色調は白黄色を呈する。S-367より出土。

石製品

石剣(43) 先端部と下半を欠損している。現存長7.3cm、最大幅2.6cm、厚さ0.6cm。両面中央に鑊が作り出されている。全面が劣化する。泥岩製。S-469より出土。

石包丁(44、45) 44は一部欠損するが、ほぼ完形に近い。全面研磨され、2ヶ所に紐穴を開ける。使い込んだため細くなっている。大きさは11.1cm、幅3.6cm、厚さ0.85cm。暗紫色の輝緑凝灰岩製。

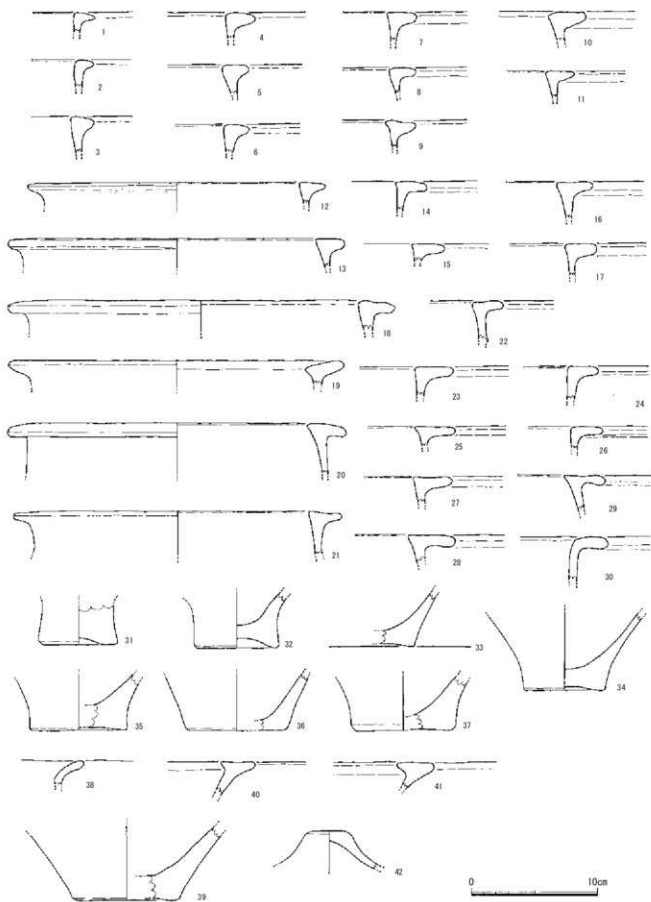


Fig. 70 7SI001 底面ピット群出土遺物実測図① (1/3)

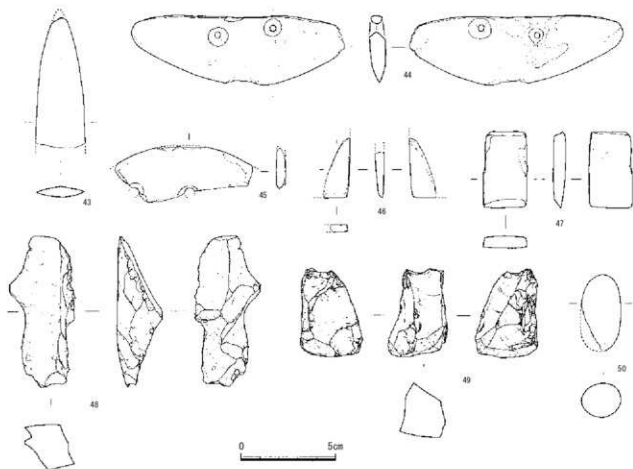


Fig. 71 7S1001 底面ビット群出土遺物実測図② (1/2)

S-301 より出土。45 は欠損が目立つが、2ヶ所に紐穴が穿たれている。刃部は欠損しているが、背部加工がみられる。泥岩製。S-371 より出土。

扁平片刃石斧 (46, 47) 46 は刃部付近の破片で、全面研磨するが、刃部はより研磨されている。厚さ 0.2 ~ 0.5cm、珪質泥岩製。S-369 より出土。47 は全面研磨され、さらに刃部を削り出す。ほぼ完形で、縦 4.0cm、幅 2.3cm、厚さ 0.65cm。珪質泥岩製。S-383 より出土。

剥片 (48) 縦 8.0cm、横 2.4 × 3.4cm。安山岩製。S-371 より出土。

石核 (49) 大きさは 4.6 × 3.1 × 3.0cm。一部自然面が残る。黒曜石製。S-371 より出土。

丸石 (50) 丸味のある石材で、一部欠損する。人為的な加工がどうかは明確ではないが、調査地内でこのような石が出土しなかったため、人が何かしら使用したものと推測した。縦 4.0cm、径 2.1 × 1.8cm。S-367 より出土。

7S1035 出土遺物 (Fig. 72)

弥生土器

甕 (1) SK010 より出土。復元底径 7.8cm。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は橙黄色を呈する。

壺 (2, 3) SK010 より出土。内外面とも磨減し調整不明。2 は復元底径 9.0cm。色調は白黄色を呈する。3 は胴部付近で最大径に突帯を巡らす。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は橙黄色を呈する。

器台 (4) 径 7.8cm の円柱で、中央に径 0.8 ~ 1.8cm の円孔が穿たれている。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。S-159 より出土。

石製品

扁平片刃石斧 (5) 上半部が欠損する。全面研磨し、さらに刃部を作り出している。現存長 4.3cm、幅 3.1

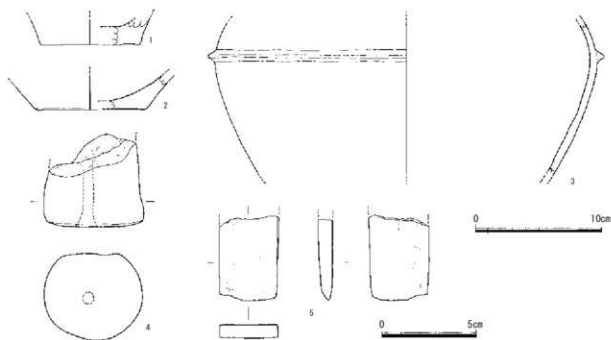


Fig. 72 7SI035 出土遺物実測図 (1/3, 5は1/2)

cm、厚さ0.75cm。珪質泥岩製。S-71より出土。

据立柱建物

7SB015a 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (13) 口縁部はやや長い断面三角形を呈する。内外面とも磨滅し調整不明。

7SB015b(S-133) 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (14) 口縁部は明確な稜線を付けず曲げる。色調は黄白色を呈する。

高坏もしくは壺 (15) 口縁部を肥厚させ、断面三角形に仕上げる。

7SB015c 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (16, 17) 16は口縁部を肥厚させたような断面三角形を呈する。色調は白黄色を呈する。17は内湾する口縁部で、粘土を貼付し口縁部内側を長く引き出している。色調は黄茶色を呈する。

壺もしくは高坏 (18) 口縁部を肥厚させ、口縁部内側を短く突出させる。

7SB015e 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕(19) 逆し字形の口縁部で、端部が若干重れる。内側端部を強くヨコナデし、稜線を作り出している。

7SB015f 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (20, 21) 20は短い口縁部。21は厚い底部で、底面中央を僅かに上げ底としている。底径5.5cm。
7SB015g 掘り方出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (22, 23) 2点とも口縁部が断面三角形。色調は淡橙黄色を呈する。内外面とも磨減し調整不明。

小壺 (24) 平坦な底部で内外面磨減し調整不明。

7SB040a 出土遺物 (Fig. 73, Pla. 15)

弥生土器

甕 (1~3) 1の口縁部は逆L字形で、口縁部下に低い断面三角形の突帯を巡らす。2の口縁部は短く屈曲し、内側にも突出が目立ち、断面がT字形のような形状をなす。3の口縁部は逆L字形で、端部が垂れている。

木製品

柱材 (4) 径23.5~26.0cm、残存高34.5cm。底面は大きく削り調整し、その痕跡を明瞭に残す。また、側面下端には伐採時のものとみられるカット痕が残る。側面に樹皮は残っていない。

7SB040b 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (5~8) 5はやや長い断面三角形。6の口縁部は逆L字形で、端部が垂れている。7・8は平底の底部で、7は内面に薄く炭化物が付着し、外面には僅かにタテハケが残る。

小甕 (9) くの字形の口縁部で、色調は淡黄白色を呈する。

甕もしくは壺 (10) やや薄い体部で、内外面磨減し調整不明。

壺 (11) 肩部付近の破片。内外面磨減し調整不明。

木製品

柱材 (12) 直径23.6cm、残存高32.0cm。底面に僅かにカット痕が残る。側面に樹皮や加工痕は残っていない。

7SB045b (S-436) 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (25) 断面三角形の口縁部で、内外面磨減し調整不明。

石製品

窪み石 (26) 大きさは9.3×8.9cm、厚さ5.7cm。全体として表面は粗く未加工であるが、中央に径3.5cm、深さ0.6cm程の円形状の窪みがあり、若干研磨される。花崗岩製。

7SB045e (S-392) 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (27, 28) 27は断面方形の厚い底部。復元底径6.0cm。28は厚く高い底部で体部との境はくびれる。内部には有機物が付着している。復元底径7.0cm。

7SB045f (S-464) 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (29) 欠損が目立つが、厚い底部である。

7SB055a 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕もしくは壺 (30) 平底の底部。

7SB055b 出土遺物 (Fig. 73)

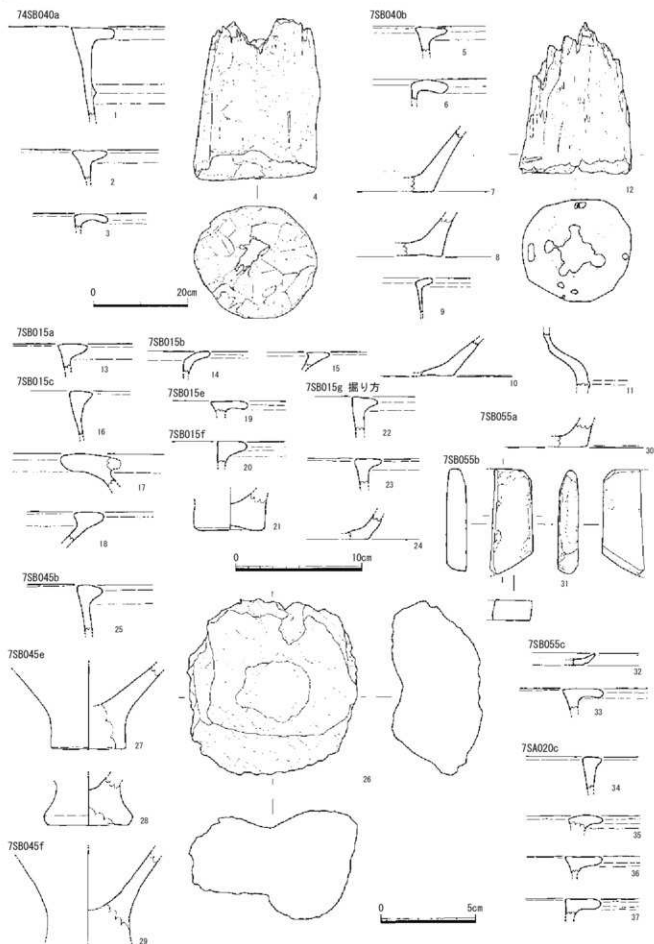


Fig. 73 7SB015・040・045・055、7SA020 出土遺物実測図 (1/3、4・12は1/8、26・31は1/2)

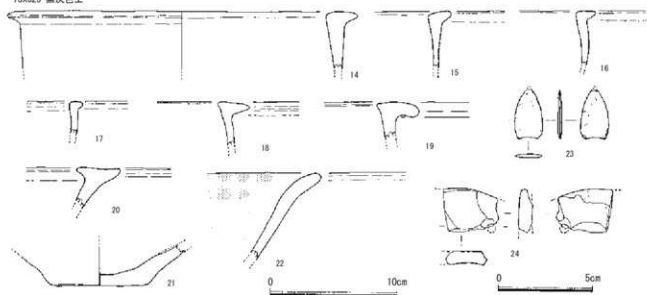
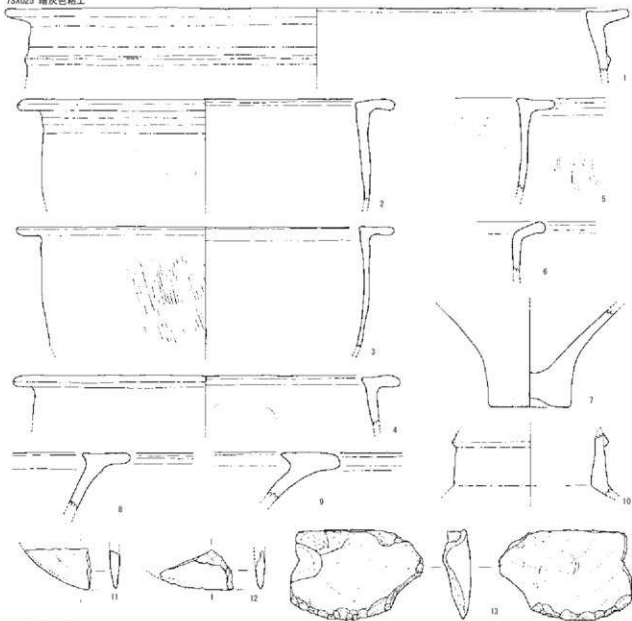


Fig. 74 7SX025 暗灰色粘土・黒灰色土出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

石製品

砥石 (31) 現存する大きさは5.5×2.2cm、厚さ1.1cm。1面を除いて全面研磨する。片刃石斧の二次加工品の可能性がある。珪質泥岩製。

7SB055c 出土遺物 (Fig. 73)

土師器

小皿 a (32) 器高1.0cm。内外面磨減し調整不明。色調は淡橙色を呈する。

弥生土器

甕 (33) 口縁部は逆L字形で、端部が垂れている。

櫛列

7SA020c 出土遺物 (Fig. 73)

弥生土器

甕 (34～37) 全体的に磨減し調整不明。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。34は肥厚させた程の短い口縁部。35～37は逆L字形の口縁部である。

流路

7SX025 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 74)

弥生土器

甕 (1～7) 1～5は口縁部が逆L字形である。1は復元口径49.2cm、口縁直下外面に低い断面三角形の突帯を巡らす。2は復元口径29.8cm、口縁端部が若干垂れる。外面には細かいタテハケがうっすら残る。3は復元口径29.8cm。外面タテハケ。4は復元口径28.6cm。現存範囲はヨコナデやナデ調整で、内面に指頭圧痕が残る。5は口縁部が逆L字形で、外面タテハケ調整。6は稜線を付けずに口縁部を逆L字形に屈曲させる。7は厚い底部で上げ底とする。外面に僅かにタテハケが残る。底径6.3cm。

壺 (8) 鋤形口縁で、磨減し内外面とも調整不明。

高坏もしくは壺 (9) 口縁部に粘土を貼付し肥厚させる。内側を大きく突出させる。高坏もしくは壺である。

壺 (10) 頸部は直上しながら薄くなる。口縁部は欠損するが、口縁部が断面三角形とする。内外面ヨコナデ調整。

石製品

石包丁 (11、12) 2点とも大きく欠損するが、刃部側の破片である。11は暗紫色の輝緑凝灰岩製。12は泥岩製。

搔器 (13) 長辺の端部両面を細かく加工し、刃部を作り出している。大きさは4.85×7.05cm、厚さ1.5cm。安山岩製。

7SX025 黒灰色土出土遺物 (Fig. 74)

弥生土器

甕 (14～19) 14～17は断面三角形の口縁部。14は復元口径25.6cm。外面に僅かにタテハケが残る。18はやや長い断面三角形の口縁部。19は逆L字形で、端部が若干垂れる。

壺 (20、21) 20は口縁部内側に粘土を貼付し突出させる。全面ヨコナデ調整。21は平らな底部で、復元底径7.7cm。外面底部近くには赤色顔料が残存する。

鉢 (22) 口縁部が若干曲げる。全体的に磨減するがナデが残る。内面には指頭圧痕が残る、炭化物が付着する。

石製品

石織 (23) 先端が欠損し、現存長2.65cm、最大幅1.5cm、厚さ0.2cm。全面研磨されている。緑灰

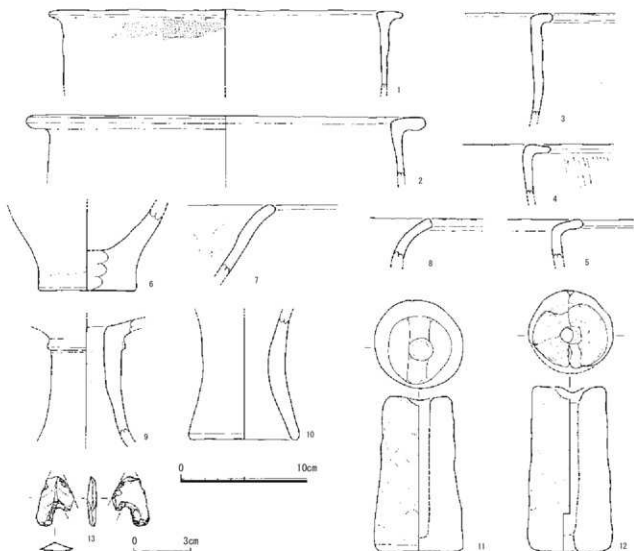


Fig. 75 7SX025 明灰色粘土出土遺物実測図(1/3, 13は1/2)

色の滑石製である。

石包丁 (24) 石包丁の一部で、紐穴が確認できる。両面研磨される。厚さ 0.75cm。

7SX025 明灰色粘土出土遺物 (Fig. 75, Pla. 15)

弥生土器

甕 (1~6) 1は復元口径 28.0cm。口縁部断面はやや長い三角形で、体部に張りがなく直線的である。外面タテハケ、その他はヨコナデ調整。口縁部外面直下に煤が付着する。2~5は口縁部が稜線を付けずにL字形に曲げている。体部に張りがなく直線的である。2は復元口径 31.6cm、外面に僅かにタテハケが残る。3・4は外面タテハケ。6は平底で若干厚い底部である。復元底径 7.8cm。

壺 (7, 8) 7には指頭圧痕が残りに、口縁部はヨコナデ調整。8は緩やかに外反する口縁部で、内外面ともナデ調整。口縁端部には刻み目が施されている。

高坏 (9) 脚部外面には縦方向のナデ、内面はナデ調整。脚部上部に低い突帯を巡らす。

器台 (10) 下端の復元径 8.8cm。外面磨減、内面ナデ調整。

支脚 (11, 12) 11は器高 12.2cm、上部径 5.1cm、底部径 7.0cm。中央には径 1.6cm 程の円孔があるが、貫通していない。また、上面には幅 1.5cm ほどの浅い溝が設けられている。胎土は白色砂粒を含み、色調は黄橙色を呈する。外面は指押さえが明瞭に残る。12は器高 13.0cm、上部径 5.8cm、底部径 7.0cm。中央には径 1.5cm 程の円孔が貫通する。また、上面には浅い溝が設けられている。外面は指押さえが明

瞭に残る。色調は黄褐色を呈する。

石製品

石鏡 (13) 先端部と基部の一部を欠損する。現存長 2.7cm、厚さ 0.5cm、黒曜石製。

7SX025 黒灰色粘土出土遺物 (Fig. 76 ~ 87, Pla. 15)

弥生土器

甕 (1 ~ 120) 1 ~ 85 は口縁部の破片。1 ~ 8 は稜線を付けずに曲げる口縁部。1 は如意形の口縁部で、内面はヨコナデ、外面はタテハケで低い三角形突帯を巡らす。2 は如意形の口縁部で、端部には刻み目が施され、煤が付着する。内面はヨコナデ、外面はタテハケで薄く煤が付着する。3 は復元口径 29.7cm。4 は外面タテハケ調整。7 は外面タテハケが僅かに残る。9 ~ 11 は僅かに突出する口縁部。9 の胎土は白色砂粒を多く含む。10 は外面に煤が付着する。11 は内面ナデ調整、外面はヨコナデで煤が付着する。12 ~ 41 は断面三角形もしくは若干長い三角形の口縁部。全体的に磨滅するが、外面調整が残るものはタテハケ、内面はほとんどがナデ調整。13 は外面に粗いタテハケがうっすら残る。17 は内外面ともナデ調整。18 は磨滅するが内外面ナデ調整か。20 は内外面ともハケ調整で、外面には煤がうっすら付着する。21 は外面に煤が付着する。22 は外面にうっすら煤が付着する。26 は外面に低い三角形突帯を巡らす。28 は口縁部外面に刻み目を施し、外面に煤が付着する。29 は口縁部が細い三角形で、外面タテハケ調整。30 は復元口径 18.2cm。口縁部には径 0.5cm の円孔が施されている。31 は復元口径 31.6cm。口縁部外面には刻み目を施す。内面上半部は粗いナデ、下半は使用で劣化する。外面はタテハケで焼きしまり黒光りし、口縁直下には煤が付着する。32 は復元口径 21.0cm。外面に断面三角形の低い突帯を巡らす。33 は復元口径 23.8cm。34 は復元口径 29.0cm。口縁部下半に煤が付着する。35 は復元口径 25.0cm。口縁部下には煤が付着する。36 は復元口径 29.2cm。外面にはうっすらと煤が付着する。37 は復元口径 27.0cm。38 は復元口径 27.0cm。39 は復元口径 27.8cm。40 は復元口径 25.0cm。外面にはミガキを施し、2 条の三角形突帯が巡る。41 は復元口径 26.4cm。外面に 2 条の低い三角形突帯を巡らす。42 ~ 49 は僅かにくの字形に曲がった口縁部。42 は復元口径 24.6cm。43 は外面にうっすらと沈線が巡る。44 は復元口径 27.6cm。45 は復元口径 25.0cm。外面には僅かに煤が付着する。46 は復元口径 28.6cm。外面には煤が付着する。47 は復元口径 25.3cm。48 は復元口径 31.2cm。49 は復元口径 28.0cm。50・51 はやや短い逆 L 字形の口縁部。50 の外面には煤が付着する。52 ~ 72 は逆 L 字形の口縁部。外面調整が残るものはタテハケ、内面も磨滅が目立つがほとんどがナデ調整。57 は復元口径 21.6cm。外面がヨコナデで、低い三角形突帯を巡らす。58 は復元口径 28.6cm。59 は復元口径 29.4cm。外面には低い三角形突帯が巡り、口縁下に僅かに煤が付着する。60 は復元口径 29.2cm。61 は復元口径 29.4cm。62 は復元口径 29.4cm。63 は復元口径 29.6cm。外面に煤がうっすら付着する。64 は復元口径 29.7cm。外面に断面三角形の低い突帯を巡らす。65 は復元口径 30.0cm。65 は復元口径 30.6cm。67 は復元口径 31.0cm。口縁部下に煤が付着する。68 は復元口径 32.0cm。69 は復元口径 32.0cm。外面には煤が厚く付着する。70 は復元口径 32.8cm。外面ヨコナデ。71 は復元口径 33.0cm。72 は復元口径 45.0cm。外面に低い三角形突帯を巡らす。73 ~ 81 は端部がやや垂れた逆 L 字形の口縁部。73 は復元口径 23.6cm。74 は復元口径 29.2cm。口縁下の一部にうっすらと煤が付着する。75 は復元口径 31.0cm。口縁部端の一部に煤が付着する。76 は復元口径 31.4cm。口縁部外面に煤が付着する。77 は復元口径 31.8cm。口縁部には煤が付着する。78 は復元口径 32.0cm。79 は復元口径 32.8cm。外面に低い三角形突帯を巡らし、部分的に煤が付着する。82 ~ 85 は胴部に張りがあるため、口縁部を鋭角に曲げる。82 は復元口径 43.4cm。口縁下に外面に低い三角形突帯を巡らす。口縁付近はヨコナデ、下半はタテハケ調整。84 は内外面ともナデ調整。



Fig. 76 7SX025 黑灰色粘土出土遺物実測図① (1/3)

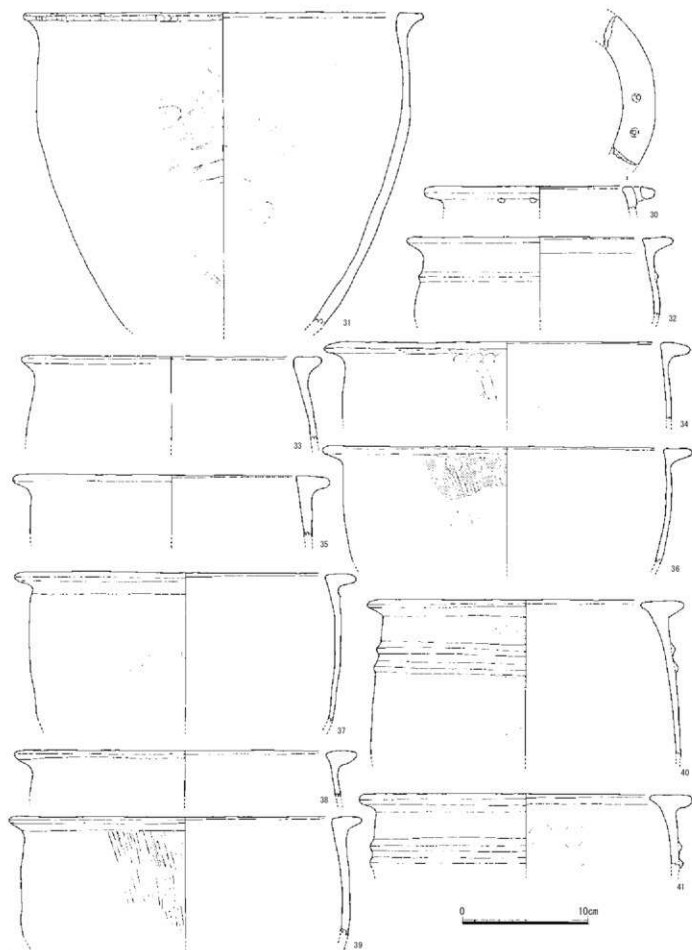


Fig. 77 7SX025 黑灰色粘土出土遺物実測図② (1/3)



Fig. 78 7SX025 黑灰色粘土出土遺物実測図③ (1/3)

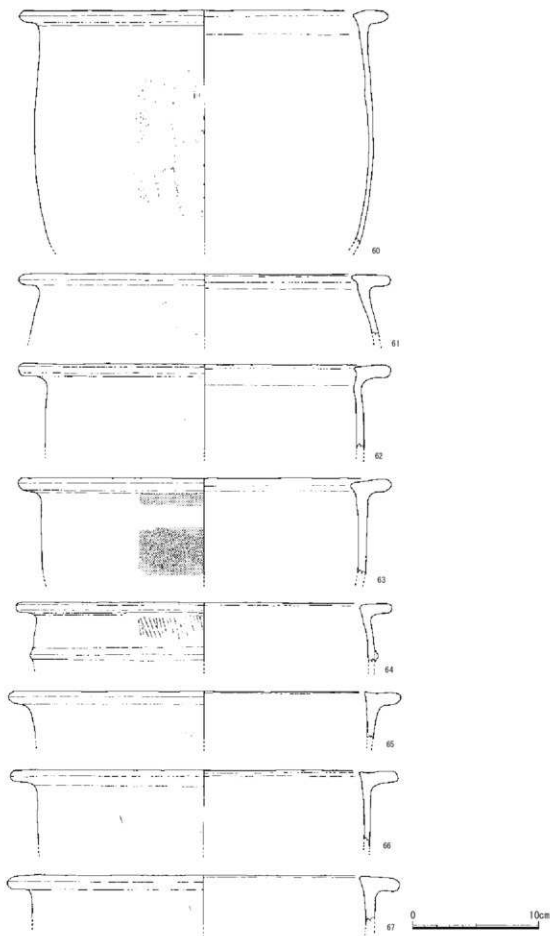


Fig. 79 7SX025 黑灰色粘土出土遺物実測図④ (1/3)

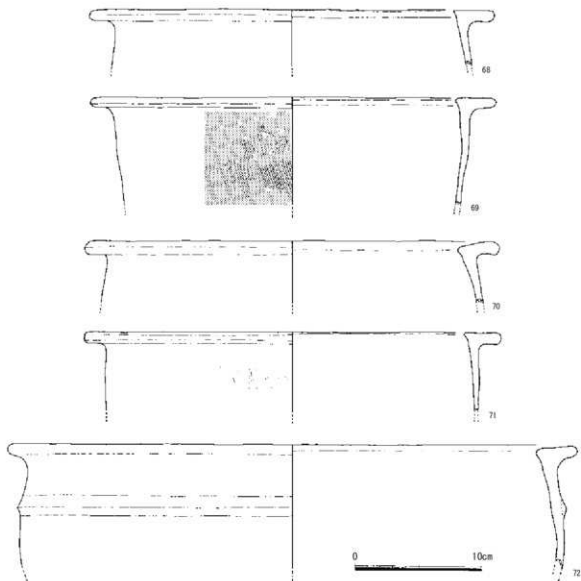


Fig. 80 7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑤ (1/3)

86～121は底部の破片である。外面タテハケ、内面はナデ調整である。86～96は厚い底部で上げ底とする。86は底径6.4cm。外面はタテハケ調整。87は底径7.3cm。内面に黒褐色の有機物が付着する。88は底径7.7cm。底部のくびれ外面には指頭圧痕が残る。89は底径7.0cm。90は復元底径9.1cm。91は底径6.6cm。92は底径6.2cm。93は底径8.2cm。94は底部径8.4cm。95は復元底径9.1cm。96は底径6.4cm。97～114は平底だが、全体的に若干上げ底である。97は底径6.85cm。98は復元底径6.6cm。99は底径6.65cm。100は復元底径7.2cm。101は底径7.4cm。102は底径5.8cm。103は底径7.0cm。104は底径6.2cm。105は底径6.6cm。106は復元底径6.8cm。107は底径5.2cm。内面には有機物が付着する。108は復元底径10.4cm。109は復元底径7.2cm。110は復元底径6.6cm。111は復元底径7.0cm。112は復元底径10.5cm。外面は細かいタテハケ調整。113は底径9.3cm。114は底径6.4cm。外面タテハケ、内面ナデ調整。119は外面タテハケの後やや粗いが細かいミガキを施す。内面には黒色付着物がみられる。外面底部は粗いナデ調整。

甕もしくは壺(115～120) 115は復元底径7.0cm。116は底径4.4cm。117は復元底径6.8cm。118の外面はミガキと丹塗りを施す。復元底径8.3cm。120は底径6.8cm。

甕(121) 焼成後に底部に径1.6cm程の孔を穿っている。復元底径7.8cm。

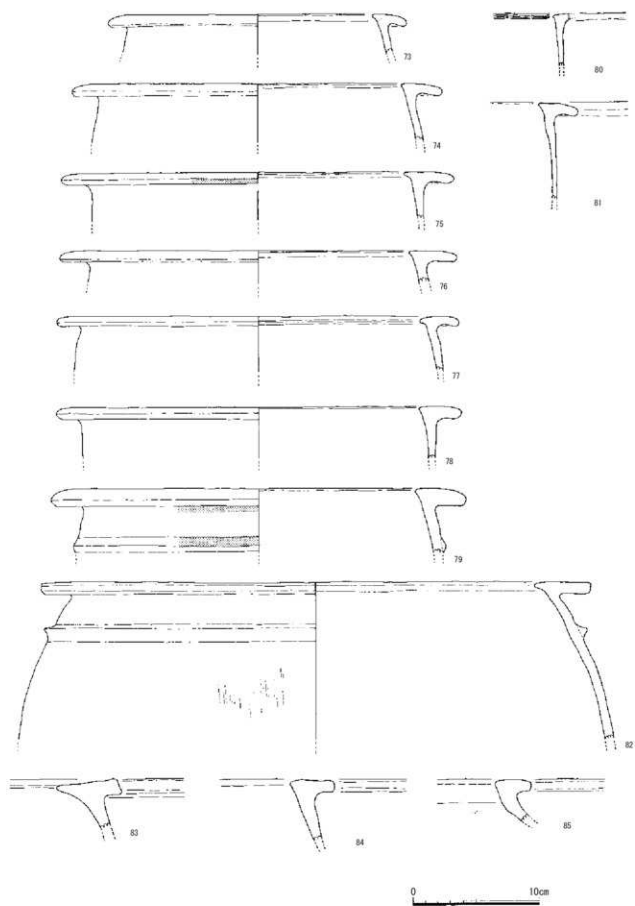


Fig. 81 7SX025 黑灰色粘土出土遺物実測図⑥ (1/3)

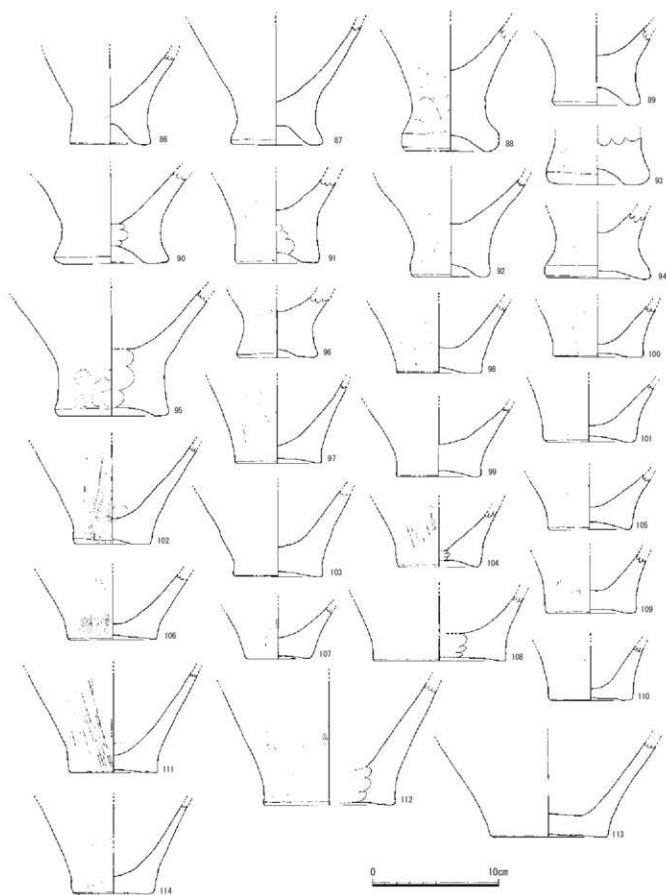


Fig. 82 7SX025 黑灰色粘土出土遺物実測図㉔ (1/3)

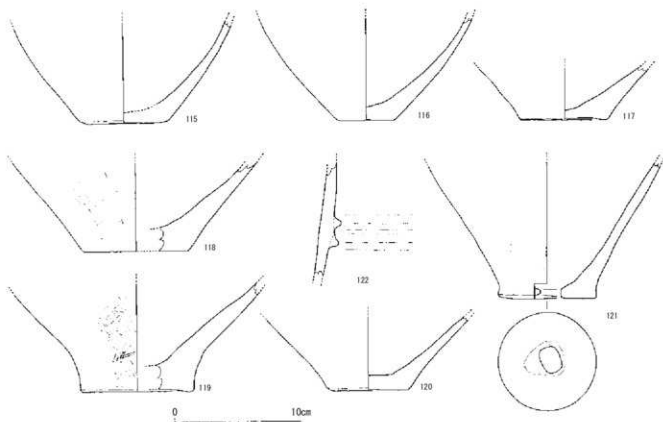


Fig. 83 7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑤ (1/3)

甕もしくは鉢 (122) 胴部の破片で、M 字状の突帯を巡らす。

壺 (123 ~ 154) 123 ~ 131 は鋤形口縁。123 は復元口径 17.6cm, 124 は復元口径 24.2cm, 口縁部上面に丹塗りが残る。125 は復元口径 24.8cm, 口縁部には刻み目が施されている。126 は復元口径 25.8cm, 127 は復元口径 26.2cm, 内外面とも磨滅するがナデもしくはミガキ調整。128 は復元口径 27.4cm, 129 は復元口径 28.0cm, 130・131 は粘土を貼付し口縁部を肥厚させる。130 は胴部に刻み目を施す。その他はヨコナデ調整。132 ~ 136 は外反する直口縁。132 は復元口径 20.8cm, 133 は復元口径 14.0cm, 器高 13.9cm, 底径 6.0cm, 体部最大径に突帯が巡り、突帯付近以下には煤が付着する。134 は復元口径 31.4cm, 口縁部外面直下には暗文のようなミガキがみられる。内面に横方向のミガキが施されている。135 は復元口径 18.0cm, 136 は内外面ともミガキもしくはハケ調整である。137・138 は短口縁。磨滅し調整不明。137 は復元口径 16.4cm, 138 は復元口径 17.4cm, 141・142 は頸部片である。141 は丁寧なナデもしくはミガキ調整。142 は頸部外面にうっすらとミガキが残る。体部外面には斑に丹塗りが残る。143 ~ 147 は胴部片である。143 は外面ヨコナデで M 字形の突帯を巡らす。144 は断面台形の低い突帯が 2 条巡らしている。145 は頸部の破片とみられ、内外面ともミガキの後に丹塗りが施されている。146 は胴部最大径とその上部の 2ヶ所に断面三角形の突帯を巡らす。147 は外面ヨコナデで M 字形の突帯を巡らす。148 ~ 153 は底部の破片。148 は底径 6.4cm, 外面は明橙色を呈する。丹塗りが劣化した状況か。149 は底径 7.15cm, 150 は上げ底で、復元底径 6.8cm, 外面には縦方向のミガキを施す。151 は復元底径 7.6cm, 152 は底径 6.8cm, 153 は復元底径 3.8cm, 外面はナデもしくはミガキ調整。内面は横方向のケズリ。

小壺 (154 ~ 156) 154 は復元口径 12.2cm, 155 は胴部中位に突帯を巡らす。内外面ともナデ調整、底部はケズリで、外面の半分ほどが黒斑である。復元底径 3.2cm, 156 は復元底径 5.6cm,

二重口縁壺 (139, 140) 139 は口縁部がヨコナデ、その他はハケ調整。屈曲部外面には刻み目が施

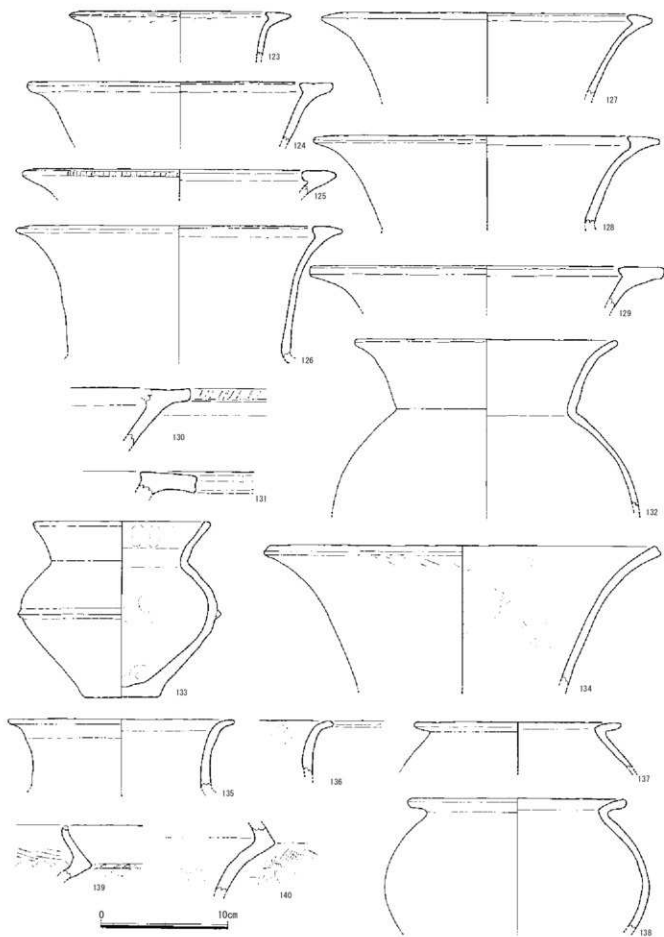


Fig. 84 7SX025 黑灰色粘土出土遺物実測図① (1/3)

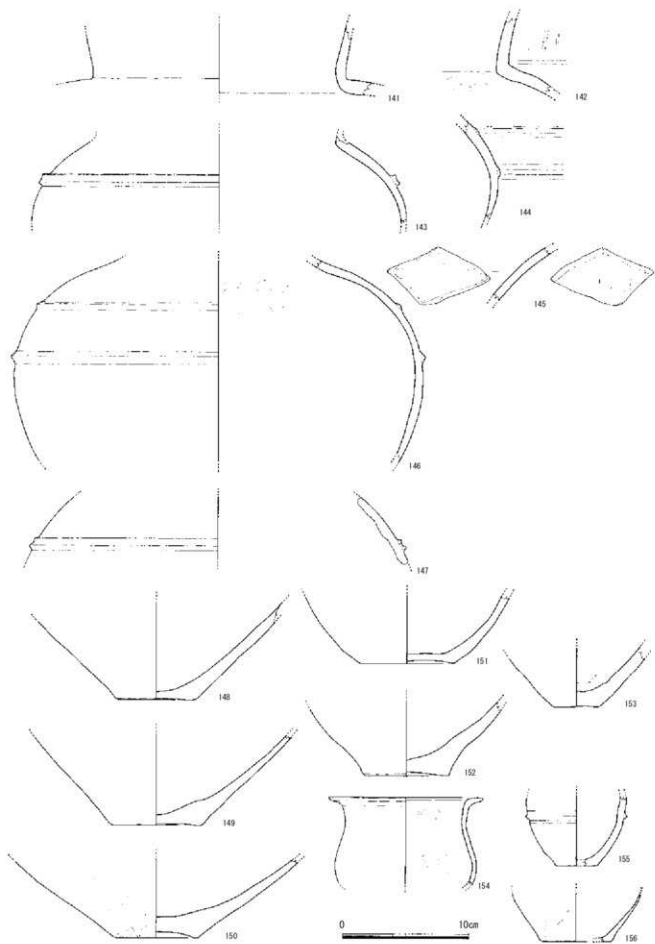


Fig. 85 7SX025 黑灰色粘土出土遺物実測図⑩ (1/3)

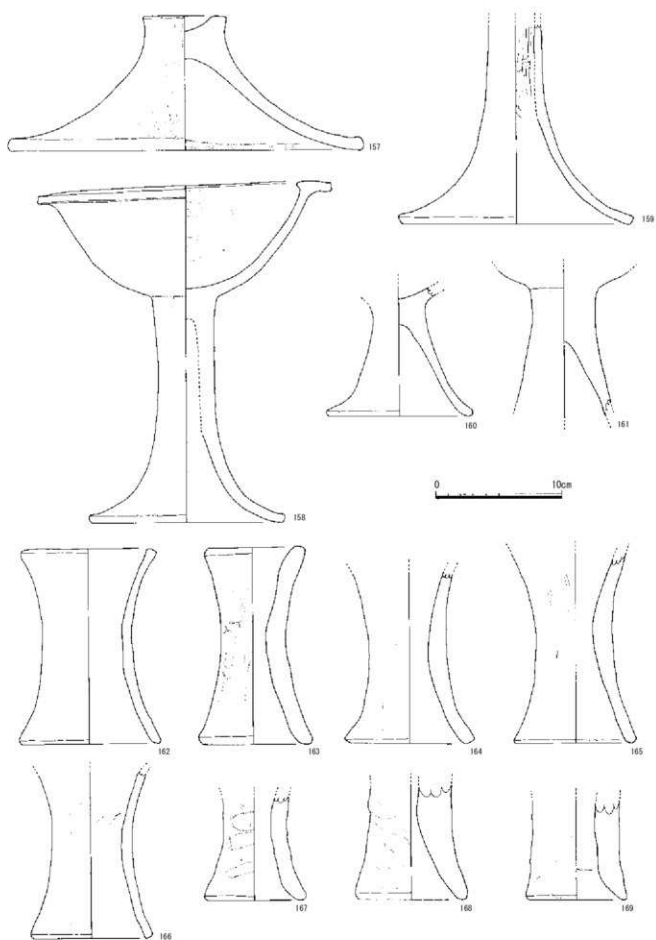


Fig. 86 7SX025 黑灰色粘土出土遺物実測図①(1/3)

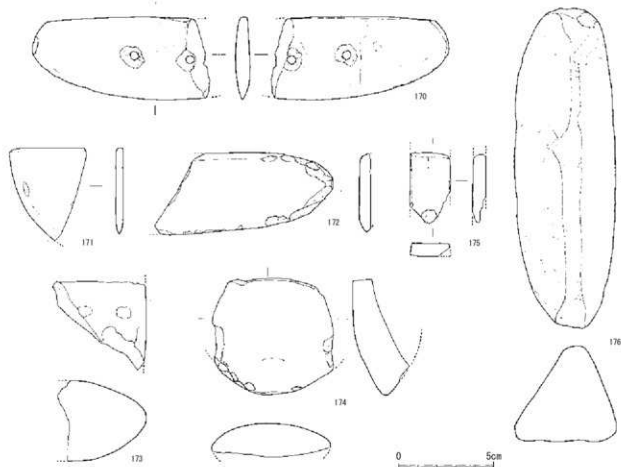


Fig. 87 7SX025 黒灰色粘土出土遺物実測図⑫ (1/2)

されている。140は頭部外面がタテハケ、内面がヨコハケ調整。

蓋 (157) 復元口径 28.1 cm、器高 10.6 cm、上部径 6.6 cm。外面細かいハケ調整、内面はナデ調整。口縁端部内面と頂部窪みには煤が付着する。

高杯 (158 ~ 161) 158は口径 23.2 cm、器高 25.7 ~ 26.9 cm、復元脚部径 15.0 cm。杯部内面と脚部上部はミガキ調整で、内外面に部分的に朱が付着する。特に杯と脚部の境や脚部下半によく残る。159は底部径 18.6 cm。外面には部分的に朱色が残る。内面上部には絞り痕、他はミガキのような痕跡が見られる。160は脚部径 11.6 cm。161の脚部外面はハケもしくはミガキ調整。

器台 (162 ~ 169) 全体として外面タテハケ、内面ナデ調整。162は上端復元径 10.7 cm、器高 15.35 cm、下端径 11.2 cm。162は上端径 7.9 cm、器高 15.6 cm、下端径 8.9 cm。164は下端径 10.3 cm。165は下端径 9.85 cm。166は下端径 9.5 cm。167は下端復元径 8.0 cm。外面は指押さえの後タテハケ調整。168は下端径 8.9 cm。169は下端径 8.0 cm。内面上半部はケズリのような痕跡が残る。

石製品

石包丁 (170, 171) 170は半分ほど欠損する。幅 4.5 cm、厚さ 0.8 cm、径 0.5 cm 前後の紐穴を 2ヶ所開ける。右図の面に擦痕がよく残る。輝緑凝灰岩製。171は石包丁の一部で、両面とも粗く研磨され、刃部はさらに細かく研磨している。泥岩製。

用途不明石製品 (172) 細長く扁平な石材で両端は研磨され、端部は加工されている。堆積岩製。

石斧 (173, 174) 173は石斧の一部で、欠損部以外全面研磨される。174は先端部の破片で、研磨し刃部としている。玄武岩製。

扁平片刃石斧 (175) 両端とも欠損する。現存長 3.7 cm、幅 2.1 cm、厚さ 0.7 cm。灰色の珪質泥岩製。

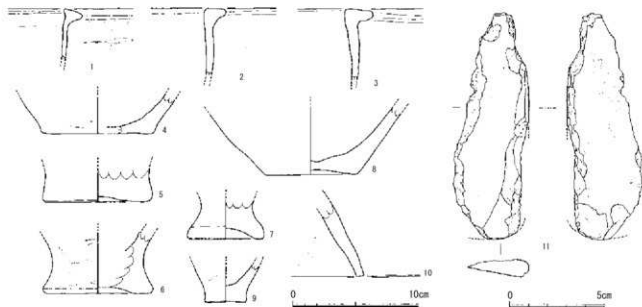


Fig. 88 7SX025 灰色粘土出土遺物実測図 (1/3, 11 は 1/2)

砥石 (176) 大きさは縦 16.9cm、幅 5.4×5.05cm。断面三角形で 2 面が研磨され、中央付近がより研磨され、擦痕もみられる。

7SX025 灰色粘土出土遺物 (Fig. 88)

弥生土器

甕 (1~7) 1・2 の口縁部は、断面三角形で外面タテハケ、内面ナデ調整。3 の口縁部は若干短めの逆L字形である。内面ヨコナデ、外面タテハケ。4 は復元底径 9.0cm、外面にはミガキのような痕跡を残す。その他はナデ調整。5 は厚い底部で底径 9.8cm。6 は復元底径 8.8cm、高い底部は若干上げ底である。外面はタテハケ。7 は高い底部で上げ底である。内外面はナデ調整。復元底径 6.1cm。

甕もしくは壺 (8) 上げ底気味の底部で底径 7.2cm。

小壺 (9) 底径 3.35cm。外面タテハケ、内面ナデ調整。色調は黄褐色を呈する。

高坏 (10) 内面ヘラケズリ、外面ナデ調整。破片で明確ではないが、径が大きい場合は鉢の可能性がある。

石製品

石斧 (11) 側面を中心に加工されているようにみえるが、破損による剥離で、人為的な加工ではない可能性がある。表裏および側面残存部に部分的に研磨痕が残る。現存長 12.0cm、厚さ 0.9cm。安山岩製。

第 7 次調査その他の遺構出土遺物 (Fig. 89)

石製品

石鎌 (1) 基部を一部欠損。長さ 2.95cm、現存最大幅 2.3cm、厚さ 0.55cm。安山岩製。S-32 より出土。
石包丁 (2) 半分ほど欠損するが、形状が石包丁である。しかし、刃部など加工しているが、紐穴等は見られず、研磨加工もされていないため製作途中の可能性が高い。泥岩製。S-158 より出土。

大型蛤刃石斧 (3) 両端を大きく欠損する。全体を丸く加工するが、表面は劣化する。幅 7.1cm、厚さ 4.7cm。表面には擦痕が見られる。玄武岩製。S-471 より出土。

第 7 次調査灰褐色土出土遺物 (Fig. 89)

土製品

投弾 (4) 長さ 4.0cm、断面不整形で 2.6×1.8cm。胎土は 0.1cm 以下の砂粒を多く含み、色調は淡灰黄色や暗灰色を呈する。

石製品

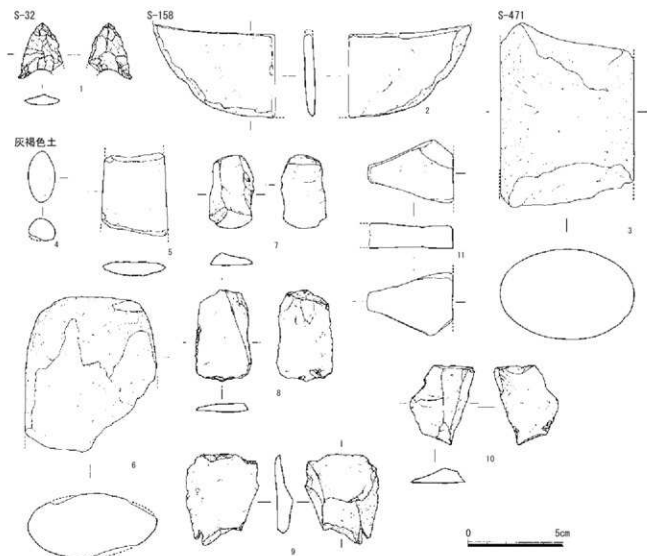


Fig. 89 その他の遺構・灰褐色土出土遺物実測図 (1/2, 4は1/3)

石剣(5) 両端を大きく欠損する。現存長4.45cm、現存最大幅3.5cm、厚さ0.7cm、全面を整えているが、表面が劣化し研磨は残存していない。泥岩製。

太型蛤刃石斧(6) 石斧の上部片で、現存幅6.9cm、厚さ3.45cm。玄武岩製。

剥片(7～10) 全て安山岩製。7は 3.9×2.3 cm、厚さ0.7cm、8は一部自然面が残る。大きさは 4.9×3.0 cm、厚さ0.5cm、9は一部自然面を残す。大きさは 4.75×3.9 cm、厚さ1.0cm、10は 4.3×3.4 cm、厚さ0.8cm。

用途不明石製品(11) 欠損が目立ち全形が不明である。両面・側面とも若干研磨する。両面同じ位置に幅0.2cm、深さ0.1cm程の溝が彫られている。緑灰白色の泥岩製。

(5) 小結

今回の調査で確認された遺構・遺物の多くが、弥生時代中期前半のものであった。

明確な堅穴住居であるSI001と、ピット群の集合体をSI035として堅穴住居の残骸として報告したが、この他にもSX025の流路沿いに小ピット群があり、SI001の北東側や調査区西端中央付近にもピットが集中する場所があった。これらについては明確にくれていないものの、住居・掘立柱建物・柵列である可能性は十分考えられる。過去の調査でこの周辺では弥生時代中期の遺構が多く検出されており、さらに補充する結果となった。今回の調査区に限ると、全体的な遺構の傾向としては流路(SX025)の方位

を意識した集落であったと推測される。よって、全体的に流路を目の前にして、竪穴住居や掘立柱建物が点在する当時の風景が想像できる。また、今回の竪穴住居は過去の調査の中では最大級であり、この一帯の集落の中心的な建物であった可能性が高い。

出土遺物のほとんどが弥生時代中期前半のものであり、この調査地については、この時代から人が住み始めたことが理解できる。弥生時代以降については、北側を中心に古代の遺物が散見された。調査区北東隣接地では木簡などが出土した古代の遺構が展開しており、その周縁部に当たるものと推測される。



Fig. 90 第7次調査遺構略測図 (1/200)

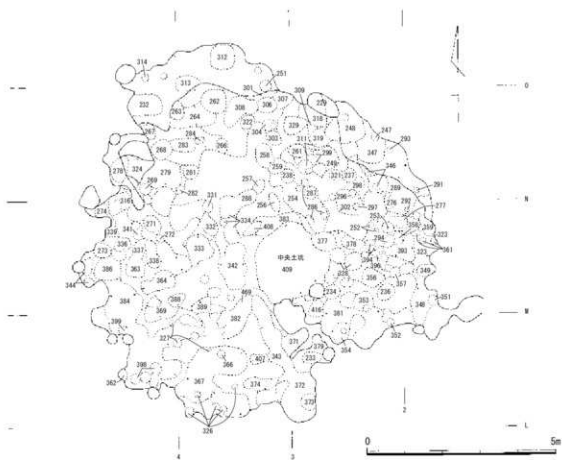


Fig. 91 7SI001内の遺構略測図 (1/100)

表.7 国分千足町遺跡第7次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	7S1001	堅穴住居	円形住居	弥生時代中期前半～中葉	L～0.1～4
2		ビッド群			03
3		ビッド群			02
4		溝			01・2
5	7SA005	土坑	糠敷き、S1035の一部か	弥生時代中期	L5
6		ビッド群			N1
7		ビッド群		平安時代	N1
8		ビッド群			Q3
9		ビッド			Q3
10	7SA010	土坑	赤生土層集中、S1035の一部か	弥生時代中期	M6
11		ビッド群			Q6
12		ビッド			Q5
13		ビッド群			0F4
14		ビッド			F4
15	7SB015	掘立柱建物	1×3間	古墳時代？ 弥生中期前半～中頃	J～L, 5～7
16		ビッド			02
17	7SB050	ビッド	S-50の一部	古墳時代以降	05
18		ビッド		平安時代後期	03
19		ビッド群			02
20	7SA020	溝列	3間以上	弥生時代中期中頃前後	H5～8
21		ビッド	灰色土	古代	P2
22		ビッド群			P2・3
23		ビッド			P3
24		ビッド			P3
25	7SA025	成層		弥生時代中期前半～中頃	B～K, 1～8
26		ビッド			P2
27		ビッド			Q1
28		ビッド			Q1
29		ビッド群			Q1
30	7SA030	溝列	4間以上	弥生時代中期？	GH2・3
31	7SB055	ビッド	S-55の一部	古代	P3
32		ビッド		古代？	P2
33		ビッド群			Q1
34		ビッド群			N5・6
35	7S1035	堅穴住居	ビッドの集合体、円形住居	弥生時代中期	K～M, 4～7
36		ビッド群			05・6
37	7SB050	ビッド	S-50の一部	古墳時代以降	04
38		ビッド			P3
39	7SB050	ビッド	S-50の一部	古墳時代以降	P3
40	7SB040	掘立柱建物	柱材遺存	弥生時代中期中頃前後	Q7～9
41		ビッド			P3
42		ビッド			P3
43	7SB055	ビッド	S-55の一部		P2
44		ビッド			P1
45	7SB045	掘立柱建物	1×2間、S-87・102・392・436・464・468含む	弥生時代中期前半	KL7・8
46		ビッド群			Q2
47		土坑		古代？	P1
48		ビッド群			P2
49		ビッド		古代	P2
50	7SB050	掘立柱建物	1×2間、S-17・37・39・84・73の一部・312含む	古墳時代以降	0F2～4
51	7SB055	ビッド	S-55の一部	古代	Q2
52		ビッド			P3
53	7SB055	ビッド	S-55の一部	古代	Q3
54		ビッド	S-50の一部	古墳時代以降	P2
55	7SB055	掘立柱建物	1×1間、S-31・43・51・53含む	古代	0Q2・3
56		ビッド			Q2
57		ビッド			P2
58		ビッド			P2
59		ビッド群		古代？	Q2
60	7SB060	掘立柱建物	2×3間	弥生時代中期	H～J, 3～5
61		ビッド群			06
62		ビッド群			P7
63		ビッド群			P7・8
64		土坑			M5
66		土坑			M5
67		ビッド群			MN6・7
68		ビッド群			L4
69		ビッド			M4
71		ビッド			M5
72		溝	灰褐色土		N6
73		ビッド群	一部S-50		NO4
74		ビッド群			L5
76		ビッド			M5
77		ビッド群			M7
78		ビッド群			M6
79		土坑			N5
81		ビッド群			N6
82		ビッド			N4
83		ビッド			N5
84		ビッド群			N5

86		ピット群			M8
87	7SB045	ピット	S-45の一部		M7
88		ピット群	灰色土		L7
89		ピット群			M5
91		ピット	灰色土	平安後期	K6
92		ピット群			K6
93	7SB040	掘立柱建物	S-40aに変更		G7
94		ピット	灰色土 新しい?	古代	Q8
96		ピット			L6
97		ピット			L6
98		ピット群			K6
99		ピット群			L5
101		ピット			M7
102	7SB045	ピット	S-45の一部	弥生時代中期前半	L7
103		ピット			L7
104		ピット			K7
106		ピット			J7
107		ピット群			J7
108		土坑			J7
109		ピット群			J7
111		ピット群		奈良時代～	IJ 7
112		土坑	下層は灰色粘土		L7
113		ピット			M5
114		ピット			M5
116		ピット群			M5
117		ピット群			L5
118		ピット			L5
119		ピット群			HI7
121		ピット			L5
122		ピット			L5
123		ピット			M4
124		ピット群			M4
126		ピット			M5
127		ピット群	S-64の底面		M5
128		ピット群			K1.7
129		ピット群			K1
131		窪み			L1
132		ピット群			IJ6
133	7SB015	掘立柱建物	S-15b		J6
134		土坑	淡灰色土		LK1
136		ピット			K3
137		窪み			L6
138		ピット群			H5
139		ピット群			J6
141		ピット群			K1.4
142		ピット群			L4
143		ピット群			K5
144		ピット群			K5
146		土坑	黄灰色土混じり灰褐色土		H6
147		ピット			K4
148		ピット群			L4
149		ピット			L4
151		窪み			K5
152		窪み			K5
153		窪み			K5
154		ピット			L4
156		ピット			L4
157		ピット群			K4
158		窪み群			H4・5
159		ピット			K4
161		土坑			L6
162		土坑			L6
163		ピット			L6
164	7SB015	掘立柱建物	S-15d	弥生中期前半～中頃?	L6
166		ピット群			K6
167		ピット			L6
168		ピット			L6
169		ピット群			H4
171		ピット群			L4
172		ピット群			H5
173		ピット群			H5
174		ピット群	S-158の下		H4
176		ピット群	S-158の下 S-20d	弥生時代中期中頃前後	H5
177		溝			H5
178		ピット群			H4
179		ピット群	灰色土で砂利多い。		J2
181		ピット群			K4
182		ピット			L5
183		ピット			L5
184		ピット			L5
186		ピット群	S-152の底面		K5
187		ピット			K5
188		ピット			K5

189		ビッド			M5
191		ビッド			L5
192		ビッド	S-151の底面		K5
193		ビッド			L6
194		ビッド群			H5
196		ビッド			H5
197		ビッド			L5
198		ビッド群			L4
199		ビッド群			L5
201		ビッド群			L4
202		窪み	灰色土	古代	L4
203		土坑	灰色土に細かい石含む		L4・5
204		ビッド			K5
206		ビッド	S-152の底面		K5
207		ビッド			L5
208		ビッド群			L5
209		ビッド			M6
211		ビッド			M5
212		ビッド			K6
213		ビッド			K6
214		溝	灰色粘土		N4
216		ビッド群			K5
217		ビッド群			H3
218		土坑			L1
219		土坑群			L1
221		窪み	灰色土		L2
222		土坑			L2
223		溝	灰褐色土 S-224との切り合い微妙		K2
224	7SD224	溝	灰褐色土 S1001に伴う溝か	弥生中期?	JK2
226		溝群	灰褐色土		K2
227		窪み		古墳時代以降	K3
228		ビッド群			L2
229		ビッド		古代?	N2
231		ビッド			H6
232		土坑			N4
233		ビッド			L2
234		ビッド			M2
236		ビッド			M2
237		ビッド			N2
238		ビッド			N3
239		ビッド			C2
241		溝			J2
242		窪み			J2
243		窪み		奈良時代～	L2
244		ビッド群			J2
246		ビッド			M1
247		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
248		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
249		土坑	S-1内、黄褐色土と茶褐色土の混合層。底面にビッド。	弥生時代中期前半～中葉	N2
251		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	O3
252		ビッド群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
253		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
254		土坑	S-1内、底面にビッドあり。	弥生時代中期前半～中葉	M2
256		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
257		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
258		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
259		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
261		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
262		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
263		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
264		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
266		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
267		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
268		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
269		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
271		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
272		ビッド	S-1内、木質残存。	弥生時代中期前半～中葉	M4
273		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
274		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
276		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
277		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
278		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
279		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
281		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
282		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
283		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
284		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
286		ビッド群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
287		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
288		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
289		土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
291		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N1
292		ビッド	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M1

293	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
294	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
296	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
297	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
298	ピット	S-1内, 木質残存, 黄灰色土と黒灰色土の混合層	弥生時代中期前半～中葉	N2
299	ピット群	S-1内, S-249の底面	弥生時代中期前半～中葉	N2
301	土坑	S-1内, 底面にピット	弥生時代中期前半～中葉	N3
302	ピット	S-1内, 黄灰色土・黒灰色土の混合層	弥生時代中期前半～中葉	M2
303	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
304	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
306	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
307	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
308	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N3
309	土坑	S-1内, 底面にピット	弥生時代中期前半～中葉	N2
311	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
312	ピット	S-1内, S-50の一部	弥生時代中期前半～中葉	03
313	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
314	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	04
316	ピット	S-1内, 下に礎	弥生時代中期前半～中葉	N4
317	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
318	ピット	S-1内, S-309の底面	弥生時代中期前半～中葉	N2
319	ピット	S-1内, S-309の底面	弥生時代中期前半～中葉	N2
321	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
322	ピット	S-1内, S-301の底面	弥生時代中期前半～中葉	N3
323	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M1
324	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
326	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
327	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L1
328	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
329	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
331	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
332	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
333	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
334	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
336	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
337	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
338	ピット	S-1内	古代?	M4
339	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M1
341	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M1
342	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
343	溝	S-1内, 黒灰色土, S-224の延長?	弥生時代中期前半～中葉	L2・3
344	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
346	ピット群	S-1内, S-347+247	弥生時代中期前半～中葉	N2
347	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N2
348	土坑	S-1内, S-349・351+348	弥生時代中期前半～中葉	M1
349	土坑	S-1内, S-349・351+348	弥生時代中期前半～中葉	M1
351	ピット	S-1内, S-349・351+348	弥生時代中期前半～中葉	M1
352	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
353	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
354	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
356	窪み	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
357	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
358	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
359	ピット	S-1内, S-323の底面	弥生時代中期前半～中葉	M1
361	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M1
362	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L4
363	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
364	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	N4
366	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
367	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
368	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
369	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
371	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2・3
372	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
373	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
374	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
376	ピット群	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	H13
377	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
378	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
379	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
381	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L2
382	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	L3
383	土坑	S-1内, 黄灰色土・黒灰色土・灰色土の混合層	弥生時代中期前半～中葉	M3
384	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
386	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
387	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
388	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M4
389	ピット	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M3
391	ピット			J7
392	ピット	S-46の一部	弥生時代中期前半	K7
393	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2
394	ピット群	S-1内, 灰色粘土	弥生時代中期前半～中葉	M2
396	土坑	S-1内	弥生時代中期前半～中葉	M2

397	ピット群	S-1内, S-384の底面	養生時代中期前半～中葉	L3
398	ピット群	S-1内, S-384の底面	養生時代中期前半～中葉	L4
399	ピット	S-1内, S-384の底面	養生時代中期前半～中葉	L4
401	ピット群			I3
402	ピット群			I3
403	ピット			L8
404	土坑			L8
406	ピット			J7
407	ピット	S-1内	養生時代中期前半～中葉	L3
408	土坑	S-1内	養生時代中期前半～中葉	N3
409	ピット群	中央土坑内のピット群, S-1内	養生時代中期前半～中葉	N2・3
411	土坑			I4
412	ピット群			I4
413	ピット群			I3
414	ピット群			I3
416	ピット	S-1内	養生時代中期前半～中葉	M2
417	ピット群			H6
418	ピット			Q5
419	ピット			O7
421	ピット			Q7
422	ピット群			I2
423	土坑			Q8
424	ピット群			Q8
426	ピット群			R8
427	ピット			Q9
428	7SB045 掘立柱建物	S-45b	養生時代中期前半	Q9
429	ピット群			O9
431	土坑	黒灰色粘土		P8
432	ピット群			M9
433	ピット群			N9
434	ピット群			L8
436	7SB045	S-45の一部	養生時代中期前半	L8
437	ピット群			L8
438	ピット群			L9
439	ピット群			M8
441	ピット			L9
442	ピット群			L9
443	ピット群			I8・9
444	ピット群			I8
446	ピット群			I8
447	ピット群			I8
448	ピット群			H8
449	ピット			H8
451	ピット群			I8
452	土坑			K8
453	ピット			K8
454	窪み群			K8
456	ピット群			K8
457	ピット			K8
458	ピット群			K9
459	窪み			K9
461	ピット群			K9
462	ピット群			J8
463	ピット群			K9
464	7SB045	S-45の一部	養生時代中期前半	K8
466	ピット群			L9
467	ピット			L9
468	7SB045	S-45の一部	養生時代中期前半	L9
469	ピット群	S-1内, S-382の底面	養生時代中期前半～中葉	L3
471	土坑	黒灰色土		N8
472	ピット群			P8・9
473	ピット群			E8
474	ピット群			C8
476	ピット			M5

表 8 四分点足町遺跡第7次調査 出土遺物一覧表

S-1 茶褐色土	
須 惠 器	器蓋1、蓋c、杯、杯c、壺、破片
土 部	器杯c
須 泉 堂 瓦 葺	破板; II-b(i)
青 白	破破片(i)
弥 生 土	器高坏环部、高坏脚部、壺、甬、破片
瓦	割片(格子)、破片
金 属 製 品	漆埴
石	割片(黑曜石、安山岩)、石包丁、石鏝
S-1 黄褐色土	
弥 生 土	器壺、破片
石 製	品割片(黑曜石)
S-1 灰青色土	
弥 生 土	器高坏、壺、甬、器台、破片
石 製	品割片(黑曜石)、Sp.6 ⁺ 、石沓、丸石、管玉
土 製	品粘埴土
S-1 中央土灰黑色土	
弥 生 土	器高坏外壁、壺、甬、器台、破片(丹塗り)、破片
瓦	割片(黑曜石、安山岩)、丸石
S-2	
弥 生 土	器破片
S-3	
弥 生 土	器割、破片
S-4	
弥 生 土	器破片
S-5	
弥 生 土	器壺、破片
瓦	割片(黑曜石)
S-6	
須 惠 器	器破片
弥 生 土	器破片
石 製	品割片(黑曜石)
S-7	
白	破板; 破片(i)
S-8	
弥 生 土	器破片
S-9	
弥 生 土	器破片?
S-10	
弥 生 土	器壺、壺、破片
S-11	
弥 生 土	器壺、破片
S-12	
弥 生 土	器壺、破片
S-13	
弥 生 土	器破片
土 製	品土塊
S-14	
行 式 土 部	器杯?
弥 生 土	器壺、破片
S-14a	
弥 生 土	器壺、壺、破片
石 製	品割片(黑曜石)
S-14c	
弥 生 土	器壺、壺×高坏、甬
石 製	品割片(黑曜石)
S-14e	
弥 生 土	器壺、破片
S-14f	
弥 生 土	器壺、破片
石 製	品割片(黑曜石)
S-14g	
弥 生 土	器破片
S-14g 柱底	
弥 生 土	器壺?、破片
S-14g 瓶口方	
弥 生 土	器壺?、破片
石 製	品割片(黑曜石)
S-14h	
弥 生 土	器壺、破片
石 製	品割片(黑曜石)

S-15	
弥 生 土	器壺、破片
S-17	
須 惠 器	器壺
土 部	器破片
弥 生 土	器破片
S-18	
土 部	器破片
白	破板; 破片(i)
弥 生 土	器壺、破片
石 製	品割片(黑曜石)
S-19	
弥 生 土	器破片
S-20a	
弥 生 土	器破片
S-20b	
弥 生 土	器破片
S-20c	
弥 生 土	器壺、破片
S-21	
弥 生 土	器破片
瓦	割片瓦(隅目)、破片
石 製	品丸石、砥石?
S-22	
弥 生 土	器壺、破片
S-23	
弥 生 土	器破片
S-24	
弥 生 土	器壺、破片
石 製	品割片(黑曜石)
S-25 灰青色土	
古 式 土 部	割二重口縁道
弥 生 土	器高坏环部、小壺、壺、甬、器台、破片
石 製	品石鏝、石包丁?、石沓?、割片(黑曜石)、丸石
S-25 明灰色粘土	
弥 生 土	器高坏、壺、甬、器台、支脚、破片
石 製	品石鏝(黑曜石)
S-25 灰色粘土	
弥 生 土	器壺、壺、割片、破片
石 製	品石鏝、割片(黑曜石)
S-25 暗灰色粘土	
弥 生 土	器高坏、壺、甬、器台、破片
石 製	品石包丁?、割片(安山岩)
S-25 黑灰色粘土	
弥 生 土	器高坏、壺、甬、二重口縁道、器台、丹塗り土器、破片
石 製	品石包丁、石包丁加工品、石包丁未製品、磨製石沓?、石沓、石沓?、砥石、石石、砥石、丸石、割片(黑曜石、安山岩)
S-26	
弥 生 土	器壺、破片
S-27	
弥 生 土	器壺、破片
S-28	
弥 生 土	器壺、破片
S-29	
弥 生 土	器破片
石 製	品丸石
S-30	
弥 生 土	器破片
S-31	
土 部	器破片
S-32	
須 惠 器	器杯
弥 生 土	器壺、破片
石 製	品石鏝
S-33	
弥 生 土	器破片
石 製	品割片(黑曜石)
S-34	
土 部	器破片
S-36	
土 部	器破片?
弥 生 土	器壺

S-37	土 部 部破片
张 生 土 部	
S-38	土 部 部坏片、破片?
张 生 土 部	
S-39	土 部 部破片?
张 生 土 部	
S-40a	张 生 土 部
S-40b	张 生 土 部
石 製 品	
S-40c 柱顶	张 生 土 部
S-41	张 生 土 部
S-42	张 生 土 部
S-43	张 生 土 部
土 部	
张 生 土 部	
S-44	张 生 土 部
石 製 品	
S-46	张 生 土 部
土 製 品	
S-47	张 生 土 部
土 部	
S-48	张 生 土 部
S-49	张 生 土 部
土 部	
张 生 土 部	
石 製 品	
S-51	土 部 部破片?
张 生 土 部	
石 製 品	
S-52	土 部 部破片?
S-53	张 生 土 部
石 製 品	
S-54	土 部 部破片?
张 生 土 部	
S-56	张 生 土 部
石 製 品	
S-57	张 生 土 部
S-58	张 生 土 部
S-59	张 生 土 部
土 部	
张 生 土 部	
瓦 部	
S-61	张 生 土 部
金 属 製 品	
S-62	张 生 土 部
石 製 品	
S-63	土 部 部破片?
石 製 品	

S-64	张 生 土 部
石 製 品	
S-66	张 生 土 部
石 製 品	
S-67	土 部 部破片?
张 生 土 部	
石 製 品	
S-68	土 部 部破片?
张 生 土 部	
石 製 品	
S-69	张 生 土 部
石 製 品	
S-71	张 生 土 部
石 製 品	
S-72	张 生 土 部
S-73	张 生 土 部
石 製 品	
S-74	张 生 土 部
S-76	张 生 土 部
石 製 品	
S-77	张 生 土 部
石 製 品	
S-78	张 生 土 部
S-79	张 生 土 部
石 製 品	
S-81	张 生 土 部
石 製 品	
土 製 品	
S-82	张 生 土 部
石 製 品	
S-83	张 生 土 部
石 製 品	
S-84	张 生 土 部
S-86	张 生 土 部
石 製 品	
S-87	张 生 土 部
S-88	张 生 土 部
S-89	张 生 土 部
石 製 品	
S-91	张 生 土 部
土 部	
瓦 部	
瓦 部	
瓦 部	
S-92	张 生 土 部
石 製 品	
S-93	张 生 土 部
石 製 品	

5-94	酒 志 器盤	
	土 部 器盤片	
	瓦 製 器盤片	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-95	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-97	弥 生 土 器(燧石)	
	瓦 製 品割片(黒曜石)	
	土 製 品燧石塊	
5-98	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-99	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品(石斧、丸石)	
5-101	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-102	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-103	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-104	弥 生 土 器(燧石)	
5-106	弥 生 土 器(燧石)	
5-107	弥 生 土 器(燧石)	
5-108	弥 生 土 器(燧石)	
5-109	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-111	酒 志 器盤	
	土 部 器盤片	
	弥 生 土 器(燧石)	
5-112	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石、安山岩)	
5-113	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石、丸石)	
5-114	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-116	弥 生 土 器(燧石)	
5-117	弥 生 土 器(燧石)	
5-118	弥 生 土 器(燧石)	
5-119	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-121	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-122	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-123	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-124	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	

5-126	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-127	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-128	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-129	弥 生 土 器(燧石)	
5-131	弥 生 土 器(燧石)	
5-132	弥 生 土 器(燧石)	
5-133	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品(高坪、燧石)	
5-134	酒 志 器盤	
	弥 生 土 器(燧石)	
5-136	弥 生 土 器(燧石)	
5-137	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-138	弥 生 土 器(燧石)	
5-139-164	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-141	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-142	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-143	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-144	弥 生 土 器(燧石)	
5-146	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品(丸石、割片(黒曜石))	
5-147	弥 生 土 器(燧石)	
5-148	弥 生 土 器(燧石)	
5-149	弥 生 土 器(燧石)	
5-151	酒 志 器盤	
	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-152	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-153	弥 生 土 器(燧石)	
5-154	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-156	弥 生 土 器(燧石)	
5-157	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石)	
5-158	弥 生 土 器(燧石)	
	石 製 品割片(黒曜石、扁平加工品)	

S-159	张 生 土 器 破片
张 生 土 器 高环、器台、破片	
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-161	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-162	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 丸石	
S-163	张 生 土 器 像
瓦 製 品 平瓦(燕子)	
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-166	张 生 土 器 破片
S-167	张 生 土 器 破片
S-168	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-169	张 生 土 器 破片
S-171	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-172	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 平玉石	
S-173	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-174	张 生 土 器 像、破片
S-176	张 生 土 器 破片
S-177	张 生 土 器 像
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-178	张 生 土 器 像、器?
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-179	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-181	张 生 土 器 像、破片
S-182	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-183	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-184	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-186	张 生 土 器 像、破片
S-187	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-188	张 生 土 器 破片
S-189	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-191	张 生 土 器 破片
S-192	张 生 土 器 像
石 製 品 刻片(黑曜石)	

S-193	张 生 土 器 破片
石 製 品 破片	
S-194	张 生 土 器 器台、破片
石 製 品 石磨、刻片(黑曜石)	
S-196	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-197	张 生 土 器 像、器台
S-198	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-199	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-201	张 生 土 器 像、破片
S-202	土 師 器 破片
张 生 土 器 像、破片	
瓦 製 品 平瓦(横目)	
S-203	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 丸石	
S-204	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-206	张 生 土 器 像、破片
S-207	张 生 土 器 像
石 製 品 刻片(黑曜石)、丸石	
S-208	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-209	张 生 土 器 像、丹波り土器、破片
S-211	张 生 土 器 破片?
S-212	张 生 土 器 破片?
S-213	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-214	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-216	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-217	张 生 土 器 像、破片
S-218	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-219	张 生 土 器 破片
S-221	张 生 土 器 像
S-222	张 生 土 器 破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-223	张 生 土 器 像、破片
石 製 品 刻片(黑曜石)	
S-224	泥 皮 器 破片
张 生 土 器 高环、高环?、像、器台、丹波り土器、破片	
石 製 品 丸石、刻片(黑曜石)	

S-226	张 生 土 器(甕、器台、破片)
瓦 製 類破片	
石 製 品(丸石、測片(黑曜石))	
S-227	須 恵 器(破片?)
张 生 土 器(甕、破片)	
石 製 品(測片(黑曜石))	
S-228	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(測片(黑曜石)、丸石)	
S-229	須 恵 器(破片)
土 師 器(坏、破片)	
S-231	土 師 器(破片?)
张 生 土 器(甕、破片)	
石 製 品(測片(黑曜石))	
S-232	张 生 土 器(破片)
石 製 品(測片(黑曜石))	
S-233	张 生 土 器(甕、赤×甕、破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-234	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-236	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-237	张 生 土 器(甕、丹塗り土器、破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-238	张 生 土 器(破片)
S-239	张 生 土 器(破片)
S-241	須 恵 器(坏、甕)
张 生 土 器(甕、破片)	
石 製 品(丸石、测片(黑曜石))	
S-242	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-243	須 恵 器(長頸瓶)
土 師 器(破片?)	
张 生 土 器(甕)	
瓦 製 類破片(測片)	
石 製 品(丸石)	
S-244	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-246	张 生 土 器(破片)
S-247	张 生 土 器(甕、破片)
S-248	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-249	张 生 土 器(破片)
S-249 下層	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-251	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-252	张 生 土 器(破片)
S-253	张 生 土 器(甕、破片)
S-254	张 生 土 器(甕、破片)
土 製 品(土塊)	

S-254 下層	张 生 土 器(甕、破片)
S-256	张 生 土 器(甕、破片)
S-257	张 生 土 器(破片)
石 製 品(包丁?)	
S-258	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-259	张 生 土 器(甕、破片)
S-261	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片)	
S-262	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-263	张 生 土 器(破片)
S-264	张 生 土 器(破片)
S-266	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(丸石)	
S-267	张 生 土 器(破片)
S-268	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-269	张 生 土 器(甕、破片)
S-271	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-272	张 生 土 器(甕)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-273	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-274	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(测片(黑曜石)、丸石)	
S-276	张 生 土 器(甕、破片)
S-277	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-278	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石、赤武石))	
S-279	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-281	张 生 土 器(破片)
S-282	张 生 土 器(甕)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-283	张 生 土 器(甕、破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-284	张 生 土 器(破片)
石 製 品(测片(黑曜石))	
S-286	张 生 土 器(甕)
S-287	石 製 品(测片(黑曜石))

S-288	张生土 器破片
S-289	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-289 下層	张生土 器器台、破片 石 製 品(磨石)
S-291	张生土 器破片
S-292	张生土 器破片
S-293	张生土 器破片 石 製 品(磨石)
S-294	张生土 器破片 石 製 品(磨石、玄武岩)
S-296	张生土 器破片
S-297	张生土 器破片
S-298	张生土 器破片
S-299	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-301	张生土 器残、破片 石 製 品(石包丁、剥片)
S-302	张生土 器破片
S-303	石 製 品(磨石)
S-304	张生土 器破片
S-306	张生土 器残、破片
S-307	张生土 器残 石 製 品(磨石)
S-308	张生土 器破片 石 製 品(磨石)
S-309	张生土 器残、破片 石 製 品(石包丁)
S-311	张生土 器残
S-312	张生土 器破片 石 製 品(磨石)
S-313	张生土 器残、破片
S-314	张生土 器破片
S-316	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-317	张生土 器破片
S-318	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-319	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-321	张生土 器破片 石 製 品(磨石)

S-322	张生土 器破片 石 製 品(磨石)
S-323	张生土 器残、破片
S-324	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-326	张生土 器残、器台、破片 石 製 品(磨石)
S-327	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)、丸石
S-328	张生土 器残、器台、破片 石 製 品(磨石)、丸石
S-329	张生土 器破片 石 製 品(磨石)
S-331	张生土 器破片
S-332	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-333	张生土 器残、破片 石 製 品(丸石、剥片)
S-334	张生土 器残、器台、破片 石 製 品(磨石)
S-336	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-337	张生土 器残、破片
S-338	张生土 器破片 金属製 品(铁、铁釘) 石 製 品(磨石)
S-339	张生土 器破片
S-341	张生土 器残、破片 石 製 品(丸石、剥片)
S-342	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-343	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石、安山岩)
S-344	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-346	张生土 器残、器台、破片 石 製 品(磨石)
S-347	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-348	张生土 器高环、残、破片 石 製 品(磨石)、丸石
S-348 下層	张生土 器高环、器台、破片 石 製 品(磨石)
S-349	张生土 器残、破片 石 製 品(磨石)
S-351	张生土 器破片 石 製 品(磨石)

S-352	石 製 品[割片(黒曜石)]
S-353	弥生土 器(燧石、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-354	弥生土 器(器台?、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-356	弥生土 器(破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-357	弥生土 器(壶×高坏、破片)
S-358	弥生土 器(燧)
S-359	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-361	弥生土 器(燧、破片)
S-362	弥生土 器(破片)
S-363	弥生土 器(破片) 石 製 品[割片(黒曜石、安山岩?)]
S-364	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-366	弥生土 器(破片)
S-367	弥生土 器(燧、燧、壶?、破片) 石 製 品[丸石、割片(黒曜石)]
S-368	弥生土 器(破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-368 下層	弥生土 器(破片)
S-369	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[磨製片(方石骨)、割片(黒曜石)]
S-371	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)、石核(黒曜石、安山岩)、石包]
S-371 下層	弥生土 器(破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-372	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-373	石 製 品[割片(黒曜石)]
S-374	弥生土 器(燧、破片)
S-376	弥生土 器(燧、燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)、丸石]
S-377	弥生土 器(丹塗リ土器、破片) 石 製 品[割片(黒曜石、安山岩)]
S-378	弥生土 器(破片)
S-379	弥生土 器(破片)
S-381	弥生土 器(燧) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-381 下層	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]

S-382	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-383	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)、磨製片(方石骨、石骨?)]
S-384	弥生土 器(燧、壶×高、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-386	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)、石骨?、丸石]
S-387	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-388	弥生土 器(破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-389	弥生土 器(破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-391	弥生土 器(燧、壶?、破片)
S-392	弥生土 器(燧、燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石) 土 製 品[土塊]
S-393	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-394	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-396	弥生土 器(燧)
S-397	弥生土 器(破片)
S-398	弥生土 器(燧)
S-399	弥生土 器(破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-401	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-402	弥生土 器(破片)
S-403	弥生土 器(燧、丹塗リ土器、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)、丸石]
S-404	弥生土 器(破片)
S-406	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)]
S-407	弥生土 器(破片)
S-408	弥生土 器(燧、破片)
S-409	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)、磨製石骨?]
S-411	弥生土 器(破片)
S-412	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)、丸石]
S-413	弥生土 器(燧、破片)
S-414	弥生土 器(燧、破片) 石 製 品[割片(黒曜石)、丸石]

S-416	张生土 器碗片 石 製 品刻片(黑曜石)
S-417	张生土 器碗、破片
S-418	张生土 器碗片
S-419	张生土 器碗
S-421	张生土 器盖、破片
S-422	张生土 器碗片
S-423	张生土 器碗、器台、破片
S-424	张生土 器碗、破片 石 製 品丸石
S-426	张生土 器碗片
S-427	张生土 器碗、破片
S-428	张生土 器碗、破片
S-429	张生土 器碗片 石 製 品刻片(黑曜石)
S-431	张生土 器碗、破片
S-432	张生土 器碗、破片 石 製 品刻片(黑曜石)
S-433	张生土 器碗片 石 製 品刻片(黑曜石)
S-434	张生土 器碗片
S-436	张生土 器碗、器、破片 石 製 品刻片(黑曜石)、珂奇石、磨製石斧? 土 製 品土塊
S-437	张生土 器碗、破片 石 製 品刻片(黑曜石)
S-438	张生土 器盖 石 製 品刻片(黑曜石)
S-439	张生土 器碗、破片
S-441	张生土 器碗片 石 製 品丸石、刻片(黑曜石)
S-442	张生土 器碗、破片 石 製 品丸石
S-443	张生土 器碗、器台、破片
S-444	张生土 器碗片 张生土 器碗片
S-446	张生土 器碗片
S-447	张生土 器碗、破片
S-448	张生土 器高环、器 石 製 品刻片(黑曜石)
S-449	张生土 器碗、破片 石 製 品刻片(黑曜石)

S-451	张生土 器碗 石 製 品刻片(黑曜石)、石制? 土 製 品土塊
S-452	张生土 器碗、破片 石 製 品刻片(黑曜石)
S-453	张生土 器碗片
S-454	张生土 器碗片
S-456	张生土 器碗、破片
S-457	张生土 器丹磨り土器、破片
S-458	张生土 器碗
S-459	张生土 器碗片
S-461	张生土 器碗、破片 石 製 品刻片(黑曜石)
S-462	张生土 器碗片 石 製 品刻片(黑曜石)
S-463	张生土 器碗片 石 製 品刻片(黑曜石)
S-464	张生土 器碗
S-466	张生土 器盖?、器、破片
S-467	张生土 器碗、破片 石 製 品刻片
S-468	张生土 器碗、破片 石 製 品丸石、刻片(黑曜石)
S-469	石 製 品石制、丸石
S-471	石 製 品石斧
S-472	张生土 器碗片 石 製 品砾石?、刻片(黑曜石)
S-473	张生土 器碗片
S-474	张生土 器碗、器、破片 石 製 品丸石
S-476	张生土 器碗、破片 石 製 品丸石、刻片(黑曜石)
反硝化土	
灰 恣 器	皿)、蓋3、蓋o、环蓋?、环、环身、环e、皿、高环 器、器?、鉢、破片
土 器	器环、环e、环心)、环x小皿、器台、把手、破片
古 式 土 器	器环、器、破片?
筑 前 質 土 器	鉢(束腰系)
国 産 陶 器	器鉢鉢
白 磁 碗	碗(1)、碗(1) 白磁碗片(1)
阿 波 泉 煮 磁 碗	1-i-1a(1)
张 生 土 器	器高环部、高环脚、器、器x器、器、破片
瓦	器平瓦(筒瓦、格子、破片)、瓦瓦(無文)、瓦瓦、破片(格子)
石 製 品	刻片(安山岩、黑曜石)、石斧、磨石、石制、磨型?
土 製 品	平玉石、丸石
土 製 品	器高环部上製品
表土	
須 恣 器	器蓋?、器3、环、器、破片
土 器	器环、破片
龍 泉 寺 表 土 器	器碗(1) 器b(2)
肥 前 赤 器	器
国 産 陶 器	器鉢鉢
张 生 土 器	器高环部、器、器x器、器、鉢?
瓦	器平瓦(格子、破片)、瓦瓦(無文)、軒先瓦?、破片(筒瓦)
石 製 品	品刻片(黑曜石)、磨石、石斧?
土 製 品	品土塊

5、国分千足町遺跡第4次調査出土遺物補遺

第4次調査は国分3丁目に所在し、1993（平成5）年7月に調査を実施した。この調査成果については、2004（平成16）年に『太宰府・国分地区遺跡群1』（太宰府市の文化財第73集）で報告したが、未報告の遺物があったため、今回報告することとなった。

黒色粘土出土遺物 (Fig. 92、Pl. 15)

石製品

袂入柱状片刃石斧 (1) 上部が欠損する。現存長 12.1cm、幅 4.7cm、厚さ 2.8cm。袂り部分と背面には細かい敲打痕が残り、刃先付近は敲打の後研磨しているが、敲打が残っている。その他の面は研磨されている。泥岩製。

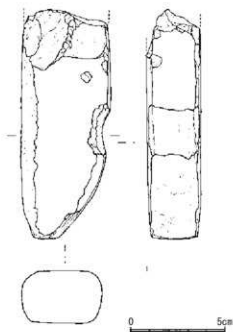


Fig. 92 第4次調査黒色粘土出土遺物
(1/2)

V、調査まとめ

今回の報告地周辺一帯は、北端に陣ノ尾川、南側に大谷川があり、2つの河川によって扇状地状の緩やかな傾斜地となっている。今回の報告した国分千足町遺跡をはじめ、国分松本遺跡、筑前国分尼寺跡の調査で、弥生時代中期の遺構が確認されているが、第7次調査で検出した流路（7SX025）より、南側で調査された国分千足町遺跡第2・3・6次調査では弥生時代の遺構が検出されていない。また、東側の筑前国分寺跡や川添遺跡でも弥生時代の遺構は確認されていない。調査地点が限られているため明確に言い難いところであるが、弥生時代中期の集落が展開すると想定される範囲は、Fig.93のように、陣ノ尾川から7SX025までの南北300m、東西はおよそ500mの範囲と推測される。集落の西端や北側の陣ノ尾丘陵に墓地が営まれている。集落南側を流れていたとみられる流路は、北東の四王寺山を水源として御笠川に流れ込んでいたと考えられ、今でも近くに水路として残る部分もある。各調査地で石包丁が出土しているが、明確に水田痕跡を確認していないため、これら流路の埋没湿地で稲作が営まれた可能性が高い。その流路は、一部湿地として奈良時代まで残っていたとみられ、7世紀末の戸籍計帳関係木簡（国分松本遺跡第11・13次調査）などが出土している。

また、流路の東側で調査された第2・3次調査では、弥生時代の遺構はほとんどなく、奈良時代後半～平安初期の掘立柱建物などの遺構が確認されている。7世紀に遡る遺構は未確認で、遺物もほとんどないことから、木簡に関連した遺構は、第2～3次調査付近には展開していないと考えられる。

今後未調査箇所や調査済みの現場を整理することで、国分地区の弥生時代中期の景観や7～8世紀の古代大宰府の重要な成果があることが期待できる。

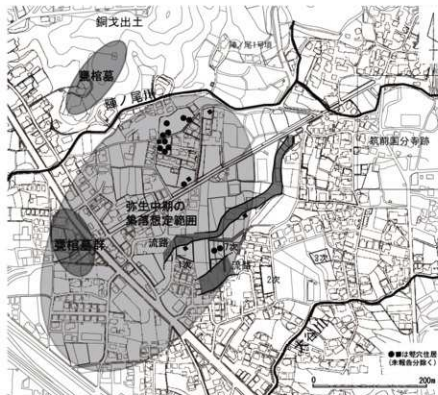


Fig. 93 国分千足町遺跡周辺の遺構状況図

参考文献

- 太宰府町教委『筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡』1981
- 太宰府市教委『筑前国分尼寺跡Ⅱ』1991
- 太宰府市『太宰府市史』1992
- 太宰府市教委『筑前国分尼寺跡Ⅲ』1995
- 太宰府市教委『筑前国分寺跡Ⅰ』1997
- 太宰府市教委『筑前国分寺跡Ⅱ』1999
- 太宰府市教委『太宰府・国分地区道跡群Ⅰ』2004
- 太宰府市教委『太宰府・国分地区道跡群Ⅱ』2007
- 太宰府市教委『筑前国分寺跡Ⅲ』2009
- 太宰府市教委『太宰府・国分地区道跡群Ⅲ』2014

写真図版



第1次調査全景（上が西、空中写真）



ISI015 検出状況（南西から）



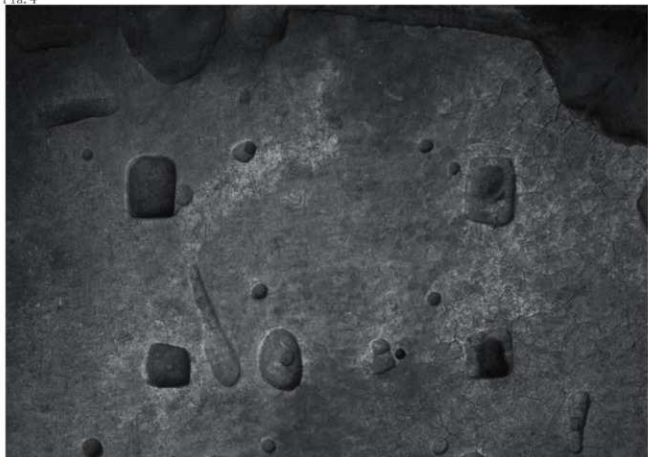
1SX030 検出状況 (南西から)



1SX060 検出状況 (南東から)



第2次調査全景（上が北、空中写真）



2SB040 全景（上が北、空中写真）



2SB045 全景（上が北、空中写真）



2SE020 完掘状況（北から）



2SK005 完掘状況（西から）



第3次調査全景（左が北、空中写真）



3SB040 全景（北から）



3SB010・040 全景（北西から）



3SI020 全景 (西から)



3SI030 完掘状況 (北東から)



3SE002 完掘状況（北から）



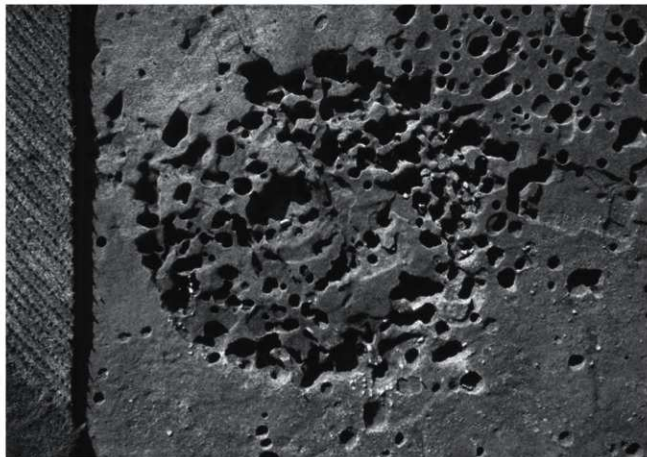
3SE036 石組み状況（北東から）



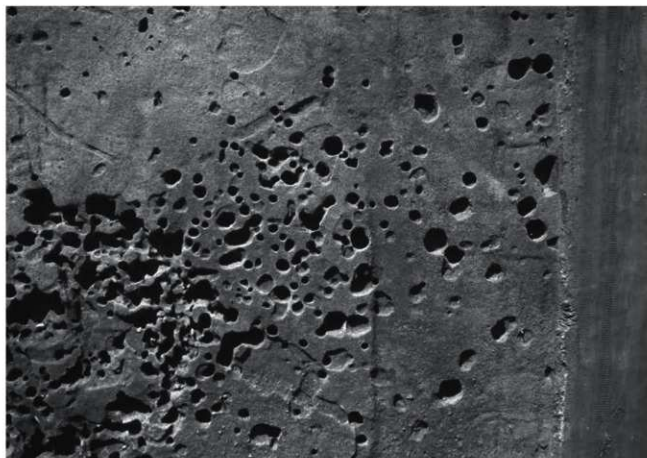
第7次調査全景（上が西、空中写真）



第7次調査西側全景（上が西、空中写真）



7S1001 全景（上が南、空中写真）



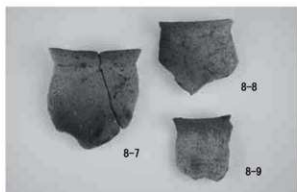
7S1035 全景（上が南、空中写真）



7SB015 完掘状況（南西から）



7SB040 完掘状況（北東から）



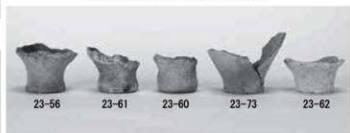
1SB065c (S-11) 出土弥生土器甕 (Fig. 8)



1SK010 出土弥生土器甕 (Fig. 9)



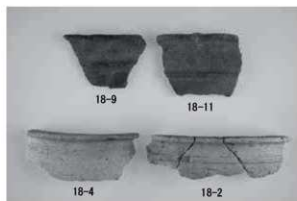
1SX001 上層出土石包丁・削器 (Fig. 17)



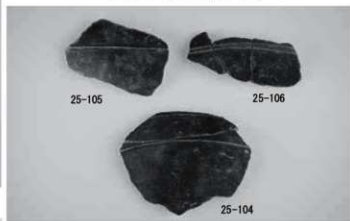
1SX001 下層出土弥生土器甕 (Fig. 23)



1SX001 下層出土弥生土器甕 (Fig. 23)



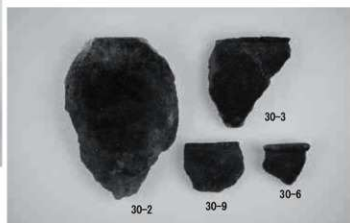
1SX001 下層出土弥生土器甕 (Fig. 18)



1SX001 下層出土弥生土器壺 (Fig. 25)



1SX001 灰色粘土出土弥生土器甕 (Fig. 30-1)



1SX001 灰色粘土出土弥生土器甕 (Fig. 30)



1SX001 暗茶色粘土出土弥生土器甕 (Fig. 29)



1SX030 出土円盤状板材 (Fig. 31-10)



2SK001 出土軒平瓦の瓦当面 (Fig. 40-10)



1SX060 出土板材 (Fig. 31-13)



3SI020e 出土土師器高坏 (Fig. 50-4)



3SI020 出土土師器小型丸底甕 (Fig. 50-9)



3SI030 出土土師器甕 (Fig. 50-16)



3SE002 暗茶色土・暗褐色土・暗灰色土
出土遺物外面 (Fig. 52)



3SE036 暗灰色出土軒平瓦 (Fig. 55-17)



7SI001 内出土石包丁 (Fig. 71)



7SI001 内出土石製品 (Fig. 71)



7SB040a 出土柱材 (Fig. 73-4)



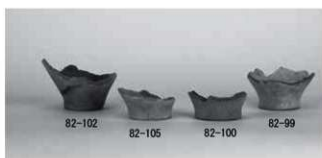
7SX025 明灰色粘土出土弥生土器支脚 (Fig. 75)



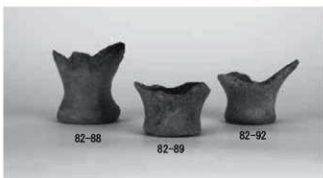
7SX025 黑灰色粘土出土弥生土器器台 (Fig. 86-163)



7SX025 黑灰色粘土出土弥生土器甕盖 (Fig. 86-157)



7SX025 黑灰色粘土出土弥生土器甕 (Fig. 82)



7SX025 黑灰色粘土出土弥生土器甕 (Fig. 82)



第4次調査黒色粘土出土柱状片刃石斧 (Fig. 92-1)

報告書抄録

ふりがな	だざいふ こくぶちくいせきでん									
書名	太宰府・国分地区遺跡群 4									
副書名	国分千足町遺跡第1・2・3・7次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	130集									
編著者	宮崎 亮一、山村信榮									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2017（平成29）年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 m ²	調査原因
	【館山権定家】	こくぶ	市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
こくぶせんでくちよういせき 国分千足町遺跡 第1次	条坊外	国分3丁目	402214		57290.0	-46000.0	19850516	19850617	281	共同住宅建設 記録保存調査
こくぶせんでくちよういせき 国分千足町遺跡 第2次	条坊外	こくぶ 国分3丁目	402214		57243.0	-45850.0	19900807	19900930	427	宅地造成 記録保存調査
こくぶせんでくちよういせき 国分千足町遺跡 第3次	条坊外	こくぶ 国分3丁目	402214		57300.0	-45755.0	19910624	19910904	840	共同住宅建設 記録保存調査
こくぶせんでくちよういせき 国分千足町遺跡 第7次	条坊外	こくぶ 国分3丁目	402214		57285.0	-45940.0	20121012	20130125	780	共同住宅建設 記録保存調査
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構			主要遺物			特記事項	
国分千足遺跡 第1次	集落	弥生	惣穴住居、孤立柱建物 流路、土坑			弥生土器、石包丁				
国分千足遺跡 第2次	集落	奈良 平安	孤立柱建物、櫓、井戸			弥生土器、須恵器、土師器 軒平瓦				
国分千足遺跡 第3次	集落	奈良 平安	惣穴住居、孤立柱建物 井戸、土坑			須恵器、土師器、緑釉陶器 瓦				
国分千足遺跡 第7次	集落	弥生 古代	惣穴住居、孤立柱建物 流路			弥生土器 須恵器、土師器				

太宰府市の文化財 第130集
太宰府・国分地区遺跡群 4

- 国分千足町遺跡第1・2・3・7次調査 -

平成29（2017）年3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 株式会社 四ヶ所

福岡県朝倉市馬田336